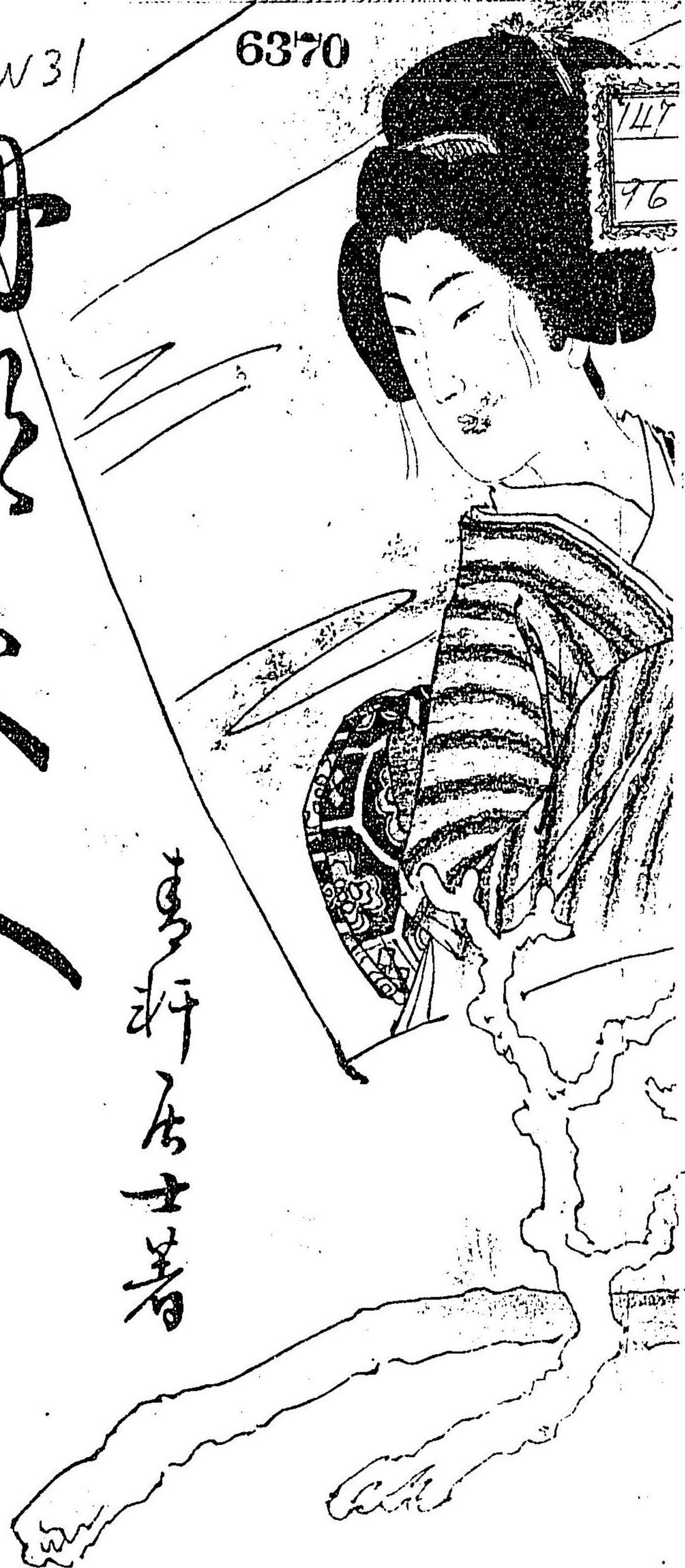


W31

6370

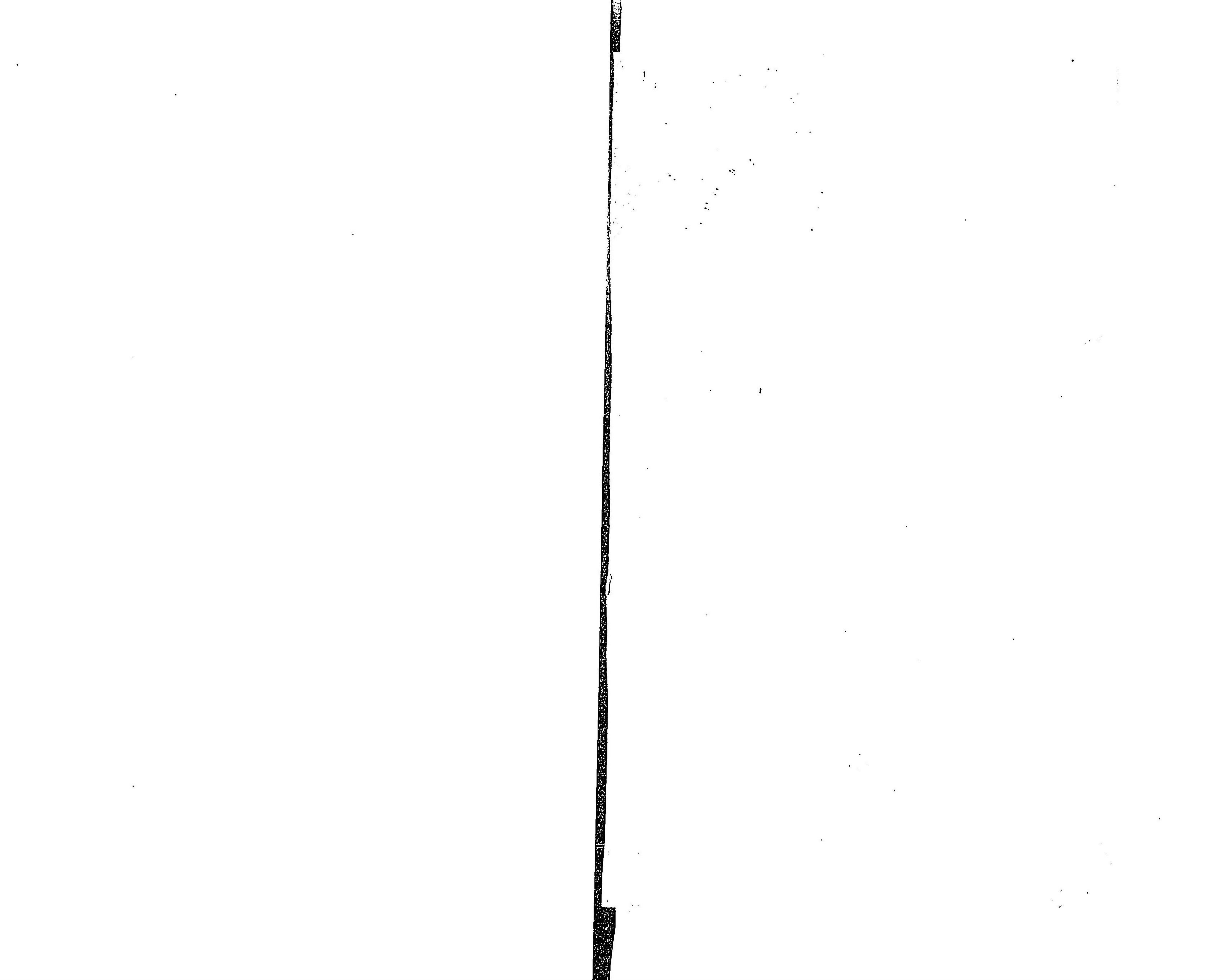
珊瑚美人

喜軒居士著



144
96

144
96







(一) 人 美 珊 瑚

珊瑚美人

第一回

青軒居士述

愛に説き起す物語と、十九世紀の始め、佛國革命の後、に起りしこと、
 とに上は王室より下萬民の耳目を驚かしたる革命黨謀略の
 細末なり、其黨派は實に佛國のみに止らず、伊太利、西班牙等の諸
 國にも關係を有して、實に歐洲全体の大事件と云ふべき騒動な
 り。頃、千八百二十一年、佛國政府は再び王室の手に歸し、上下
 共に泰平を歌ひて、彼處の演劇、此處の宴會と遊戯に餘念なかり
 し。が、會は佛國の祭日に當れり、とて、王室に關係ありと、か
 平崎家にも宴會を開き、數多の人を招きけり、今しも二人の紳
 士、此家の門に立ちて、甲、それでは君は這入らない子、此門まで

を新にす、書中の妙味は讀みて後知るべし、偶々、
 詞の請あり、聊か此數語を記して、珊瑚美人に冠す

青軒居士

なんて酷いヨ、笠間夫人の家へは随分立派な人が来るヨ、君の
 の廣政君も来るヨ、エッ弟が、そんな處へ往ってやア困るナ
 ア芳さう驚くべからず、君が此處へ来るのも同じことだ、一休平
 崎の主人はどうしてア、金があるか知らん、チット喋りて居て
 返くなつた、早く往つて英子の顔を見ようヨ、英子には僕の外に
 競争者があるから油断が出来ない、失敬」と芳雄は急いで走り
 行く、おと見送りて禮一は「あんな婦人と交際して、詰りて好い
 ことははないに」と吐きつゝ、やがて門内へ入り行けり、此禮一は
 性質温厚にして遊戯を好まず、外務省に職を奉じて、既に公使館
 付の書記官にまで擧げられしものなるが、此數ヶ月は平崎家と
 懇意になり、其令嬢光子と屢々相會せしより、今は此嬢に戀着す
 る程になれり、又此禮一の弟廣政といふは、全く兄と性質を異に
 し、職をさへ求めず、少しの財産を貰ひ受て、別に生計を立て居る

來たので澤山ではないか、一体此家には光子嬢といふ美人が居
 るもんだから、兎角人が寄りたがる奴サ、甲そんな趣味を言ふの
 ぢやアないぞ、乙「だって君は果報ものサ、光子嬢に可愛がられて、
 併し此家は家柄はよくないさうではないか、甲「ナニ家も悪くは
 ないと聞たが」抑々此二人は誰なるや、甲は當町佛國に時めけ
 る家柄にて、古く且貴き將軍高山侯爵の甥なり、其名を禮一とい
 ふ、乙なるは同將軍の二子にて、其名を芳雄といひ、王室の守備官
 を務め居るものなり、二人は尙も話しを續けたり、禮併し君伯父
 様に僕が此家へ出入すること話を話さないで呉れ給へ、芳それ見
 給へ、光子嬢と結婚したいからだらう、身分からいふと相應しな
 いからねエ、だが安心し給へ、僕と言はないヨ、其代り僕が笠間夫
 人の家へ行くことも親父には内證だヨ、禮結婚なんてえん、なこ
 とは知らんヨ、まア善い、君は笠間夫人の賭場へ行き給へ、芳時

なり、借も禮一が此家の宴會の席へ出し頃は、宴樂既に閑にして、男女相携へ、後處此處に打興せり、禮一はキヨロキヨロ眼に四方を見廻し、漸く光子嬢を認めて其側へ進み行きしが、彼方は見るより直ちに話し掛けぬ光何故そんなに恥かしがつて入らッしやるノ、好いちやありませんか人が見たッて、二人の中が好いッて人に言はれた方が好いんですヨ、何故ッて父も屹度勸めなくなりませうからねエ、禮一を勸めるのです光結婚をしろッて、アお聞きなさいヨ、父が勸める人はいやでいやでならぬ、だから何とか早く極めなければならぬのです、私は本當に貴郎が好きなのですヨ」と終りの一句は辭細し、禮一は喜びに堪へず、「私を愛して下さるノ」と叫びたり光併しどうしませう禮一お断りなさいナ光斷るッて、先は金持だし、父は是非結婚させるぞといふのですから、ア、私は戀と義理との板挟みになりまし

た、併し私は金とか名譽とかに目が暮れる者ではありません、私は實に貴郎を愛しますが、貴郎は御身分も好いのに、私見たやうなものを見て下さいませうか、禮一そんな事を言ッては困りますヨ、貴嬢を愛するからこそ斯くまで、とあどは何やら口籠れり光お互の愛はどんなものでも解くことが出来ません、ア、嬉しいこと」とさすがは少女の感情強く、櫻の顔に露を含みぬ光オヤ向ふの眼も終りたやうです、父も來ませうからあちらへおいでなさいヨ、そして父には私が明日委しく話しますから子、私の決心もよく話しますからどうぞ安心して、との言に禮一もやがて光子の側を離れ、群集の中へ混り入りぬ、斯くて禮一が此家を出しどきは、夜既に更けて乗るべき車もなく、詮方なさに靴履み鳴して急ぎしが、瓦斯燈もなき如法闇夜のうちに、光子の姿らしき眼に見ゆるやうにて、心と足とは其働さ一致せず、い

つの間にはやら方角知れぬ町へ出たり、此町は路幅狭くして左に
 右に入組み居れば、禮一は終に迷ひて、元來し道も行くべき道も
 丸切り分らず、いかいせん、茫然として辻の邊に立居しが、向
 ふに人の影見えぬ、此頃は兵亂の後、物騒なる世の中、其人がい
 なるものか知れぬ、禮一は無頼着に其人を呼び止めたり、
 寸伺ひますが、龍土町へ行くにはどちらへ往つたら宜しう御坐
 いませう、道に迷つたものです」と言ひしが、其男は止りしのみ
 にて、答へんどもせざりき、禮一に迷つたものです、どうぞ龍土町
 へ行く道を教へて下さい」と再びいふに、男、此處は山本町です
 から、まだ餘程遠う御坐いますヨ、其道を左に曲り、又右に曲り、そ
 れから左に行き、又右に行き、そして真直に行けば、龍土町へ出ま
 す、禮一有難う、随分込入て分りません子、男は黙つて何やら考へ
 る容子なりしが、男、左様私が御一緒に参れると好いのですが、實

は今弟が死掛つて居ますので、どうも禮一、死掛つて、それは御
 心配でせう、男、此近所には醫者もありません、只慈善病院へつれ
 て行くより仕方がないのですが、今日は休日、下婢も留守、近所
 の人も此祭で家には居ないものですから、誠に困つて居ます、庶
 藁に乗せては一人ぢやア動かせませんから子」と打沈みたる
 言葉の調子、禮一はしばし考へしが、元來親切なる男とて、其人の
 いかにも氣の毒で、禮一は氣の毒です、ナニ僕が其下婢の代
 りになつて、昇いで往つて上げませう、男、イヤ貴君のやうな紳士
 に、寐藁を昇いで戴てはすみませぬ、御親切に有難う存じます、
 禮一、今實は夜會からの歸りですが、ナニ人の爲にすることなら、精
 いませぬ、さア往きませう、貴君の所へ何處です、男、此二三軒先
 ですが、どうも恐れ入れた次第、何とお禮を申し上げて、好いや、何れ
 病院から歸りに、龍土町へ御案内を致しませう、禮一、エそんなこ

看板を見たり、然るに数分間にして、又もや同じやうな看板を見
 たれば、禮一少し怪しんで、これは變だ、此處は今通つたところだ、
 男も道を間違へたのではないか、一体此男は何者だらう、外套
 帽子で丸切り身體を包んで居るが、エ、なんでも構はない、これ
 も人助けだ、折しも彼方より人聲聞え、進むに従ひ足音も高らか
 に聞ゆ、今人聲がするど、屹度何處かの宴會の歸りだらうが、少し
 我々を助けて呉れば好いなと、禮一獨考へ居しが、男貴君もか
 疲れで御坐いませう、少し休まうではありませんか、禮一はさく疲
 れましたよ、誰れか来て代つて呉れよ、ば好いと思つて居るとこ
 ろです、男、イヤか察し申します、今向ふに人聲がしましたから、進
 り過ぎないうち早く往つて頼んで見ませう、其間一寸此處に番
 をして居て戴きたら、とまだ禮一が返事せぬ間に早くも男は
 駆け行きぬ、禮一は好き折に人の來りしを喜び正直に待居たり

とはどうでも宜しい、何にもせよ早い方がいいでせう」と急ぎ立
 れば、男はんに一分間も一時間です、どうもか陰で助かります」と
 と言ひつゝ、れのが家へ這入るに、敏いて禮一も這入つて見れば、果
 して病人は興寐臺の中に居るやうなれど、其戸は閉しあれば、中
 の容子は見えす、男、それで私が前の方を撥ぎますから、貴君はあ
 との方を願ひます、中を見ないで好いのですか、男、實は今夜決
 闘して負傷したので、すから、風に當ては悪う御坐いませう、から
 ね、エ、禮一成程それは御尤もです、男、それぢやア願ひませう、二十分
 ばかり御苦勞になります、と、言ひながら、こゝに寐臺を昇り上
 げ、二人は異様な姿にて歩み初めけり、斯くて歩むと三十分も経
 しかど、へど、未だ病院へは至らず、狭く曲りいねつた道のみ歩
 行て、寺院堂塔の如き大なる建物はなく、只黒く小さき家のみな
 りき、素より何處といふ見分つかねど、禮一と店頭に掲げわる大

しが向ふの角から提灯の光きらめき、二三人打連れて進み来れり見れば軍人にて近衛附の下士官なり、されども頼みに行きし病人の兄は居ず、どうした譯ぞと禮一少し思ひ惑ふて居る時、彼方では「止れ」と一聲號令を掛けぬ、從ひ居し兵卒が止ると同時、下士官は續いて「其處に居るのは誰れた、今頼まれて」と皆まで言はせず、此處へ来い」と激しく言ふ、禮一は少し可笑しければ、言はそまゝに進み行けば、肥え太った下士官正服をつけて儼然たり、諸君に遇つて實に幸ひです、今山本町で人に遇つて、其人を助けて此處まで病人をつれて来たので、兵此處は山本町だが、さすれば、近所だよ、禮一、其奴ア、頼だ、もうそれから四十五分位は歩行たらうから、土其人は何處に居る、諸君を頼みに往つたらうが、土申、言ッちやア、いけな、い、そんな人は見もしない、禮一、なんだ、狐につまゝれたやうな話だ、今其人は諸君を

頼むつて往つたところだに、土何を頼みに、此病人を慈恵病院へ昇いで往く手傳をサ、土左様か、さう言へば、今何だか一人向ふの方へ駆けて往つた奴があつた、ちやア君を置去にしたんだ、そんな善はない、病人はあの興無草の中に居るのだから、土、それぢやア中をよく見るが好らう、龜田提灯を」と指揮するに、龜田は戸を明けて中を査め見しが、大いに驚き、武藤さん、病人ではありませぬ、死んで居るので、武ナ、死んでる、龜、死んでる、とも、着物が半分脱いで血だらけになつて居ます、武、成程、そしてこれ、軍人だ、軍帽を被つて、劍を佩て居る、禮一は此話の何事なるやを解せず、「一体何が始つたのです」と言ふや、士官武藤と禮一の肩を捉へ、「貴様は人殺しだ、此人を殺したのは貴様だらう、君は氣が違つたのか」と士官は號令するが、如き調子にて「彼奴を捕へろ」と言へば、兵卒は直ちに禮一を取巻いて立てり、禮

一は言葉を正し「僕之逃げもかくれもしないから捕んでも宜しい、併しまア善く考へて御覧下さい、若し僕が此人を殺したとするなら、諸君が来るのを待て居る筈がない、そして僕の方から君方を迎へて手傳を頼む筈がない、武成程併し兎も角も警官に告げなければならぬ、ナニ僕を巡査に渡す氣か、武さう驚くことでもないサ、何にせよ君が今まで死體の番をして居た關係があるから、ねエ、其處で君等二人は此死人を營所まで昇いで行き給へ、僕は警察の方を周旋するから」と武藤士官は兵卒を指揮するにぞ、さうしても僕を人殺しとする氣か、武イヤさうも仕方がない、これが僕の義務だから、さうも仕方がない、姓名を名乗ら、僕は高山伯爵で、即ち高山將軍の甥だ、兎に角伯父と話しをして貰はう、嘘と思ふなら將軍の家へ往つて見りやア分るサ」此時龜田は聲をひそめ「あなたは將軍に遇た方があ

との爲めに好いでせうヨ」と注意すれば、武藤も辟低く「どうも此人が殺したのではなさうだから、先づ將軍のところへ往くことししよう」と此に相談一決し、死體は二人の兵卒に昇がせて營所へ送り、武藤と龜田は禮一の左右について將軍の家へ行きのぬ、人殺しの疑嫌受けることにて、素より少しも心配せぬ、豫て結婚のことにつき伯父の氣に逆はぬやう慎しみ居る禮一、今深夜に斯る体裁にて伯父に遇ふは甚だ不都合とこれにて禮一大いに心を痛めぬ、武實に貴君が言ふやうならば、此事は容易ならんことです、豈不思議なことだ、譯が分らん、武一體そんな知りもしない人があなれに頼むといふのが分りませぬ、馬鹿言ひ給へ、同じところなら、高山さんが直ぐ知るだらうぢやないか、ところが僕之前のところを知らないのだ、只公園らし

い山路と長い原と真黒な屋根があつたのを知て居るだけで、あのこのとは一切分らない、全休僕が道に迷つて居たから奴があの山本町だから、あなたが大變都合が宜しう御座つた」と三人が互ひに話すうち、莊腕なる邸近く來りぬ、是れ高山將軍の家なり、見れば門前に馬車ありて幸ひにも侯爵將軍は此馬車のうちに着せし威容を見て、直ちに正式の禮をなせり、禮一は伯父の前へ至り、深夜にね坊げを致しまして恐れ入り、實は此通り命じて車を家の方へ行らしめ、令嬢をして其出來事を知らしめざらん爲めに、家の内へ送り行きつゝ、廣政ならば随分悪い事でも

仕兼まじきが、あの體一がどんな間違を仕出したか、心で訊る側から、眞「どんな間違ですか、どうぞ酷いとをしないやうにして上げて頂戴」と早や處女氣の聲うるませば、將軍はこれを慰めつゝ、やがて戸の外へ出來りぬ、六十路に近き齡ながら相貌堂々として、意氣凛然眞に貴族の軍人たるに恥ぬ風采なり、偕て武蔵龜田は、事の起りより、高山伯爵を伴ひ來りし頼末細かに物語れば、將軍は黙してこれを聞き、朝の方を睨むが如くに、見やれり、今夜芳雄さんと一緒に食事をしました、私が私に招かれて居るところがあり、ますから其處へ行く爲め別れまして、それから先刻まで遊んで居て、其歸りがけ道を踏迷つたのが災難、今士官が申し上げたやうなとに會つたので、す時、フム、して芳雄はどうした子「證一は前に約束せしとあれば、これに何の返事もせず、眞實に困りました、若し伯父さんのお名を申さなかつたら、巡查に引

渡されたのです、どうぞ宜しいやうに取計ひが願ひたら御座
 います、野ヨシ、併しこれは是切では濟ない、明日は巴里の新
 聞におれの名まで出すだらうして其死人は警察へ渡したのか
 武、イ、軍營の方へ送らせました、何でも死人は軍人の様でした
 から、野軍人だ、夫れは大變だ、事が愈々面倒となるテ、して見ると
 先づ此事が世間に知れないやうにせねばならぬ、諸君御苦勞で
 も一緒に營所まで来て下さい、殺されたものは誰れの部下だか
 調べなければならぬから、屹度王室に反對するものゝ所業だ
 らうと思ふ、武、此方が愈々將軍の御様と分れば、私共が番をす
 る必用もわりませんから、私共は是れから歩いて参ります、野、ど
 うかさう願ひたい、と自分共は馬車に打乗り、營所の
 方へ馬を進めたり、野、あの士官等の前では話せなかつたが、今は
 二人、だから私の考へを話さう、野、私の申したのは事實です、實

に誰れが殺したのか、私は知らんのです、野、そんなことは言はん
 でも分つて居るヨ、誰れが前を疑ぐるものか、家柄に對しても
 そんなと、出来る筈はない、此人殺は何れ秘密に結んで居る黨
 派の所業だらうと思ふヨ、野、監視總監の話しては何でも革命黨が
 あつて、巴里に出入し、伊、太利の革命黨と同盟して居るさうだ、か
 ら、野、併し私は決してそんな黨派に關係はありませぬ、野、素より
 サ、併し前の弟の廣政は、まさか關係があるでもなからうが、不
 斷そんな仲間と一緒になつて遊ぶとのあるのは聞たヨ、だから
 私、今では家へ寄せないのだが、お前はそんな遊びをしないよ
 は分つて居るヨ、けれど一体お前と貴族の交際が嫌ひで、兎角平
 民など、交際するから困るヨ、外務大臣の家へも餘り行ないで
 はないか、野、伯父さん、私、之性質として餘り外へ出るとが嫌ひで、
 一人静かにして居たいもので、すから野、それに今夜は何處へ往

ツたのだ」禮一はいと迷惑さうに俯きて「平崎家へ往つたの
 です」平崎とは何者だ、商人か、何の爲めに「透さず切り込
 禮一、大いに閉口し、此族主義の伯父に、若し光子と結婚の約束し
 た杯言はい何と責めらるゝか知れねば、只々黙して返事せず、
 お前は芳雄を平崎家へ紹介したか、禮一、芳雄さんは今夜何處
 かの宴會へ招かれたやうでした、禮一、イヤ又あれも悪い處へ往
 たのだらう、此頃は何か復口を怠つていけない、明日は少し小
 言を言はう、オ、もう醫所へ来た、それぢやア禮一、萬事私が引受
 るから、お前は黙つて居るが好い、何も心配するには及ばない」
 といと親切に慰めて、やがて門内へ這入り行く、將軍の軍服と見
 ては誰れとて替むるものもなく、皆一同に敬禮を施せり、將軍は
 隊長に向ひ「僕は今夜の間違に就て甥に代つて話す爲めに來
 たのです、長それと誠に御苦勞様です、實は私も困て居るところ

第二回

です、將「御尤もです、して殺されたのは兵卒ですか、長イヤ守衛官
 です、肩に白紐の徽章がありますから、王室の守衛官だと存ぞま
 す」「エツ王室の守衛官、エツ」と將軍と禮一は共に驚きつゝ、急
 ぎ死骸を見れば、エ、無殘、殺されたものは將軍の子、禮一の従兄
 弟、即ち芳雄なりき、將軍禮一の驚愕悲歎そもいかに。

侯爵將軍の一子、芳雄は怪しき注目をなしたり、翌日は將軍一家
 舉つて悲歎に沈み、芳雄の死体は既に將軍の家へ送り來り、法
 律家及び醫師の死体検案を受けつゝあり、將軍は王室より遣さ
 れたる使者と暫時談せし後は、獨愛に沈み、令嬢は跪きて神に祈
 をなし居りぬ、道理には、今の王室を貴ぶ厨掛長の重助と、舊の王
 室を慕い居る御者長の退三とが密々話しをなし始めたり、重芳
 雄様はお氣の毒なとであつたなア、舊の王室について居たもの

偵は身の丈け低く姿賤しく、眼光は鋭きやうなれど、青き眼鏡を
 掛けたればよくは分らず、侯爵視總監の言葉もあつたから、君は
 十分熟練した人と認めますよ、どうか熱心にやつて下さい、もし
 て何でも芳雄を殺したものが分るまでは、此事が世間へ知れな
 いやうに、政府でも成るだけ秘密を望むのですから、探偵は恭
 しく「及ぶだけ尽力致しまして、此事件の起りを探偵致しませ
 う、素より軍人などに此事を話さないやうにするのと、困難です
 が、ナニ出来ないとはいありません、先づ第一切から調べなければなら
 止をして置きましたから、充分秘密に致します、此事が甘く仕
 上つたら充分お禮をします、先づ第一切から調べなければなら
 ないのですから、探偵イヤ御様に疑ひを掛るところはないやう
 です、侯私もさう思つて居ますが、併し甥の地位に就て、判事も少
 し疑つて居るやうです、探偵成程貴君のお子様がお亡くなりなさ

が殺したのだらう、退、そんなことぢやアあるまい、芳雄様は決闘
 で殺されたのだと、今も醫者が言つて居たヨ、重次郎だと、夜そん
 なことがあるか、ナ退、それもあるかも知れないが、一休相手と誰
 だらう、まア禮一樣が一番終りまで居たのだから、重君は禮一
 様に何か疑はしいところがあるか、退、イヤさう言ふ譯でもない
 が、多くとさう考へて居るやうだぜ、今も探偵が来て、禮一樣のと
 を問ふて居たから、それに將軍も禮一樣に側を離れないやうに
 と、言つて居たもの、重、ソリヤ當然サ、斯んなときは、親族のもの
 に、側に居て貰ひたいサ、「事によると、女のと何かで友達と争
 つたかも知れない、まアあの青い着物着た探偵がどうするか、氣
 をつけて居るやう」など、語るうち、呼鈴高く鳴りしかば、重助は
 起つて、侯爵の室に到れり、侯爵は、今しも青衣の探偵と談話中な
 りしが、重助に向ふて、禮一を呼べと命じたり、侯爵の前に居る探

れた後は、禮一氏が是非とも後嗣にか成りなるといふ事柄も
 わりませすから、それで殺したといふ嫌疑ですか、侯、其通りです、若
 しさうならば實にわが家の大恥辱です、探いや御満足になるや
 う取調べませす、で若しもそんなものが禮一氏の話しから分つたら
 いかい致しませう、侯、それは君一人の胸に藏めて置いて下さい、何
 分わが家の恥辱にならないやうにしたいものだから、此時戸
 は開けて禮一入り来れり、其容子は伯父の侯爵より一層心配の
 様なりき、侯、そんなに歎きなさるな、何事も天の命だから、禮一
 は涙を拭ひて其處に坐せり、侯、今朝の話を此方の前で今一度委
 しく話しなさい、實は國王の仰せで此方に探偵を任せと言つて
 れ、使はしになつたのだから、そして此方の名は「と侯爵が名を
 知らんことを求むる」と見て取り、探私の名は「路橋」と申しませす」
 侯、ハア路橋さんか、此方にお前から委しく話しをなさい、犯罪人

を見付る目當もあると言ひなされるから、禮一は此探偵を見て、
 少し驚き冷淡にすまして直ちに言へり、私には只伯父と判事
 に話したことを繰返すばかりですが、お話を願ひます、詰らないとも大變
 をしませう、路でと委しくお話しを願ひます、詰らないとも大變
 都合の好いことになるものですか、わの昨夜芳雄さんにお遇
 ひなすつたのです、ナ、禮一左様、昨夕五時に私が守衛局へ行き、芳雄
 さんと其他の人と一緒に出て茶屋で食事をして、それから芝居
 へ行きました、芝居を出てからは他の人は歸つて、私と芳雄さ
 んと二人は馬車を雇ひ山王町まで往つたのです、探、それからわ
 の平崎家へ往つたのです、ナ、私は貴君を平崎家で見ましたヨ、
 禮一は素よりこれを知れり、されど今度で此男が探偵なりとと
 知らざりき、然るに今斯くと知れては、平崎家にては何故斯くの
 如き探偵を招待するやと、咎しめぬ、侯、侯は禮一を睨みつゝ、其様

ですナ侯左様右の眼を突たやうです、これたしかに伊太利
 の殺し方です、路さう言ふ殺し方はよくあることで、併し芳雄
 様が承知の上でした決闘だといふとは確です、御覽になつた逆
 り、帽子も衣服も整然としてあり、芳雄様の劍に血がつい
 て居ますから、相手も傷を受け、逆ひありません、尤も此決闘
 は突然であつて、止むを得ず、芳雄様がなすつたのでせう、若し
 意する隙があつたら、自分で介添人を置いた筈ですから、侯一
 闘を夜間するとはないで、ないか、路、それが突然起つたから
 せう、何れ何處かの庭か家の内、でやつたに違ひありませ
 ん、芳雄様は守衛官の正服を着けて居られ、成るべく人に見
 られないやう秘密にやつたものだと考へます、そして決闘の
 原因に付ては、私は確かに政治上の怨みから起つたと思ひ
 ます、何れも今の政府を倒さうとして居る黨派があるやう
 ですから、其

の交際するものは皆斯んな連中だと心のうちに言へり、斯くて
 侯爵は顔をしかめ、禮一は面目なげに首をうなだれ、路橋は得意
 に、喋り出しぬ、さながら判事、罪人が、造ふた町の容子、は、
 ひ究めて最後に「貴君が犯罪人に造ふた町の容子、は、
 るか、禮善くは覺えて居ません、が、一度其處ら歩いて見
 たら、かど見當がつくかも知れませんが、只今覺えて居るの
 加庭があつて、其周囲に長ひ屏があつて、其堀の隅の方に道
 つた、ただけです、して其男、其暗い細い道の入口に番人の
 に立ち居たのです、侯爵は探偵と路橋との問答を聞きながら、
 きより室内を歩み居しが、突然立ち止りて、禮一、前には其
 覺えて居るか、禮善は見ません、で、併し身体の容子、其音調
 は覺えて居ます、宜しい、其處で私の考へを一應申し上げませ
 う、無様な話をするやうですが、芳雄様は劍で突き段されたの

仲間が今の政府の高位の人をこれまで幾人も殺して居ます其
 申譯は決闘をして死んだのだと言ひますけれど、先方では決闘
 に慣れた勝利を使つて是非とも殺す積りなので、芳雄様も全
 く其手に落たのでせう、何れでも伊太利の陰謀黨が佛國へ
 入り込んで居るといふことは聞かされた事、伊太利の奴等ですか、わ
 れはもう分つて居ます、其奴等が雇はれて人を殺すことがあるか
 も知れませんが、まア何にして私に充分盡力せしませう、其處で
 今一ツ大切な事を承りたい、それは芳雄様が山王門を去て何處
 へ往つたのです、職左様、實は餘り申憎いことですから、伯父様に
 も判事にも申しませなんだが、芳雄さんは賭場へ往つたのです、
 何でも伊太利の婦人で笠間夫人とかいふものゝ家へ」侯爵は
 いやな顔をなしたり、路橋は點頭つゝ、路成程、妙だ、其家は知て居
 ます、其女は伊太利の男爵夫人だと言つて居ますが、怪しい女で

第三回

す、それに短があつて中々美人ですが、此奴もどうも怪しい奴で、
 疾うから眼をつけて居たのです、宜しい分りました、早速出掛け
 て往つて探偵をして見ませう、どうやら手掛がついたやうです、
 もう一刻も猶豫が出来ません、左様なら」と路橋は急ぎ立出ん
 とするを、侯爵はついて出て小聲に「軒は犯罪人ではなからう
 か、豈勿論です」侯は聲高く「それぢやア何分宜しく。」
 探偵路橋が高山侯爵の家へ来りし日の夜、笠間夫人の家にて
 例の如く夜更けて人々集り来り、ランプ撒き投なを聞はし
 賭博を眺み居たり、元來此笠間夫人といふ名前、以太利より来
 りし婦人にて、一人の姫と共に住居居るが、此姫を英子と呼び、容
 色衆に勝れ、實に絶世の美人なり、年を二十五歳とか言へど、既に
 寡婦なる由なれば、數多の浮れ男共の眼を引き、特に笠間夫人が

とす、伯爵は来ておいで、すか」と手軽く言ひて、番人の答いかんとシツと其顔を見詰めて、番人は一向平氣に「まだ高山伯爵を見掛ません、無論もう来るでせう、昨夜は見えませんでしたか、併し内と、イエ来ませんでした、オ、さうだ、門口で見掛ましたヨ、併し内へは這入らなかつたやうでした、路さうですか、何故這入らなかつたのです、番よくぞ知りませんが、何でも友達に遇て一緒に出掛たやうでした」路橋は意外にも番人の口より芳雄が此家の門前にて知人に遇ひ、誘われて何處へか行きしことを聞き出せしが、偕て番人の言ふところが眞實なりやいかいと伺ふに、路橋の鋭き眼に偽りとは見えざりし、番人は言葉を續けて「お這入りなされば、誰か芳雄さんを知って居るものが居ます、さうだ、從兄弟の廣政さんが居る筈だ」と言ふに、路橋は成程禮一の弟廣政が

其家を公閱して何人にてモ企あるものは來つて遊ぶを許したれば、年少き男も競ふて夫人の家へ來り、英子と戯れ、賭博をなすを此上もなき樂となせり、夫人の生活之實に豊にして、貴族とは誰しも思ふ程なれど、其費用の何處より來るかを問はば、知る人一人もなきに甚だ怪しむべきことながら、素より遊び場のみ斯ることを問ひ究めんとするものあらざりき、此處に集るものうちにと王室派もあり、革命派もあり、種々様々なれど、革命派の人の多きは明らかに見受られたり、中にも不思議なるは伊太利人の一人も此家へ出入するものなきとなり、斯くて探偵路橋は此日の夜に入りて、馬車に打乗り夫人の宅を訪へり、門より入りて音なへば、内より一人の番人出來り、顔色少し黒く、眼の色よりするも伊太利南部の生れとは見えぬ、番人不知ぬ人の入來りたる爲め、けん顔して、つくづく路橋を眺め、其名を知らん

現在從兄弟の葬式があるにも構はず賭場遊びとは不都合な
 とだと思ひつゝ「それは有難い、そんなら廣政さんが私を笠間
 夫人に紹介して呉れるでせう、イヤ芳雄さんを待つにも及ばな
 い」と狐言のやうに言ひつゝ、静かに梯子を上りて、偕て廣政と
 言つたところが、まだ顔を見知らないのでから誰かに尋ねよう
 と先づ室に入れば、彼方の欄干に凭れながら手紙讀む男あり、イ
 ヤ有難い平崎の書記勝澤君が来て居るナ、此奴に色々聞てや
 らう、と突然勝澤の後より其肩を捉へ「ヤ勝澤君、君も此處へ遊
 びに来るのか」勝澤は人の來りしに驚きて、急ぎ手紙をポケット
 ットへ捻込み「なんだ君か、路僕サ、僕なんどは此處へ來るとい
 ふ年でもないが、餘り英子の評判が高いから、一寸見に来たのサ、
 處で君は朝まで此處に居てよく平崎の用に差支へがない子時
 ナニ朝は用がないサ、路アそんなとは君の權利にあることだ

から、取て僕の關り知るところにわらずとして、時に君此處の姉
 人達に僕を紹介して呉れ給へ、君は毎晩來るからよく知て居る
 だらう、時毎晩來やしないが、今夜は少し用があつて路イヤ何モ
 君を賣るのではない、僕は平崎の主人にも君の來て居たことな
 どは決して言はないサ、ア僕を案内して呉れ給へ」勝澤は直
 ちに案内し始めたり、抑々此勝澤春吉といふは、其父は地方の大
 地主にして、王室にぞ致つて忠實なる人なるが、其一子春吉を
 へ出し、王室に關係ある人の家に預けて、法律を學ばしめんと思
 ひ、偶々平崎家に紹介する人ありしかば、是れ幸ひと早速同家へ
 預け日々法律學校へ通はせぬ、されども春吉は遊惰に時を費し
 父にも肯す現王室の政治を好まず、之れに反對なる共和黨の人
 を好んで交り居たり、斯くて春吉は日々平崎の用事を勤むるも
 のなれば、光子嬢とも親しくなり、父の平崎が留主の折などには、

美人を見に来たのだから、併し實を言へば骨牌も嫌ひでないか
 ら、席に仕ようと思つては居るのサ、勝ぢやア英子は向ふの室に
 居るだらうから、君は其方へ行き給へ、僕は向ふの散子投の方へ
 行くから」と春吉は早くも、あちらへ駆け行きぬ、路橋は勝澤に
 分れしを結句幸ひと思ひ、獨りにて穿鑿を始めけり、先づ初めに
 廣政の容子を伺はんとて、夫人の居る室の方へ向ひしが、多くの
 軍人が散子投をなし居るところより、不意に「高山君は甘ひヨ、
 七度續けて勝たナ、ナイ勝逃は卵怯だ、ナ、今直ぐ来るか、好し」
 といふ聲聞えぬ、路橋は直ちに其側へ寄り、軍人之尚聲高く馬
 高山君の従兄弟が殺されたといふのは本當か、何でもそんな附
 さを聞たせよ、本當サ、氣の毒なことをしたヨ、因誰れが殺したか
 分つて居るのか、決闘で死んださうだが、其起りは何だ、工少しも
 分らんさうだ、正服で劍をぬいて居たさうだヨ、甲ぢやア軍人と

互に樂しく談話することもありき。借も探偵路橋は春吉に案内
 されて、笠間夫人の宅の内を徘徊せり、路橋は一向不案内
 だが、此處に居る人々の名を教へて呉れ給へ、路橋はあちらこちらを
 此處へ来て遊んで行くばかりだから、路橋はあちらこちらを
 見廻しながら、「此處を一口に賭博場だと言ふのは酷い子、中々
 好い人が来て居るではないか、夫れに政黨の事を復是れ言ふ家
 でも無いと見えて、王室派の士官も居れば、共和黨の人も居るや
 うだ、勝さうサ、院分色々の黨派の人が居るヨ、路主人の男爵夫人
 は何處に居るのだ、勝、あの室の隅に居る、ソレ骨牌に夢中になつ
 てる夫人サ、路して姪の美人といふは勝ア、英子か、あれはいつ
 でも室に引込んで居るヨ、あの夫人の居る室の側にある別室に、
 併し僕なんぞの書生が君を紹介すると、向ふは何だか變に思ふ
 ヨ、路イヤ、僕は婦人達に紹介して貰はなくとも、善い、只だ評判の

此處に遊んで居るのは不思議だが、イヤ、此奴も分つた全体
 侯爵將軍が極々の王室派だから廣政とは中が好くないのだら
 う、ム、さうだ、斯う鑑定がついた以上は、もう撒子投もむだなこ
 とだ、と善い加減に其場を立退き、ハテ勝澤は何處へ往つたらう、
 彼奴どうも悪さうな奴だ、平崎で抱えて置くのは危険だ、なとム
 色々のことを思ひめぐらし居る後から突然肩に手を掛け「路橋
 君どうして此處へ来たんだ」と言ふものあり路ヤア辨野君か
 餘り此處の評判が高いから来て見たが、ム、成程、君は新聞記者
 だから斯ういふところへは是非來ねばあるまい、辨だが子、僕は
 王室派の新聞記者だから、斯んな共和黨だの帝政黨だの連中が
 集るところへ來るのは、實は危険サ路さうか共和黨が多いか子、
 大抵王室の軍人ばかりのやうだが、辨吐惚けちやいけな、君に
 して氣のつかん筈はないヨ、此處に居て下手をやるど共和黨の

の決闘であつたのだナ、イヤ、欺されて殺されたに違いない、し
 て此處には市の人を捕んで居るものが澤山來るさうだ、併し
 此處で何も争ひが起つた譯ではないサ、昨夜は芳雄君は來な
 つたが、廣政君は相變らず永く遊んで居たが、チイ廣政君早く來
 ないか、勝逃はならんヨ、此談話に路橋は愈々芳雄が昨夕笠間
 夫人の家へ來らざりしこと、及び之れに反して廣政は終夜此家
 に居りて、彼の事件に之關係せざりしことを確め得たり、され
 も尙ほ廣政の容子を探らんとて、おのれも撒子投の仲間へ入ら
 んとを求めたり、見れば廣政がいさくとして敏捷さ舉動、顔こ
 そ兄の禮一に似たれ、其性質は全く異なりて、所謂熱血男子なり、
 其相貌人殺しなどすべき男にわらず、特に廣政が芳雄を殺して
 何の益かある、若し又共和黨が殺したとするも、わさく、廣政を
 擱んで殺させる筈がない、併し從兄弟の非式があるにも構はず

奴等に酷い目に遇ふヨ、君あの壺の向ふに殺子投の箱を持って居る男を知らないか、あれも其一人サ、ソレあの珊瑚の留針を刺して居る色の黒い男と話しをして居る人物サ、ア、そして珊瑚の留針を刺して居る男は、舞あれも政治の意見と異にして居る男で、西班牙革命黨の隊長だ、暫く佛蘭西へ来て居るのださうだが、毎晩此處へやつて来る路、何だか一度見りやア、忘れられな

れば、路橋を深く之れに注意したり、此紳士の名は何と言ふかム、比留問、そしてまだ何か名がある、ハ、テナ、併し中々立派な紳士だ、ア、舞さうとモ、夫人に親しい人は皆立派サ、舞夫人に親しい人か、それぢやア、時々来るのだ子舞さうだ、僕の来る度にいつモ紳士は来て居るヨ、して英子とは餘程親しい容子だ、何だか二人で密々話しをして居ることも見掛けたヨ、舞君あの紳士が昨夜も来て、晩くまで此處に居たかどうだ、知らないか、舞、なんだ、飛だことを尋ねるが、僕はそんなことは知らない、だが君望むなら案内しよう、兎に角英子を見給へ、腰ぬかしても負つてはやら

なる人物はあらざりき此奴ア變だ此處には僕の近所に居る商人が三人も居るヨ、皆共和黨の奴等だ、舞笠間夫人は政治上の意見はないのだから共和黨でも王室派でも構はないのサ、煙の英子も矢張り其通りサ、今に今日の變事を君は聞た、ナニ高山侯爵の息子が殺されたことヨ、現に内務大臣が内訓を發して、新聞に其事を書かないやうにしたが、路橋はわざと吐惚けて「へエ、そんなことがあつたのか、わの息子は王室の守衛官ではないか、して見ると何か政治上に就ての暗殺だらうサ、僕はさう思はないヨ、わの芳雄といふ男と好い人間だがねエ、此處の英子が大變慕ふて居たのサ、處が英子には外に澤山競争者があるから、其内の一人が殺したんだらうヨ、君の言ふ通りなら、英子といふ女は劍呑な女だねエ、何にせよ自分を慕ふて居た男が殺されても平氣で居るとは、随分酷いちやないか、舞イヤ英子は

まだ其事を知らないだらう、併し英子は怪物だヨ、調べて見りやア、叶々面白いくことがあつた、サア早く行つて怪物の顔を見給へ、路橋は此事を聞き、偕は芳雄を殺したものは英子の戀人ぢや、政治上の暗殺ではなかつたか、と急に考へが、或ひつゝ、辨野の導くまゝ、終に英子の室に入れば、光彩燦爛絶世の美人は、双眼にうつりぬ、之れを平崎家の光子嬢に比するに、其眼は一層愛嬌に富み、其顔の色合も一倍の艶を保てり、只だ少し情に乏しき顔立なるは、白璧の微瑕ども言は、い言ふべし、英子は今しも一人の男と物語れり、ハテ何者ぞと見れば、いつの間にか、高山廣政が來て居るなり、路橋何だか廣政が異に、英子と嬉しうに話して居るぢやア、ないか、從兄弟の殺されたを知らぬのだらう、か、舞知るも知らぬ、ない、從兄弟の殺されたを知らぬのだらう、つて居る人間ぢやア、ない、畜生ッ、革命黨め、イヤ革命黨の惡口を

子のありさうな話したが、好し、あの紳士が歸るときに、あつてやらうと、路橋は心に此企を起せしが、偕て今かのれが居る位置を見れば、彼の三人が話し居た室の入口とは僅かに二三歩隔ちたるところに立ち居るなり、斯くて永く此處に居らば、必ず腹はるべし、さりとて此處を離るゝはいやなり、いかいせん。と打案じつゝ、側を見れば、二三歩先のテーブルにてトランプの勝負を試み居る一群あり、此奴傭強だ、此仲間に入りて始終容子を伺ふべし、と漸くに心を定め、斯くて其仲間に入らんことを求めたり、此仲間には、幾て年少き軍人なれば、何條否むことのあるべき、さア這入り給へ、やるべしと勇ましく、愈々勝負を闘はすに、路橋は只願別室の三人を氣にして、勝も負けるも無頓着点でも王でも何でも構へぬ骨牌の出し方「君はどうも奇麗だ、紳士といふものはさうなくてならぬ」と賞められて、路橋ハッ

第四回

うツかり言へない、どうだ伊太利の美人は、斯うも美人だ、あの美人の爲めに決闘が起るなどは無理でない、僕等も決闘する氣になる、舞飛だ御熱心だ、ところで僕は今夜要中な集會があるから、是れで失敬する、君は精出して、涎でも練り給へ、アハ、ハ、ハ。探偵路橋は、今しも英子と廣政と彼の珊瑚の留針刺したる西班牙の紳士とが何やら頻りに話す道裡に立て、どうも此三人が怪しい、廣政は人殺しするやうな相貌ではないが、併し辨野が言ふ通り、のやうな男ならば、斷然たる許しは與へられぬ、何にせよ此三人の談話が聞きたいものだ、と考へながら、子細に其容子を、見るに、怪しや英子の髪にも珊瑚の留針刺しありぬ、ハテ此奴ア妙だ、あの西班牙の紳士も珊瑚の留針を刺し居るに、特に西班牙のものば、斯んな留針を用ゐない筈なのに、何だかこれには容

ど心づき、彼方を見れば老紳士と若紳士とが何やら野高に争ひつゝ、果ては終に決闘を納しぬ、物騒なところだ又決闘か、それぢやア夕べの芳雄も斯んなことで、誰れかに殺されたのか知らん、うツかりして居るとどうやら決闘の申込でも受けさうだ、さるにてもあの三人はどうしたと別室を見れば、門口の番人が何やら話しに來たと思ふ間に、皆打つれて客間の方へ行きたり、ハテ何の用で行くかと仰上りて覗きなぞする時、「チイ君、ぼんやりして居ちやア困る、勝たヨ、金を納め給へ」と言はれて、踏ヤア失敬、どうも君方が決闘する杯と言ふもんだから心配でならんヨ、紳ナニそんな心配し給ふな此三月ばかり、決闘しないから、實はしたくツて思はないからだ、それに君昨日は王室方の守備官が殺されたから警備をしなくちやアならない路、今何だかそんなことを聞たが一体事の起りは何だ」と何気なく問ひ掛けた

り、紳君は是れから僕の決闘を見に來ないか」と突然に言はれて、路橋何の答へも出來ず、黙つて又もや向ふを見れば、殿政は再び敬子投の仲間に入り、西班牙の紳士は他の紳士と談話を始め、英子之笠間夫人と話し居たり、路橋は先づ安心だ、おれを怪しむ容子は無いと尙其處らに注意をなし居るうち、向側の人が一人二人立去りしと思ふうち、何事よりか争ひを始め出し、又もや決闘の約束をなしたり、エ、何だ、よく決闘をするどころだナ、どうも不思議だ、愈々危険だと呆れ居りぬ、呆れた顔の眼先へズツと入り來りし人は、エ、驚いたも、さすがの路橋身慄ひして驚きたり、是れ何者ぞ、今しも西班牙の紳士と話し居たる有名なる傑なりき、傑の名と藤田大佐、革命黨一方の大將にして、嘗て、屢々王室を覆へさんとしたることありて、其折之れを捕へたるを探偵路橋なりしなり、ハテ此奴は本堂に大變なことになる

て来た、下手なやつと家へ歸らないうち殺されるかも知れない、どうしてやらうとモチくするうち藤田大佐はニコく笑ひながら「どうです大分御盛ですナ紳イヤ僕の方は大負サ摩ヨシく僕が誓を討つサ」と路橋の顔をよくも見ず、直ちにトランプに取り掛れり、此藤田大佐の年まだ四十に達せず、愛嬌ありて、華美なる紳士なれば、見たところ軍人とは見え、路橋はさながら、針の筈に坐するが如く、あの通り平氣な顔つきで居るが、捕へたわが顔を忘れる氣遣ひなし、併し大佐程のもの自分でこれを殺すこともあるまい、何れ下手のものに言付るであらう、言付るとして見れば必ず此席を立つべし、其隙に逃出すことにせん、さうだ、さうだと點頭しも、偕てなかくに落つては居られず、顔色青ざめて勢ひなくなりしかば、藤君どうかしたか、病氣かと尋ねぬ、路橋どうも工合が悪くなつて来た、連もれ相手になつて

と居られん、僕は是れ切りで御免を蒙らう、紳成程悪さうだ、止むた方が善らう」此時藤田は左も重々しく「ぢやア先づ止めたが好らうヨ、君ともかくも此處へ出て新鮮な空氣でも吸ふか好いサ」と言ひ放ちジロリと路橋の顔を眺めぬ、路橋はブルくと慄へあがり、ソコくにして席を立ち、四五歩ばかりは左も苦しげによろめきしが、あとは一散走り辛くも虎口を免れ出たり。藤田大佐はやがて西班牙の紳士のところへ到り、小聲にて「怪しい奴が来たから少し話したいのだ」と言ひ棄て、彼方の室へ行けば、紳士はついて出来り「なんだ探偵のことか、本當か、先刻番人が注意に來たが、藤本當だ、大丈夫違はない、四年前僕を捕縛した男だ、此家の容子はすツかり見て往つたに違いない、紳ハ、ア何だか怪しい奴が僕と廣政と英子との話しを聴て居ると思つたに藤第一僕の居るのを見たから、充分怪いと認めに相

逃ない、もう今頃は警察へ往つたかも知れないゾ、紳フ、ン逃したのには不味かつたナ、摩今更悔んでも仕方がない、併し渠奴の来たのは高山侯爵の子が殺されたからだからヨ、ソラあの芳雄が度々来たらう、それにしても此方から早く事を仕ないと、劍呑だ紳ヨシ、明日までに此處を引拂ふと仕よう、僕は何時でも引掛へるやうに計畫してあるから、摩さうすると是れから何處へ集るのか、紳、明日日本部へ知らせるやうに仕よう、摩宜しい、僕も本部へ往う、夫れから廣政と是非とも吟味しなけりやアなるまい子、何にしても、伯父が貴族だから人も疑ふサ、紳、夫れは僕が今夜吟味すると仕よう、摩それでは明日又お目に掛らう。

第五回

西班牙の紳士と藤田大佐との談話は僅かに一二分間の事なれば、誰れとて怪しむものもなく、やがて夜も稍々更け行けば、來客

も追々に歸り行くなり、只だガヤ、と罵り居るものは、彼の決闘を終せし二組の連中のみ、西班牙の紳士は靜かに其處ら見死りつゝ、密かに彼の別室の内へ入り來れり、此室に之、笠間夫人と姪の英子とより外に人は居らず、紳士は何やら手眞似をせしかば、笠間夫人は立上りて、「何が起りました、紳探偵が来たから逃なければならない」笠間夫人は落つき拂つて、「さうですか、何れそんなことがあるでせうと思つて用意は仕て置きました、だが私をどうして下さる紳、何れ明日さめるやうにするヨ、ナニ伊太利へ歸りたい、其奴アだめだ、行けば直ぐ捕るサ、われ、の身の上が自由になるまでは、逆も國へは歸れない、笠、私はつくぐ、巴里が嫌になつたの、紳、尤もだ、だが私も前を信じて斯うして居るのだから、少し我慢をしてお呉れ、笠、夫れは貴君の仰しやることなら、どんな苦しい思ひでもしませう、固より國の爲め主義

の爲めに生命を投出して居るのですから、種其處で今頼みたい
 ことは、少しの間此巴里を去つて田舎へ往つて貰ひたい筈何處へ
 でも往きませう、併し貴君にねがはれ申す前に申して置くことが
 あります子が、英子は貴君に身を任して居るのですから、あの娘
 のことを心配してお遣りなさるのは勿論のことですヨ」
 も重々しく言ひ出たり、今更事新らしい話したが、英子は何か
 不平があるのか筈、どうして不平どころか、それこそは貴君を
 信じて居ます、素より善い身元の子でもなかつたに、貴君のやう
 な貴族の妻になつたのですもの、種こんな追放人の妻になつて
 筈、今こそ追放人だけれど、愈々壓制家の手から伊太利を救ひ出
 した曉には、再び舊の公爵ですもの、種ア、私が是れまでの生涯
 のうち色々困難があつたが、其度に英子が助けて呉れた、此恩
 は決して忘れないヨ、それを思へば今のやうなあんな賤しいこ

とをさせて、譯の分らない人達から賣淫女と思はれ、色々のこと
 を言はれて居るのを見ると、實に可愛さうで堪らない筈、私のこ
 どもみんなが遊女か何ぞのやうに思つて居ますが、私は少しも
 構はないで安心して居ます、斯んなことをするの、實は革命黨
 の人を自由に集らせて、伊太利の爲めに力を盡して居るのです
 から、種さうだ、お前方二人の力はわれわれの内第一だヨ、ね前
 方の力でわれわれの仲間も段々盛んになり、今では巴里に五十
 ケ所の支部が出来た、併し今はそんなことを話して居る場合でな
 い、お前々何時も泊つて居る家に密とかかくれておいで、何れ明日
 委しくおどの話しをするから、筈、それでは英子は貴君と一緒に
 居るのでせう子、つれて往つてねやりなさいナ、種イヤ、中々巴里
 には居られない」と、紳士は話しを切つて、密かに外面へ出行きた
 り、抑々此西班牙の紳士といふは、實に西班牙の人にあらずして

伊太利の貴族なりき比留間公爵とて同國の名家なり、伊太利に於て極端なる自由主義を唱へ、遂に追放されて、今は此佛國に外り、又モや黨派を築め自ら之れが總理となり、密かに王室を覆さんと企て居るなり、今や比留間は外に待合したる馬車に飛乗りしが、待居し英子と比留間の手を取て「大變運う御座いました子、待遠でしたヨ此夫人に話しをして居たからサ英さうですか、私は明日又夫人に遇ひませう子此イヤ遇へまい、此後何時遇へるか知れないヨ、何故ッて探偵が家へ入り込んだから、われ一同行は解散したのサ、處でわの夫人はわれくの爲めに能く力を盡して呉れた人だから、今巡査などに捕つて酷い目にでも遇ふやうでは氣の毒だから、成るべく遠くへ逃す積りだ英、それはどうも併し私は探偵が来たお陰で助かりましたヨ、毎晩々々いやな思ひをしましたから子比さうサ今も夫人と言ッて居たこ

とサ、定めしつらいことだらうと察して居たヨ英では貴君は私を愛して下さるの比知れたことサ、何を疑ふんだ英、疑ひはしません、私が私に之競争者がありません、競争者とは英、競争者とは貴郎の本國伊太利のことサ、國と私とはどちらの方を愛します、比國の爲めに之生命を差出して居るが、併し國に對する義務とお前に對する愛とが心に争ひを生ずるやうな事なれば、多分國の事を重く思ふことは出来なヨ英、でも多分です、ね、此私とお前とは一心同体で、二人とも心を一ツにして國の爲めに盡すのだから、縦ひとんなことがあつても二人の中は忘れられないヨ、そしてお前の爲めに、今でどわれくの仲間にも佛國の貴族で一方の長たるものが出来たから子」と比留間は何やら嫌味らしく言へり、英子は顔をしかめたりしが、「誰れがわれくのこのことを密告したのでせう、比誰れだか知らない、けれど

も、藤田大佐の言ふには、いつもお前を慕ふて會ひに来た高山侯の息子が殺されたから、それで探偵を出したのだらう」と英子はしばらく黙せり此の芳雄はお前を慕ふて居ると言ふたらう「英子は「さう」と答へしが、直ちに言葉を續けて「けれども殺されたと言ふちやありませんか此さういふ評判サ英殺したのには誰れでせう、御存じない、するどわれくの仲間ではないのですねエ此さうサ、併しお前それを糺して何にする英でも多勢殺されたものは皆われくの仲間の仕業でその比ふ、だが芳雄は全く暗殺らしいヨ」と言ひながら英子の心配らしい顔をながめ「私はお前の心を悟つて居るヨ、お前は私が芳雄を妬んで人を使つて殺したと思つて居るだらうが、イヤさうに違ひない、本當にお前を慕ふて来るものならば、或ひは分らんサ、それ計りでなく主戦の爲めもあるから」と凄き眼を光らし

ぬ斯くて馬車之終に公園の側なる一軒家に達せり、是れ英子のかくれ家にして、是れまでは此處より密かに笠間夫人の家へ通ひ居りしなり、笠間夫人を伯母とは言ひ居れど、其實何の關係もなきなり。二人はやがて此家のうちへ這入り英ア、もう私はあんなところ、いやな人と一緒になつて、詰らん話をして居ることとは出来ません、何時でも斯うして二人楽しく暮して居たいワ此ア、困つた、實に困つたヨ、もう二人が別れなければならぬいことになつたから、思ひ出すと六年前に教會で二人が牧師の前で婚姻したのは夢であつた、無事で居ればお前は公府夫人と言はれる身分であるのに、英どうした譯です、又國の爲めに何かするのですか、もう仕方がありません、貞郎と一緒に死ませう此併し此處までやつて来て、今更脆ひ死様をするのも残念だ、其處で二人が一緒に居ては直さ捕つて殺されねばならないから、仕

方なしに當分別れるのサ、若し二人がクツクして居ると、只さへ人の眼に止るお前だもの、直ぐ捕まる、お前が捕まれば私も捕るに違いなし、さうなれば折角組織した珊瑚黨は忽ちバラツサ、だから可愛さうだが今に黨派のうちから廻す車に乗て、エッ今直ぐですか」と英子は驚けり此さうサ、だからグツクしては居られなと言つたではないか、して英吉利へ往つて貰いたい英いや、英吉利なんて、私は死んでモいやです此さうがいを言ッちやア困る、もう二月か三月のうちには佛國政府も覆へし、伊太利も一掃の起るやうに計畫してあるのだから、さうなれば歸つて来て好いのだ英いやですヨ英吉利なんて往くのは、貴郎と遠く離れるのといやですから此さういやならば今一ツの方法があるが、それは只望みサ、只希望だから出来るかどうだか分からないが、それが出来れば佛國に居ても好いのサ英、ア嬉

しいことねエ、貴郎のお近くに居られることなら、どんな小屋でも穴の中でも好う御座います此實は斯う言ふ譯だ、われ珊瑚黨の財産を積んだ一船の船が此國の海邊にうろついて居るのだが、何分警察の眼が鋭いから何處の港へも這入ることが出来ないのだ、ところがわが黨派に有力な一人で、城郭を此海岸に持て居るものがあるのだ、此男が其城を明けて貸すといふので今其舟を此海岸の方へ向けて居るのだが、英分りましたヨ、私に其處へ往けといふのでせう此さうサ、笠間夫人も其處へやる積りサ此さう、嬉しいことねエ、どうぞ直ぐやつて下さい此さア其處だが、實は其城を明渡すといふ男がわれくの仲間から疑はれて居て、今夜其吟味をして見るといふ次第だから、まだしツかりしたことは言へないのだ、尤も私は疑つて居ないが、何分其男が貴族だから黨員には疑いがあるのだ、何れ吟味のすみ次第

どうにかなるだらう英「さう、其人の名を何と言ひます此それは直き分るから今は言ふまい、そしてお前に聞しては好くあるまいから」と比留間は英子の顔を眺めたり、英子は何故にやさめく泣き出しぬ此オヤ可笑しいぢやないか、今嬉しと言ひながら、急に泣き出すとは、ム、分つた、其男を廣政だと察したのだらう、いかに廣政だ、廣政だと何が哀しい「比留間の言葉は激しくなれり、英子は涙を拭ひて英貴郎は先刻私を本當に愛するものがあつたら、其男を殺すと仰しやつたでせう此さう言つたがどうした英「ア、どうしたら好いでせう、高山廣政は私を本當に愛する男です此ム、よく言つた、それは疾くより承知だ、好し殺して仕舞う」と比留間は面色變へて立上らんとするを、英子は靜かに制し英「さうしなくても好いでせう、あの廣政は眞に私を愛します、すけれども貴郎を殺すやうなことはしません、只貴

君が私を愛さなくなるのを待て居るのです、併しあなた」と英子と落つけり、比留間は急ぎ立て「併しどうした」と叱るやうに言ひぬ、英子は怨めしげに比留間の面を見上げ「一体あなた酷い方です、私が廣政さんに遇つて親しくなつた本は誰れがしたです、笠間夫人の家へ往つて、賣淫女か何ぞのやうに此顔を見せびらかして、少い男の玩弄になつて居たは、みんな貴郎のお指揮でせう、それで偶々芳雄さんや廣政さんのやうな方があつて、私をどうとか言へば直ぐ殺すなと、随分無理なことだと思ひます、特に廣政さんは兎も角、同主義の人ではありませぬか、比「イヤそれは實に私が悪かつた、主義の上からはどうするか知らんが、戀の上からは決して廣政を殺さない、比留間公爵名譽に掛けて誓ふヨ英「ア、此顔の怒じい美しいのは、反つて身の仇です、どうぞ貴郎の短剣で私の顔に傷をつけて下さい、イヤ此位で

が「と言ひつゝ短剣を出し、其一面の栓を押すや、忽ち二箇の小
 緞わらこれたり此通り二つの緞がある、此一ツのには毒薬が
 這入て居て一寸でも口へ入れるときは直ぐ死ぬ位な劇薬で、し
 て此一ツには即ち皮膚を變ずる薬が這入て居るが、此薬はつけ
 ても別に痛みを感ずることのない、併し皮膚は全く變つて仕舞
 ふ、英それは誠に好い薬さうすれば廣政さんもう慕ひますま
 い、入らざる罪を造りません、そして私は假面を被つて居ませう
 比「成程、假面か、ム、其奴は善らう、英子といふ美人が巴里を去た
 日から假面婦人があらはれたとありては、少々怪しまれるだら
 うが、イヤナニ其處には趣向もあらうさうすれば何も英吉利へ
 行くにも、又笠間夫人の所へ行くに及ばぬ、此巴里のうちには居ら
 れる、だが此處一月計りは私に遇はないやうにしてお呉れ、何
 にしろ英子といふものと巴里の人間が忘れて仕舞て、か前を假

は足りませんから、何か酷い薬で私の顔を焼て下さい、此馬鹿を
 旨ひなさい、そんなことが出来るものか、英「イエ私は一身を貴耶
 に捧げたもので、貴耶がどうなされても構いません、私の顔をさ
 へ醜くならば、誰れも慕ふものはありません、只貴耶が私を愛
 して下さるのみです、貴耶は私の顔ばかりを愛する人でないど
 思ひますから、比「さう思つて呉れるのは有難い、お前の愛情は實
 に感服した、併し餘りのことだ、英「私はもう心を定めました、世に
 形を全く變へる薬がある、聞きました、私はそれを用ひて、顔
 變へたいものです、比「さう言ふ薬もある、現に私も持つて居る、ま
 か免れられないときに用ゐやうと思ふて、英「持つて入らつしやる
 のですか、そんならどうぞそれを下さい、顔へ塗て容子を變へま
 すから、比「それはならん、ヨ、英「イエ構ひません、何れ一度は年老ひ
 て醜くなる顔です、さア早く其薬を下さい、比「それは此處にある

面夫人と認めて仕舞ふまでは英仕方が御座いません、宜しう御座います」と言ひながら間を狙つて英子は素早く短剣を以取りぬ、比留間は大いに驚き取返さんとせしが、英子は向ふへ逃げ行きたり此コレ、英子早まるな、實はお前の精神を試したのだ、お前にさうしろと言つたのではない、英、イエ私は決心して居ます、私は此顔を犠牲にします、今一足でも進んで御覧なさい、私は此青い燵の薬を飲んで死にます、顔を殺させるとも、生命を亡くさせるとも、さアどちらでもお心任せに遊ばせ」と英子は身體を慄はしながら、決心の体面にわらはれ、今はなか／＼止むべきやうなし、さすがに比留間も面色變り、只だア、／＼と言ふばかりなり、英子と徐かに燵の栓をぬき、薬をハンケチに濕し、やがて鏡に向ふて「これが美しくしき顔の見納め、貴郎よく見て置て下さい、此コレ英子天の賜を損じてはなるまいぞ、英天は自殺を

禁じ給ふのです、貴郎さへ近づかねば自殺はしません」と直ちにハンケチを取り「何處から塗らうか、眼だけは、貴郎を見る爲めに大事です」と獨言「アッ」と一聲、グルリと顔へ塗りつけしが、直ちに燈火吹き滅して「さア貴郎、私の體は貴郎に捧げました」

第六回

其夜此珊瑚黨同盟の長比留間の去りし後、彼高山廣政は獨心配らしき容子にて、笠間夫人の室のあたりをうろつき居たり、此心配は夫人の家へ探偵の入り込みしこと、井におのが從兄弟の高山芳雄が怪しき殺され方をなしたることを聞たればなり、元來廣政と芳雄とは至極中好く、其禮一が親しくする芳雄の死を聞て兄の禮一とは至極中好く、其禮一が親しくする芳雄の死を聞て之自ら同感の情胸に浮びて、坐ろに暗涙を催しぬ、廣政と極端の

自由主義を執り、現政府には正反對の人なるが、恰も好し、伊太利の比留間公爵派を集めて佛國に入り、舊の帝室に事へたる藤田大佐が同じく反對の心を抱き共に現王室を倒さんとするに遇ひ、終に同盟して事を起さんと謀り居たり、然るに廣政は狂するまでに英子を慕ひ、頻りに英子の愛を求め居しが、今日しも英子は明かにおのれを愛せぬ由述ければ、斯は何か秘密のあることならん、さもあらばわれは生命を掛ても彼女を靡かすすに置くべきか、と戀は弾かるゝ程愈々募り行くもの、夫れに就ても、彼の總理の比留間とやも英子と怪しい容子、此頃かれを疑ふ風の見ゆるは、屹度戀の遺恨に違ひあるまい、既に戀の遺恨を含まれたとして見れば、あの人を殺すに平氣な男、此奴らッかり油断は出来ぬ、ふ、芳雄の殺されたも或ひは比留間の所業かも知れない、貴族を一人づゝ殺すと明言したからなど、色々の聯想

に心迷ひて、やがて歩行どもなく夫人の家を出で間路をトポトポ通り行さしが、眼に見ゆるは英子の笑める顔なり、ア、どうぞ早くわれゝの事業を果して、英子のこののみを思ふ時節にしたいものだ、エーとわれゝの一揆を起すのは三月の廿日だが、好しゝもう一月程だナ、して明日は保田の海岸で金を受取りねばならないが、イヤどうも總理の比留間に疑はれて居ては面白くない、と又もや取り留らぬ空想に誘はれて、ウカゝ来掛る彼方に乗合馬車の客付顔なるに會ひぬ、ヤア幸いだ乗て往かうと飛乗る途端馬車のうちより四人の大の男手を差伸て物も言はず、廣政を引きさすり込めり、鹿鹿め、何を「と聲き死に逃れんどあせれども、大男四人に押へられては詮方なく、只大聲に「誰れだ、何を「するのだ」とわめけり、馬節かにしろ、聲と聞いぞ」と言ひしのみ、馬車は疾風の如くに走り、車内は眞闇にして何者

とも見る能はず、只前後左右に人の守れるを知るのみ、兎角する
うち首より腰のあたりへ紐を掛けたるにぞ、廣政は何事やら更
に合点往かず、これは何でも此處に馬車を用意して置て、おれを
捕へたのだが、して見ると愈々警察の手に掛つたのだナ、それに
しては外のものが捕まらないのは訝しい、イヤ待て此奴は英子
の競争者特に比留間めが戀の遺恨でかれを殺す積りか知らん、
併し殺すなら此處で殺さうなものだが、ハ、ア屹度決闘しよ
うといふのだナ、芳雄も決闘でやられたといふから、好しくそ
れぢやア芳雄のやうに脆くはやられないぞ、でも何だか不安心
だ、兎も角尋ねて見ようぞ、廣政は故らに落ついて「一体君等は
何の用で、何處へつれて行くのだ、男分らないか、分らないやア
言ふ譯にはいかな、廣其理由は直き分るか、男三四十分のうち
に、廣決闘場か」答はあらざりき、廣政は益々惑へり、此奴は單

に盜賊ならんと思ふて、廣君等金が入るなら此處に随分あるか
ら持て往き給へ、二三百圓はあるだらうと思ふ、して僕を警察捕
へ訴へはしない、一人の男カラ〜と笑ふて「さうだらう、貴
様を警察へは往れない身分だからナ」廣政は又も惑へり、男貴
様はわれ等を盜賊と思ふか、燈火がないからさう思ふのも無理
ではない、オイ一寸マツチをつけて見ろ」との命令に一人の男
はマツチを擦りつけたり、廣政は此光りに四人の容子を見て驚
けり、驚きしも無理ならず、三人は警察官にて、一人は軍人なりし
なり、男どうだこれで分つたらう、廣よく分つた」是に於て廣政
は愈々捕縛されしを知りしが、尙ほ尋ねて見んと「併しどうい
ふ譯で僕を捕縛したのか、誰れが命じたのか、男何故だか知らな
い、警視總監の命令だ、これ見なさい」見れば明らかに警視總監
の署名したる捕縛状なりき、偕々愈々やられたと思ふうち、マツ

千は滅て故の間黒となれり、トウ、捕まつた、残念なことをし
 た、外のものも定めしやられたらうが、さるにても英子とどうし
 たぞと思ふと同時に、ム、此奴は芳雄が殺されたのは英子から
 起つたのだと鑑定がついて、夫れで其餘争者のをれに疑ひを掛
 けたものか、夫れなら決して心配は入らぬ、と考へし時馬車は止
 れり、斯くて馬車は屋根の下を通るが如き容子にて、暫く孫々と
 して進み行き全く止りしが、内より「捕縛人は」と聲掛けて出
 来るものあり、直ちに廣政を受取りて家の内へつれ行きぬ、其處
 らに立るものは皆兵卒らしく、家の有様軍營のやうなり、廣政を
 士官に引れて一室に入れば、内には既に用意整ひあり、正面に燈
 を立て、左右に十數人の劍を抜きたる軍人並び居たり、天井に掛
 れるランプの光はの闇く、軍人の影壁に長く引きて、陰鬱たる光
 景に其物凄さ言はん方なし、今や廣政は設けの席につきて、指を

不思議いかなることにならざらん、とジツと向ふを見詰れば、正
 面の戸を掛開き五人の長官入り来れり、上座なる一人は聲高し
 く「罪人立て」と呼びぬ、廣政立上つて「一体私は何の罪で此
 處へ引出されたのです、長官、國家を顛覆する爲め陰謀を企てたら
 う、廣政それだけですか、それは分つて居るが、何故辯護人もつけず
 且つ軍人の裁判を受けるのです、私は軍人でありませぬ、其方は
 王室に向つて軍を起す企をしたらう、夫れで軍法會議に附した
 のだ、して軍法だから辯護人をつけないのだ」と言切つて、偕「其
 方は男爵高山廣政だ、今から尋問すること、は尤も要りなものと
 だから眞面目に答へなければならぬ、一體其方は王室から與
 けられた地面の地稅を以て生活なして居るに、其命を以て革命
 黨を助けるは不都合な所爲ではないか、廣政、地面は王室から
 受けたものだが、併し私は兄から譲り受けたものです、是らうは

是「斯くても其方はまだ無罪を主張するの故に私には罪を犯した
 覺えはない長いくら強情張ても無益だ、證據は幾等もある、第一
 其方は總理比留間の妻の爲めに迷はされ、此度も船から金や貨
 物を揚げて、自分の所に預ることを約したらう、エ、かくすに及ば
 れ、其方の驚く容子で分るワ」廣政は實に此言に驚けり、彼船よ
 り寶物を取り出すことは比留間英子并に己の外一人も知らざ
 ることなるに、既に此事の知れありとせば、英子は無論捕へられ
 て白状したも、のなるべし、さるにても可愛さうなことをしたも、
 と今更眼の前に英子の愛らしき顔見えて、只ボンヤリとなし居
 るにぞ、是して其船も今既に政府の手にあるのだ、斯う事の明白
 になつた上は、潔く死刑の宣告を受けよ」廣政は最早覺悟した
 り、傲然として「僕は一向知らんことをせす、併し死刑でも何でも
 勝手になささい、是今一度言ふが、其方が白状せず罪に伏さないな

言はさん、王室の恩を仇にする不埒な奴だ、其處で其方も他の共
 謀者と共に公然法廷へ出す筈なれど、其方は伯父高山侯爵の名
 に、かゝはる次第ゆゑ、特別に此處で詮議する譯だぞ、是、共
 謀者とは長ム、共謀者か、知りたくば、迎してやる」と言ふ聲に
 應じて、兵卒に引き出されて來りしもの、無殘、珊瑚、各部長
 たる三人の、際際なりき、南無三折角の陰謀も露顯したかど、廣政
 は身體自ら慄へて、言句も出でず、長此、人等を知て居るだらう、盛
 一向に存じません、長ム、其方は總理に誓つたことがあるか
 ら、互に秘密にして居るナ、ナニ誓つたことがない、それでは是れ
 はどうしたものだ」と誓約文を差付けられ、廣政ハツと胸跳さ、い
 かにして斯るものまで手に入りしか、今は免れぬところと愈々
 心は落つかず、是れで此判決は只一ツだ、即ち死刑を宣告する
 のだ、盛、どうも仕方がない、自分を辯護するものがないのだから

のか、われながら馬鹿なことだと心に意見して「矢ッ張り止しませう、餘計に心配をさせるのは好くないから」此時先きに裁判せし長官出來り眞實に氣の毒ですが、尤も恐るべき刑を君に加へねばならない處イヤもう慰めて下さるナ私は決心して居ますから長併し此處に就ては國王も酷く御心を惱まし給ふて、若し最後の時でも後悔するならば許して遣れとの御意であつた處悔悟して總ての秘密を白状せいと云ふのですか長イヤ秘密は言はんでも分つて居る、只以後、斯様なことを仕なければ一命を助けて、此佛蘭西の外に住むことを許すといふ御意だ處僕と主義を變ずるやうな卑屈なものでない、高山廣政はそんな人間ではありません長「さう言つても其方の黨派は皆捕へられたのだから、もう仕方がない譯だ、コレよく外を見なさい、兵卒は既お用意をして居るが、今のうちに降参した方が好らう處威して

ら、其罪に伏さない廉を以て、白状したと同等の刑に處するを處さうでもするが好い、宜しい」と投出すやうに言ひぬ、斯くて簡單なる裁判は終つて、やがて士官の一人は廣政を捕へ外へつれ出たり處、僕を何處へつれて行くのです、土直き分りませぬ處度銃殺する積りだナ、土直にしても今直ぐではありません三十分位は間がありませう、さうも君は勇氣があるヨ、今殺されるぞ知つて居ながら、平氣で歩いて居る人は滅多にない、君が若し望むなら僕は何でもして上げよう處でも僕を逃すことは出来まい、土直そんなことは出来まいが、臨終の際に手紙でも書くなら、僕は處送つて上げやう、エ君、定めし慕つて居る婦人でもおわらうに」廣政は不圖英子のことを思ひ出し、命の終る時まで懸ひ慕ひ居し情を知らさんと既に筆紙を乞ひ受けしが、イヤ待て英子も捕はれて居るだらうに、そんなところへ手紙がやれるも

もだめです、早く殺して貰はう」長官も其勇気と決心の程に感
 心せしが、尙も言葉を柔かにして「併し君の仲間に住る婦人は
 君の戀人と聞くに、若し君が降参するならば、其婦人も許して君
 と共に外國へやることにするが」廣政は此言を聞き、心臓の
 鼓動を耳に聞くまでに感ぜられた、決して色にあらはさず「そ
 んなことは聞きたくない、早く殺して下さい、是れでは仕方が
 ない」と呟くやうに言ひて、廣政を庭の方へ引き出しぬ、兵隊は
 彼方に整列して號令を待つものゝ如く、薄闇に燈火に劍と銃と
 の光物、凄くきらめき、満庭聞として咳拂するものもなく、一發
 の砲聲やがて響けば、廣政の生命は今に亡くなるべし、長官は又
 もや廣政の側近く寄りて「君まだ時があるぞ、今一言許せと言
 はい、助けるがどうか」廣政は激して言へり「だめです、早く殺
 した方がいいでせう、是、是非がない、夫れでは判決文を讀め」

その命令に、下士官は死刑の宣告文を讀み始めたり、宣告文は既
 み終りぬ、隊長は譯丈夫に號令を下しぬ「ねらへ」兵卒の銃は
 既にねらはれぬ、廣政が自由萬歳」と絶命の一句、さすがに譯は
 さびれたり、打て」發矢、廣政の命はいかになりしぞ、長官は飛
 來れり、直ちに廣政をかき抱きて「君は切切りではなかつたか、
 實に君はえらい、感心だ」と激する譯の高さに、隊長も兵卒も皆
 々走り來りて「わが自由萬歳」と喚呼す、廣政は夢に夢見る心
 地にて、只茫然となし居りぬ、やがて庭一体どうしたので、是、イ
 ヤ君が切切りの嫌なを受けて居たものだから、實は本部よりの
 通告で、われ、職員が君を試したのだ、此處は八重洲の古寺院
 で、われ、が借り受け、熱海の武器を入れて置くところだ、イヤ
 どうも先刻よりの失禮は平に御免を蒙る、何分今晚のことは今
 晩限り忘れて戴きたい、庭さうか、僕を疑ふたのか、其奴ア酷い、

かど巴里の人民は安き心もなく、斯れは高山侯爵は、公けに國家のこのを愛へ、私に芳雄の兇死を痛み、兎角不機嫌勝にて、此頃は家にのみ籠居なし居りぬ、されば禮一は彼光子との約束をば言出すべき機のないに、光子は頻りに急ぎ立て、果はか弄りあされしかど、怨するにぞ、今はなかく、に堪り兼て、此月のある朝、今日こそ、侯爵に打明し、結婚の許可を乞はんと、思ひ切て伺候したりしが、伯父の侯爵は大なる附つき椅子にもたれ、今しも熟睡なりし居る容子、少し隔てたところには、令嬢秋子が机に向ふて亡兄の肖像を寫し居り、其側には保姫の英國婦人民子が英國新刊の小説を仔細氣に讀み居りて、ひッそりとして物哀し氣なる此樹の体、秋子と禮一の來れるを見て、頬のあたりには、紅の潮さしニツコと笑みつゝ、そツと侯爵の睡りし方を指さし、眠りをさまさぬやう、静かにと眼くばせすれば、民子も禮一の來りしを始めて知

どうか氣にさへず、此上の御尽力を願ふ、そして今總理から手紙が來て、舟は既に向ふの港を出帆し、君の城郭の方へ向つたから、直ぐ君に其方へ行くと、どのことだ、そしてもうあの笠間夫人の家には誰れも居なくなり、警官が取り巻いて居るばかりだから、彼處へ寄てはいけないといふことだ、ヨ、ソレ君の馬車が來た、早く乗て往て呉れ給へ」と足元から鳥の立つやうな急がし方、皆は笠間夫人も何處かへ逃れたか、英子はどうしたらと心に掛れど、今更何を思惟するいとまもなく、馬車に飛乗り一散走り保田の城へと赴きぬ。

第七回

何時か日數も六十日餘り過ぎ、其年の五月となりぬ、探偵路橋は八方に眼を配れど、芳雄を殺した犯罪人は目付らず、世の形勢は愈々物騒しく、此處彼處に暗殺など行はれ、今にも革命の起らん

り、今日(けふ)は身(み)についで少し、申し憎(にく)いことを是非(せひ)伯父(おぢ)様(さま)にお話(はな)した。いのです。御機嫌(ごきげん)といかに、御座(ごぞう)います。さういふ話(はなし)は、父(ちち)上(じやう)に、おれどの結婚(けっこん)の話(はなし)に、来(き)て、申(まを)すに、考(かんが)へ、益々(ますます)面(おもて)を、あからめ、外(ほか)に、ある筈(はず)なしと、秋子(あきこ)は、おの、勝手(かたて)に、考(かんが)へ、益々(ますます)面(おもて)を、あからめ、ぬ、それとは、知らず、禮(れい)一(いつ)は、又(また)只(ただ)管(くだ)候(こう)の、寝顔(ねがほ)のみ、打守(うちまも)りて、機嫌(きげん)は、どうかと、氣遣(きぢ)ふのみ、保母(ほむ)の、民子(たみこ)は、彼(かの)讀(よ)み掛(か)けの、小説(せうせつ)を、ひね、くりながら、秋子(あきこ)の、顔(かほ)を、横眼(よこめ)に見(み)て、それと、知らず、れば、秋子(あきこ)は、心(こゝろ)を、静(しず)むれど、立腹(たてはら)ぐ、胸(むね)の、どきまぎしつ、何(なに)の、御用(ごよう)ですか、どうも、氣(き)に、掛(か)つて、なりませぬ、ヨ、禮(れい)一(いつ)は、御心配(ごしんぱい)下(くだ)さる程(ほど)のことでは、ありませぬ、秋(あき)でも、私(わたくし)は、一(いつ)体(たい)物怖(ものおそ)をする上(うへ)に、あの、兎(う)變(へん)からは、物(もの)が、氣(き)になつて、氣(き)になつて、禮(れい)一(いつ)は、伯父(おぢ)様(さま)へは、申(まを)すに、お父(ちち)様(さま)へは、願(ねが)ひ遊(あそ)ば、る程(ほど)の、事(こと)ですが、秋(あき)何(なに)で、御座(ごぞう)います、すの、あの、お父(ちち)様(さま)へは、願(ねが)ひ遊(あそ)ば、すこと、で、若(わか)しあな、たに、お芽出(めだ)たい、こと、でも、あるなら、お父(ちち)様(さま)は、

り、子(こ)細氣(こさい)に、會(あ)ひ釋(と)せり、此(こゝ)保母(ほむ)は、英國(えいこく)人(ひと)にて、何(なに)事(こと)も、自(こ)國(こく)の、慣習(かんじゆ)を、崇(た)むるが、中(なか)にも、彼(かの)結(むす)婚(こん)の、こと、な、ど、も、佛蘭(ふらん)西(せい)風(ふう)の、干渉(かんじやう)を、喜(よろこ)ばず、女子(こしよ)自(こ)ら、良(よ)人(ひと)を、擇(えら)んで、之(これ)を、定(さだ)むる、英國(えいこく)風(ふう)を、結(むす)婚(こん)上(じやう)の、眞理(まこと)なれど、日頃(ひごと)心(こゝろ)に、信(しん)じ、秋子(あきこ)にも、之(これ)を、教(おし)ゆれば、秋子(あきこ)は、深(ふか)く、之(これ)を、信(しん)じ、密(ひそ)かに、禮(れい)一(いつ)に、思(おも)ひを、運(こ)び、若(わか)し、禮(れい)一(いつ)の、結(むす)婚(こん)が、叶(かな)はねば、外(ほか)には、夫(うそ)を、持(も)つまじと、ま、で、打込(うちこ)み、居(ゐ)るを、民子(たみこ)は、之(これ)を、幫助(ぼうじゆ)して、斯(か)る、場(ば)となりては、それと、目(め)顔(がほ)に、あ、ら、は、す、こ、そ、處女(ぢよめ)たるもの、當(あた)りの、務(つと)なれど、ま、で、勸(すす)め、立(た)るに、秋子(あきこ)は、いかに、も、して、わが、胸(むね)の、思(おも)ひを、酌(しやく)み、取(と)りて、禮(れい)一(いつ)が、よ、き、返(かへ)事(こと)せよ、が、し、と、外(ほか)に、愛(あい)する、人(ひと)の、あり、と、は、知(し)ら、ず、覺(おぼ)束(たづ)なく、も、戀慕(こいぼ)の、情(なさけ)を、眼(め)顔(がほ)で、運(こ)び、居(ゐ)り、ぬ、さ、れ、ば、今(いま)し、も、禮(れい)一(いつ)の、來(き)る、を、見(み)て、いかに、せ、ば、や、と、胸(むね)頼(たの)りに、願(ねが)ひ、筆(ふで)持(も)つ、手(て)先(せん)も、慄(おそ)へ、が、ち、「父(ちち)上(じやう)は、お、歎(なげ)み、で、御座(ごぞう)います、が、お、眼(め)が、さ、め、た、ら、無(な)か、ら、出(で)を、お、喜(よろこ)び、遊(あそ)ば、す、で、せ、う、先(せん)づ、こ、な、た、へ」と、暗(く)じ、た、

お喜びで直にお許し遊ばすでせうか父様はあなたの事を始終
伺しやつて御座いますそして斯うなればあなたは父様の後
嗣で居らっしゃるもの願ひです伯父様は私の願ひをお聞
みなさるまいと心配します秋子は何ですと秋子はわが言ふこと
と禮一の答へることゝが行違ふので心は亂れ重ねて「それは
何です」と問詰めたり願ひはあなたにお話しがなり兼ねるこ
とです秋「アそれでは私を信用遊ばさぬのですか願ひどう致し
て、あなたを信せぬと言へば外に誰を信じませう併し私が伯父
様へ願ふことあなたがお聞ではいけない事聞てならぬこと
です」保母は傍より子細氣に切口上で「それはあなたのお聞
違ひです娘様が御承知にならねばならぬことですあなた英國で
御覽遊ばせ親御に申し出しになる前に先づ御當人へお話し
になるのが願ひです」禮一は打驚けり何を言ふか其意を解せ

す秋「あなたそれは薄情ですそんなにあなたのお身の上に大切
なことを何故私におかくし遊ばす私にはあなたの最も親しい親
戚ではありませぬか従兄弟同士ではありませぬか」禮一は決
して疑ひはせぬとの意を容子にて示せば秋子は又其意を取違
へ「あなたがおかくし遊ばす私がおなたをお助け申すこと
が出来ませぬ禮一何分伯父様の御立腹が怖しう御座いますので
秋「氣早では入らつしやいますか本々あなたを好て入らつしや
るもの理由さへ私にお話し遊ばしたら共々願つて見ませう」
禮一は顔をわがらめて「あのあなたがお私の爲めに願つて下さ
いますか」秋子は禮一の顔を見て「と身をふるはし倍
は愈々禮一がそれと此身に赤心を打明けて言へるかと思へば
さすがに躊躇して保母の方を打見やれば馬さうです是非お話し
にならねばならぬことです英國の女子は今申した通りです」

處へ来た。秋子はそれを見て機嫌を取繕んと侯爵の側に進み
 甘へる如き素振にて「お目ごさめましたか」と言へど、侯爵は
 見向きもせず「お前方は次へ行け、少し禮一に話しがある」
 禮一は眼に涙を浮かめ、力なげに其場を去りたり、保母も去りたり、侯
 爵はすきもあらせず「お前は娘と今何を話して居た、何で婚禮
 といふ言葉が話しに出るような譯になつた、或はそれはおの保母
 が申したのです」と口ごもる。侯爵は申したにしろ、どんなと
 こからそんな話しの筋になつた、ナニ世間話した、イヤさうでは
 あるまい、お前の方から言はさねばおれの方から言えう、お前
 の娘について申し出したいことがあるのだらう、禮一について、何
 のことと、とけいな顔するに、侯爵は白ばツくれるな、それに
 違いないぞ、さう申したからとて別段おれと怒りぞ致さぬ、お前
 は立派な男だ、おれを所望しても善い、併し此婚禮をどうあつて

秋子は聲をかすめて、禮一がやつと聞き取る程に「父様が御承
 知遊ばすやう共々御一緒には是非致す積りです、祖本當に御親
 有難う御座います、あなたがお助け下さらうとは思ひもよらぬ
 ことで、此御恩は生涯忘れはしません、さて其事柄は申さずとも
 疾にお察し、御座いませう、私が有りつたけ心を掛けて愛して居
 る令嬢の夫となりたい願ひで、その令嬢の名は「娘はゾツとす
 る程嬉しく「お明しなさらずとも存じて居ります、兵さうな差
 かしがり遊ばすには及びますまい、私どもは婚禮は聖い心の結
 び合せだと思ひますから」此婚禮といふ一語侯爵の寝耳を驚
 かせしと見え、侯爵は「何だ、婚禮とは誰の婚禮だ」とうめさつ、
 起き上れり、禮一はハツと打驚きしが、伯父の苦々しき面はわが
 面に照つけて、豫てはア、も言はん、斯うも言はんと思ひし考へ
 秋日に向ふ霜の如くに消えうせぬ、侯爵は聲あらしげ「何で此

も調子ぬと父のおれが明言する「禮一は少年の氣早く勘違ひも餘り馬鹿々々しと疝癪を起して一私も明言しませぬ」
 て従妹とは結婚致しませぬ」
 候橋は一安堵の容子にて「本當か、娘も其様な振舞ひすまいと思ふが併しまだ年がゆかぬ、分別がない、それに保母がわきから色々智慧をつけるから、どうも前に引つけられさうだ、そしてあの兎癪以來此家の相續には此婚禮をさせるのが良策だといふものも多いから、禮一や其御心配は御無用です、私は改めて明言致します、決して従妹をそののかして此家を横領しようなど、左様な巧みは致しません、此一言は私の名譽に掛けて重んじます、私には前を信じます、お前は偽りを言ふやうな人物でない、疑つたのは悪かつた、併し一應聞て置たいことは、前には娘に氣がないとしたところで、世間の口がうるさい、其處でお前が誰れぞこれならと外に思い込んだ

娘がわらば、至極好い防ぎになる」と思ひもよらぬ好機、禮一は言ひ出さんとして何やら羞かしく、幾度かためらうを、候橋は打笑ひ「さう恥かしがるには及ばぬ、どんな美しい婦人だ、娘との婚禮はあれやこれやで故障を言ふが、外に何の故障をいふものか、早く話せ芽出たいことだ、おれも祝ふワ、まだおれだとして再婚せぬといふ年でもないから、まあお前の方から聞う、禮伯父様若しこれをならぬと仰せられると、私は全く絶望します、候得て戀人はそんなことを言ふが、さては戀中だ、ナ、禮一、戀いこがれた中で候ふ、それで擇み損ないは、あるまいナ、お前は金持でさへあれば、商人の娘と婚禮しても身分の下ることはないと思ふだらうが、一休商人は昔は改革黨ではなかつたが、今は總て自由黨だから、ナ、禮一、其父は紳士で御座います、候好しく、金はあるか、禮一、これ程御座りますか、私の財産より、屹度多ございませ

今まで何故許可を乞なかつた、そして娘はお前に惚れて居るか
 禮既に五の約束は調へました」と俯向て言ふ侯素逸いぞ、素逸
 いぞ、保母が此處に居て聞たら、定めてれの持説が行はれた
 と言つて鼻を高くするだらう、それでは早く結婚するが好い
 何分不幸中で御座いますから、侯イヤ其遠慮は忝けない、併し構
 はぬ、其處で其娘の名は「禮一は至極伯父の機嫌よきに先づ安
 心せしが、倍名はと言はれて、今更ハッと思ひしが、引くに引れぬ
 此場の時宜、急さ込む呼吸を咳にまぎらし、「平崎家の令嬢で光
 子と言ひます、侯平崎と、ハテ何だか、誰かたことがあるな、禮さうで
 す、あの革命の時一時外國へ移つたものだから、さうで、侯フム、佛蘭西
 の貴族と言つては知らぬものは、ない筈だが、何處に居る、眞山王
 町に侯ム、それでは、芳雄少々の夜お前と一緒には、戸口まで往ッ
 たところだナ、ア、又あの事を思い出した、斯んな紀念があるの

う、侯兄か妹でもあるか、禮一人娘です、侯それは善いナ、素より教
 育はあらず、禮充分で、侯妙だナ、そして、禮至つて聰明で、侯美しい
 か、禮拜みたいは、ほとで、侯侯は打笑み、「當にならぬぞ、戀人の言
 葉は、小形か、また大きいか、格好は、どうだナ、美しくいと言つたと
 ころが、先づそんな風な美形だ、よく聞せな、おれも随分女の鑑定
 は高い方だから、禮先づ丈は高くすらしとして、肩や腕は、マッペ
 リして居ます、眼には、清い彩光があつて、髪は、あの名畫の天女に
 ソツソツリです」侯侯は禮一の話しに今は聞惚れながら、「それ
 では、手はどうだナ」丁度此方らの煙のやうに、美しく御座いま
 す、侯足は、矢張美しいか、禮わの評判な安部の夫人のやうです、侯
 耳はどうだ、齒はどうだ、禮耳は、眞珠貝のやうで、齒は、白王のやう
 です、侯それぢやア、希臘の女神ソツソツリといふものだ、世界の七
 不思議の一ツといふものだ、怖しいものだ、そんなものゝあるに

に、どうして平崎家のことをお前が何時まで嫌にならぬか、私は
不審でたまらぬ位だ」と言ひながら、ガラリと機嫌變りて、室の
うちを其處どもなく歩行、禮一とソラ例の癖が始つた、あの歩
行癖が始つては、いつも相談が六ツかしくなるからとしばらく
無言で控へたり、侯爵は不圖立止り、「禮一今思ひ出した、あの時
探偵がおれに知らせて呉れた名だナ、そんな紳士の娘と婚禮し
ようとは何のことだ、よくノメ」とそんなことが言へた、お前
だけの名を汚すのは勝手だが、おれの名まで汚れるワイ、お前は
實に見下げた根性だ、眞伯父様、決してお名前にかゝはるやうな
ことは、侯爵、好しく、只今お前が言つたことは言はぬ昔しと
開流してやらう、併し再び其家へは行くまい、其娘とは交際すま
いと一言聞して呉れ、禮一は憤怒と慚愧に感情激して、「私は
其仰せに従ふことは出来ません」と言切りぬ、侯さうかお前が

さう出るなら、おれにも仕様が有る、これから直に内務大臣の
ころへ行き、警保局長に指揮すれば、平崎家の親子を何處へ追拂
はうと思ひのまゝだ、禮一は亂暴です、そんなことをなすつて
はなりませすまい、侯、黙れ、失禮な」と侯爵は殆んど狂はんばかり、
拳もて胸を叩きながらに怒鳴りつけたり、禮一は尚ほ何やら言
はんとせしが、「目通り叶はぬ」の一言に、今は是れまでぞと絶
望憤怒の眼色すこく、足音荒く出たりぬ、秋子は父の怒り聲に驚
きふるへて馳せ入れば、保母も續いて入り來れり、侯爵の尚ほ聲
荒らかに、「お前達は呼もせぬに何しに來た、其方らへ行け」秋
子は側へ進み、「どうしたことで御座りますか、侯、何だ、禮一の字も
就て、何がお腹立で御座りますか、侯、何だ、禮一の字も
言ふな、氣色に障るぞ、秋子は此一語に、さては兩人の間、禮一は
逆も叶へぬかど、思ひ迫りて心は亂れ、後へタヤク、よろめくを

後「君ぐまい、禮一のことをお前が何と辯護しようが、だめだぞ、聞
 ば聞くほど腹が立つ、ナニお前が禮一に皆聞た、そして禮一を助
 けるとは、然それがまた、僕またとは何だ、ア、此頃の息女や息子
 の教育を斯うしたものでか、實に不都合な話した」保母は聞樂兼
 て「教育がどうだとか斯うだとか仰せられては、私が聞流しに
 は出来ませぬ、私は憚りながら大英國の華族名鑑の中に記され
 た家柄のもの、決して娘様の品格を落すやうな教育を致さぬ
 積り」侯爵と怒り鎮まらねば、言葉もあらく「イヤお前には話
 しは致さぬ、ナニあの禮一め馬鹿らしい戀路に迷ふて、馬鹿が馬
 鹿らしいのです」と保母も聲をあらゝげたり、僕馬鹿らしいこ
 とだ、家柄のないものなら誰と婚姻しようとも勝手だが、貴族で
 はさうといかぬ」秋子は父のいふことが更に分らず「でも禮
 一樣は何もその様な婚禮をしようとは仰しやりませぬ、あのさ

うだ子」と保母を見返れば、馬さうです、娘様との御婚姻が何故
 馬鹿らしいのです、僕ナニ娘と、娘とならば、箇程までには激さぬ、
 名もなき怪しい紳士の氣と縁を結びたいといふからだ」秋子
 はハツと驚き、エ、それでは此私のことではなかつたか」
 と小机に臂持せて、咥やく、僕其方ではない、それは此おれが不承
 知だ、そして禮一もさうとは言はぬ、外に存魂打込んだ娘がある
 のだ、娘はそれが悔しいか」保母は悲しげに「侯爵、それと娘様
 をお苦しめ遊ばすといふものです、何の苦しめようぞ、悪いよう
 にはせぬ」と秋子をいたはり唇を撫るを、秋子はハンケチにて
 涙を拭へ「どうしても、忘れられぬ」と咥さぬ、僕それ程慕ひな
 がら、何故禮一に力を添へて共々婚禮のすることをおれに言はうと
 した」秋子は今更それは自分のことと取違へたとも言へず、其
 處に俯伏し泣き入るを、僕憎い奴だ、好しく、腹の慰るやうにし

天降りしかと怪しまるゝあでやかさに、さすがの侯爵も少しひ
 るみ側を見れば、年頃二十三の男身のたけ高からず頭は尖り、
 面は細く目は黒水晶の如く光り、何様一癖ありさうな人物の腹
 立しき顔付にて居るを、侯爵は面白からぬ奴、ハテ何者と眺むる
 折柄、光子は少しも困じたる色を見せず、「侯爵父は只今外出い
 たしましたがお目に掛らぬことを無残念に存じませう、ハテ
 是非お目に掛りたいもの、お差支へがなければおなたにお話し
 致しても宜しいが、光伺ひまして宜しいことなら、そしてその内
 には歸るで御座いませう、勝澤お前は次へお退り」とキツと傲
 男を睨みしが、男は黙つて去らうとせぬに、光コレ申つけること
 を聞ぬか、と戸を明けて是非出て行けと差示すに、勝澤は残念
 の面相にて誰々く出行せしが、侯爵はこれを見て、此婦人の勢いで
 は明の禮一などは奴僕に如くにあしらはれるであらうと、先づ

第八回

てやる」と止めても止らぬ軍人氣象、一徹短慮の侯爵は其まゝ
 何處へか出行たり。
 高山侯爵は警視廳へ赴きたり、總監に就て光子の父平崎の容子
 を探らんとてなり、總監と直ちに詰り入れぬ、されど平崎のこと
 に就ては、總監も詳細せず、旨にてはかしく、しき答へはなし、侯
 爵が羽の結婚に就てお尋ね申すと、言ひしとき何やら意味あり
 氣に、それはお止しなされた方が宜しかるべし、平崎といふ男爵
 り、素性の好いものでは御座らぬと忠告したり、さらば愈々此結
 婚は破談なりとて、やがて此處を離し去り、平崎家へ赴きぬ、聞し
 に勝る立派な家に驚きつゝ、先づ案内を乞へば、家賃出来て侯爵
 を書齋へ請じ入れたり、光子は折から此室の窓近く立居りしが
 外より射來る日の光りに顔のうつり美はしく、さながら天女の
 何處へか出行たり。

一驚を喫したり光侯爵誠に失禮を致しました、おれは父の書記
で近頃此國へ参りましたものですが、いやな性分で時々懲りて
やるのです」と言ひながら、侯爵に椅子をすゝめ、自分は其處の
長椅子にもたれたり、此書齋と美しく飾りありて、書籍よりは美
術品を多くならべ、いかに金持の閑人が居るべきところと眺
められたり、侯爵は光子に向ひ「あなたは私のお尋ね申した次
第を疾くに御推察のことでありませう、光左様です、屹度禮一様
の事であらうと存じます」斯く言ひて、光子は見て見ぬやうに
侯爵の方へ視線を注ぎ、思ひありげに媚びたる顔の優しく美し
く、嬌小なる足を始終動かす様可愛ゆきに、眼よりは不思議の光
りかゝりやき来りて、侯爵と一種の魔力に縛られたやうな心持、禮
一との縁談はお断り申すと頭から無下にも言ひ出し兼て「わ
なたは私の甥の身分を定めし御承知でありませう、光、そんなこ

とは別段氣にも止めませぬ、縁結構な方ではなく、金どてもわり
ませぬ、そしてなか／＼出世も出来ませぬ、光、それが私に何の關
係がありますか、侯爵はわが高山家の後嗣とでもなるや
うに風説もするさうですが、夫れは全く無根のことです、私はま
だ結婚して後嗣を擧げる積りゆゑ、光子は黙頭つゝ「その様
なことを何で私にお話しになるか一向合點が参りません、御心
配遊ばしますな、禮一様とは私は神掛て結婚致しませんから」
侯爵は驚きたり「本當ですか、甥と結婚の心はありませぬか」
光子は落ついて「結婚しようとはどうして、お思ひませぬ、たし
かに、縁併し約束は仕ましたらう、光、どう致して、決して侯爵に
も現にわれが只今約束はしたと申しました、光、禮一様がお取遣
へになつたのでせう、自分の心にお心にかまされて」イヤどうも取
遣への流行ことだと侯爵心に呆れながら「チツとモ譯が分り

まして、獨逸英吉利等へ附を致しましたもので「侯爵はそれ
 を聞き、これが眞實なら、平崎は感心な勤王家だと思へり、光子は
 尙も話しを續け「今も申し上げる通り、斯う身分の違ふ間
 すから、逆も私の願ひは叶はぬと知り居ります、今も禮一様か
 らのお手紙があつて、侯爵にお話し申したら、ならぬとの事だと
 御座いました」侯爵は「儲はもう知て居るなと思ひつゝ「それ
 は私が指押せねばならぬ次第で、禮一は甥であるから餘儀ない
 譯で光「それで禮一様へはこれから返事を上て、約束は全く反古
 にする積りです」と聞て、左程慕ひしものが、儲も思ひ切りのよ
 い事と驚きしが、段々聞けば、禮一は最初光子に、婚姻は自由だ、誰
 も故障は言はぬ、縦ひ言ふても怖るゝこととでなしとまで言ひし
 を今更變敗するとは男らしくなし、男らしくなきものは、愛想が
 つきていやになつた、されば今となつては侯爵が許すといふて

ません光成程御面倒で御座いませうが、前からのお話しを一體
 お聞き下されませ、さすれば總てわ了解になりませうから、去年
 の十一月の始めで御座いました、鞠遊の時に、初めて禮一様に
 れ目に掛りましたが、人品作法お話しぶり、どうも外の少年とは
 違い、氣高くて居らッしやいますから、ツイお心易く致しました
 ので「侯爵は光子の嫡なる足が息みなく動くに眼を止めて「
 ハテさういふ譯ですかナ光「侯爵、禮一様が私を戀ふて居ると仰
 しやつたときは、どんなに嬉しう御座いましたらう、佛蘭西で名
 家の高山家の御一族に見初られたのは實に有難いと存せまし
 た、侯さうであらうと考へますナ」と仕たり顔するに光「併し禮
 一様と私とを身分に於て非常の違が御座ります、平崎君は一
 時外國へお移りになつた御身分と信じて居りますか」と其身
 柄を問ふとしたり光「ハイ皇族と千七百九十年に佛國を立退き

も、此方より堅く断るとの義理しき言葉に、侯爵は大いに感心
 候、實にあなたは見上たれ方、併し定めて澤山に候補者も御座い
 ませう、今此處に見えた少年も其うちで、光侯爵はお目が高く
 て居らッしやいます、あれもたしかに私を慕ふて居るもので、丁
 度仇めいたことを申して居りますところへ、あなたが入らッし
 やいました、併し私はあんな男は嫌ひです、私が戀しう思ひます
 方は、禮一樣のやうでなく、張の強い言ッたことは後へ引ぬ勇氣
 のある、そして何事も言ふやうになる勢力のある」侯爵は吐や
 くやうに「さう言ふ人物は少年には六ッかしい、いづれ五十
 歳位でなければ、光侯爵の年などには」としげく、侯爵を見詰め
 甘へるやうに言ふ、侯爵は心神恍惚として、今は警視總監の忠告
 も、以て怪しみ居たる平崎の素性も悉皆心のうちより取り去ら
 れて、たのが戦争に出たる勳功の自慢より始めて、話しは段々危

ふき方へ入らんとする折、戸は開けて光子の父は歸り來りぬ、平
 崎は品格好き老紳士にて、一見人の氣を和ぐべき風貌あり、侯爵
 に向つていと懇懇に挨拶し「御光來を受け何よりの榮譽に存
 じます、生憎留主中にて失禮の段はれ許しを請ひます」侯爵は
 切口上に「イヤ令嬢の御懇待を受けて、既に用向は令嬢まで申し
 置きました、只今暇を申すところ」で、後見がちに立別れ、平
 崎は戸口まで見送りたり、斯くて父子は是れより禮一の事、侯爵
 の事取りぐに話し出せしが、此父子の間は何やら猥りにして
 禮儀ありとは見え、傍眼からは餘り寛やか過ぎたるやうに見
 ゆ、されば父も娘も其言葉どんざいに、顔容の上品なるには似
 ず、ハテいかなる素性のものや。

第九回

廣政と彼怖ろしき吟味に遇ひし夜、馬車に乗りて保田の城へ赴

さしが、保田の人民は廣政が貴族なるにも拘らず、能く人民を親しむを有難く思へば、其翌日革命黨の船が此海岸へ到着して、積み來りし金銀財寶の荷上げするに力を添へ、總て城の地下にある密へ納めたり、素より質朴なる人民のことゝて、廣政を憎しむもの一人もなく、此明る日城の番する笠間夫人の來りしかば、好き夫人よと敬ひ侍き、萬づ忠實々々しく世話する程に、廣政も今は安心なりと彼財寶の監督を夫人に托して、巴里へ歸りぬ。廣政の豫ての望みは、保田の監督は笠間夫人と英子なるべしと思ひしに、英子は何處へ行きしか知らずとの夫人の話し、これさへ思ひの種となり居るに、或る日比留間に面會せし節、話しの序、英子は英國へ行き夫れより米國へ渡りし旨語りしかば、今之全く望みの網縋えて、心快々として樂まず、彼處の咖啡店、此處の賭場と只遊興のみに日を送り居り、主義こそ違へ中惡からぬ兄禮一の

家へも久しく音信を絶ちぬ、斯く音信を絶つても其理由あることなり、元來保田の城は唯一の所有なれど、廣政が當分借り受け居ることとなれば、若し返せなむ催促さるゝ時、事の破れる基と倦こそ會ぬやう避け居るなれ。時は五月の夕方なりき、廣政は例の如く町中をぶらつき、咖啡店に立寄り酒などを飲み始めしが、隣のホテルに二三人の軍人併び坐して種々の雑談をなし居たり、廣政始めの程は何の氣もつかざりしが、不圖芳雄といふ名の耳に入りて、それより芳雄の殺されたところは、何だか公園のやうなところだと言ふから、ひよつとすると、八重洲の古寺の處ではないかなどいふに、偕は此軍人は兄の禮一を捕へた男なるべしと氣がついて、次には彼の八重洲の古寺といふは、正しくわれが怖ろしい吟味を受けたところだが、若し従兄弟の芳雄が殺されたとところは、彼の軍人の推察の如く、盡々八重洲の古寺に違いな

くば、此奴胡亂な話した、して見るとどうもわが黨員の所爲らし
く考へられると、思はず眼を光らせしが、軍人の話はどうした端
からか面白き怪談にうつりぬ、甲君等は今朝の立憲新聞に出て
居た死面美人といふ記事を讀んだか、乙死面美人とは何のこと
だ、一体譯の分らぬ言葉ではないか、甲まだ知らんのか、呆れたも
のだ、巴里では評判な話したせ、何だ詰らない、甲イヤ本當だぞ、
此處に新聞を持って居るから讀んで聞さう」

巴里の町に奇々怪々妙不思議なる婦人あらはれたり、此婦人
はマルタ島の生れにて財産もあり家柄もよく、年はまだ二十
一二の若盛りなれど、憐れむべきと生れ落ちし時より其面色
さながら死人の如く、一見人をして戦慄せしむる程なりとか
されば常に假面を被りて人に接し、居を共にするものには、
素顔は決して示さずといふ、素より當時の規則を妄りに假面

を取らしめ其相貌を檢せしめしに、成程怖ろしとも言はん方
な、顔色なりしとか、併し其原因に就ては奥田氏も判定する
能はざる由。

「何だ馬鹿々々しい、好い加減な話ヨ、君等はそれを信じて居る
のか、甲信じるも信ぢないも、僕は現に其婦人を見たサ、假面の
上から見たッて分るもんか」廣政は妙なことを聞くものかな、
と尙も軍人の方へ眼を注ぎ居る折しも、向ふの隅より「一寸其
新聞と拜借」と言ひながら、ツカくと進み来るものあり、何者
と見れば、嘗て笠間夫人の家へ來りし探偵なり、此奴悪い奴が出
て來た、ラツかりして居ては劍呑だと匂々此家を出去り、町中を
歩みながら、今の假面夫人といふは、恐らく乙英子であらう、あの
總理の比留間め、てツさかりおれを欺し居たナ、斯く英子に就て色

ことサ「廣政は藤田大佐が何を言ひ出すやらんと痛く心配せり藤君が先晩吟味に遇つた節婦人のところへ手紙を書けと言つたのを辭したのは、實に立派であつたヨ。藤君はそれを知て居るのか藤左様サ併し君婦人といふものは實に危険だから注意し給へ、恥を言はねば分らぬが、僕も數年前婦人のことから計畫が露顯して、あの探偵の路橋に捕つたこともあるのサ、モツと近い證據はわが黨の總理サ」廣政は「總理がどうした子」と驚きながら問詰めたり藤「ナニ馬鹿々々しい話ヨ、總理はあの英子といふ女に迷つて居るものだから、大變な失敗をして、實はわが黨の事を起すのも夫れが爲めに後れて居る次第だ、本人君の從兄弟が不思議な暗殺に遇つて、夫れで探偵が入込んだからとは言ふもの、廣政、夫れに就て今計らずあの咖啡店で聞いたが、從兄弟そのの八重洲の古寺で殺されたのではないかと言ふこと

々々考へて人を欺すところ見れば、戀人の競争者たりし從兄弟の芳雄を殺したのは、必ず此留間であらう、若し今の死面とか假面とかいふ婦人が英子なりとせば、死面も假面も何だか分らないぞ、醫師の奥田といふは、現に我黨の一人で、密かに警察へ入り込み居るものだから、廣政は考へに沈んで首うな低れて行く後より「ヤア好いところで遇つた、是非話したいことがあるから一緒に來て呉れ給へ」といふものあり、見れば藤田大佐なりき、廣政「これは久しぶりで、一緒に行きませう、併し今其處の咖啡店で例の探偵に遇つたから此邊へ劍呑だ何處か遠方へ行くことに仕よう藤さうく二人が一緒に居るところを見られては大變だ、それでは急がうと」急ぎ足にて歩行ながら藤「賭博や酒はわれ等の仲間にあつて都合の善いこともあるが、併し今一ツの道樂は是非慎しまねばならんヨ、特に君に於て、何か子藤無論婦人の

サ、君の従兄弟と非常に英子を慕ふて居たやうではないか、し
て見ると、廣と云うだね、エ、全體の古寺はわが黨の本營として
あるところだから、子、どうも比留間が怪しいヨ、廣、フ、ン、僕も何
だか訝しく考へるが、まさかには、併し英子は英國へ往つたと總理
が言つたが、眞にさうだらうか」と問ひ試みたり、藤田と意味わ
り氣に「疑はしいて」と言つた切り、何も言はず、廣政は尙ほ英
子のことを問ひたく思へど、疑はれてはならじと口を噤んで無
言なり、斯くて藤田は田宮の公園の方へ行んとするを、廣、公園へ
行く積りか、あの賑やかなところへ、廣、ア、そんなに驚き給ふな
公園で面白いのを見せるから、サ、實に不思議なものを、見せる
積りだ、廣、英子でも居るといふのか、廣、ア、そんなことだらう、廣
若し英子が居たらどうする、廣、少し決ることがあるのだ、廣、何を
廣、若し英子がまだ巴里に居るやうなら、本部に通知して總理の

處分をせねばならん」廣政は藤田の言ふことに就て、いかなる
意味の含み居るとか、之れを解するに思ひ悩み、歩行ともなく公
園へ來りぬ、此田宮の公園といふは、當時佛國第一の繁華の地に
して、此處には演劇あり、舞踏あり、手品師あり、殊に人々の面白が
りて、集ふものは、易者にして、此易者公園の隅なる洞穴の奥深き
ところ、に坐を占め、高き帽子を被り、白き鞆をつけ、いかにも仙人
らしき風態をなして、問ふに應じて、人の運命を告るなり、今しも
藤田と廣政とは、此前に來りて、向ふより歩み來る男女を見付け、
藤「ヤ、ア、勝澤が居るナ、そして同行の奴は平崎だ、ム、あの娘が光
子といふ魔物だ、ア、勝澤、あの男はわが黨の人ではないか
藤「さうだ、あの勝澤、平崎と同行するやうでは怪しいぞ、棄てよ
と、置けん、廣、ナ、平崎、平崎とは、藤、探偵の路橋と同類の奴だ、實に
怪しい奴だ」廣政は勝澤と光子とが手を取り合ふて、いかにも

殺し氣に語り来るを見ておのれは顔を見知られざるこそ幸ひ
なれど、側近く進み寄りしに、当侯爵が自身で来て結婚はさせな
いッてサ、フ、ンさうか、掛ふものかわの禮一も殺すサ、生して
置ては邪魔になる、ナニわの一家のものは恐く殺しても構はん
此怖ろしき言葉に廣政は驚けり、おのが兄の危険なるを知りて
は一時も猶豫はならず、早く兄に其事を告んものと思ひ居ると
さ、願、どうも怪しい、探偵同様の娘ナニ上等淫賣女の光子と一緒
に歩いて居るやうでは決して油断は出来ぬ、早く處分をしよう、
どうだ子此公園には不思議なものがあるだらう、探して居るう
ちには、まだく面白くも出て来るぞ、廣政は只兄の身の
上に就いていかにせばやと考へつゝ、森の樹陰の方へ歩み行きし
が、突然兄の禮一に邂逅したり、斯は幸ひと廣政禮一の側へ寄り、
先づ藤田大佐を紹介し、偕て今のことを語らんとするとき、藤田

は廣政を小手招きして「お二人で話しもありませうから僕は
是れより失敬する、併し餘り長く話しをしないやうにし給へ、若
し平崎や勝澤に怪しまれると厄介だから、そして君に頼みたい
緊要の事件は、彼の假面婦人の一件サ、僕はどうも英子と認定す
るのだ、そして今夜總理の比留間が此處で假面婦人に出會する
手筈を探つてゐるのだから、君よく注意して英子か英子でない
かを確かめて下さい、して其事を極秘密に明日僕へ知らせるやう
な都合にして」とひそめ告て藤田は答へも待たず去り行き
ぬ、廣政は倍こそわが推察の通りなれ、何にしても英子に遇へる
は嬉しいことだと心に笑みつゝ、振り返りて兄の禮一に向ひ「ど
うも御無沙汰をして申譯が御座いませぬ、盛イヤそれとお互だ
から、併し私も芳雄さんが殺される結婚のことに就ては伯父と
喧嘩をする、色々のこととで苦勞するヨ、廣ハ、不平崎の娘と結婚

辟するは正しく光子なり、一は寸時も堪らず、廣政には何の返
 答もせず、遂に行きたり、廣政も假面婦人と聞て、屹度英子だら
 うと心に思へば、これも同じく洞の方へ急ぎ行きぬ、今しも彼
 面夫人は植込になり居る細き道へ姿を没して洞の方へ進み行
 くにぞ、廣政はいかにして此婦人を仔細に見極めんか、これには
 大いに當惑せしが、漸く一計を案じ出し、彼易者の密かに出入す
 る後面の入口を見出し、此戸をコックと叩きたり、易者は内よ
 り、誰れですと問ふに、廣一寸頼みたいことがあるのだ、入れて下
 さし」と言ひつゝ、早くも中へ這入りて、「實は今向ふから假面
 婦人が来るが、其婦人をよく見たいのだ、禮をすから、君しばら
 く僕に其坐を貸して呉れまいか、馬それはお安い御用、併し其
 が知れると私の職業がなくなる次第だから、百圓程願ひます、
 宜しい」と直ちに百圓程の金を出せば、馬それぢやア早く、さア

するといふことで、其事を誰れに聞た子、廣今歸ましたヨ、其女
 も来て居ます、禮一を狙ふことを告んどせしに、禮一は「ア、もう
 薄情勝澤の禮一を狙ふことを告んどせしに、禮一は「ア、もう
 伯父には見離される金はなし、光子の方からと結婚の準備を催
 促する、實に仕様がなから、お前に相談して、あの貸してある保
 田の城を賣つて仕舞うと思ふのだ」と聞て、廣政ギョツとして、此
 奴大變だ、賣られて堪るものか、笠間夫人、かくしある財寶、何處へ
 移すことの出来るべき、實に革命黨の一大事と心神動亂して思
 慮亂れ、廣エ、保田の城、それは賣ることは出来ませぬ、何故」
 との一言、早速に返事も出さず、廣イエサ光子との結婚はだめです、
 わの女は魔物です、あなたを欺して居ますと」辛くも言ふとき、
 彼方より「ア、チヨイとお聞きなさいヨ、名高い假面夫人が易
 者の洞の方へ行くつてサ、早く往つて見せせうヨ」と愛らしき

「おと娘を早くおつけなさい」廣政は可笑しさを忍びて見ると、
の服をつけ終りぬ易能く似合ます、夫れなら大丈夫、そして何と
か誤魔化してお置きなさい、どうせ私も無茶を言ッてるのです
から、何れ三十分程たつたら歸つて来ますヨ、して表の番人には
其婦人の外入れないやうに言ッつけて置きませう」と言ひ捨て
何氣なく外へ出行きたり、廣政は餘り易者の受込みよきに、或ひ
之比留間が英子に遇はん為め豫じめ巧み置きたるにはおらず
やなと疑ひを起せり、斯くて眞面目に易者となりて今や来ると
待つうちに、假面婦人は漸く近づきおれり、廣政は片唾を呑んで
假面婦人の容子を見て居しが、やがて無言にて前に立てり、彼方
は易者が何と言出すや待つものゝ如し、廣政は其聲を聞んど欲
して態と黙し居れり、眼計りは見えても面貌は素より分らぬば
未だ誰れとも知るやうわらず、婦人は待遠しさに堪へ兼ねてや、低

き聲にて「来ましたヨ、来たのですヨ」此聲は疑いもなく英子
なりき、廣政は「英子さん」と言ひつゝ、帽子と袴をかなくり捨
て、明らかに廣政なることを示して立てり、是れ實に英子には意
外のことなり、「アレ」と叫びて逃げ出んとするを、廣政しつか
と押へぬ、英、あなたは實に失禮なことをしました子、廣政どうしま
した英、あなたは匿名で私に今夜此處へ来いと云つて来たでは
ありませんか、廣政そんなことは知らん、英では今夜十時前に此處
へ来いと云つたのはおなたではない子、そんなから矢張二月遇
なかつた人だらう、比留間のことか、二月遇なかつた、そんなこ
とがあるものか、英、イェ、あの探偵が来た夜から遇なかつたので
す、廣政、あなたの顔はどうだ、か、斯うだ、か、新聞に出て居るが、こ
れも全く比留間の策だ子、醫者の奥田に甘く言はして、英、決して、
私は薬を塗て顔を醜くしました、新聞に出て居る通りです、ハイ

私は一身を比留間さんに捧げて居ます。これ程あなたに比留間に盡して居るに、二月も遇ひにいかないと、實に薄情だ。ナニ黨派の務め、それは私でも同じことだ。私はそんな薄情なことはない、フム。此處へ呼んだって来ないでは役に立ん。英「けれども私が少し早やかつたから、今に来るでせう。盛来るものか、あなた顔が醜くしたから、屹度愛想をつかして仕舞たんだ。英「あなたはどうして私を此處で待合したのです。廣「巴里に名高い假面婦人とはどんなものか。見たくなつてサ。英「それが本當なら宜しいが、これから氣をつけて斯んなことをしな。やうにして下さい。」折ふし戸を叩く音の聞ゆるに、儲は易者が歸つて来たか。疑はれては大變と、是非に及ばず残念ながら英子を歸らしめたり、英子の姿見えなくなるを待ち、やをら其戸を開けば、ト入り来りしは斯はいかに易者にわらず比留間なり、エ、と互ひに呆れ顔、

互ひに嫉妬の角突き合ひ、睨み合ふて立ち居るところへ、今度は眞實の易者が歸つたらしき容子に、疑はれては大變と比留間はコッソリ逃し出れば、廣政も續いて出ぬ。比留間廣政を呼び止めて、極めて小聲に「英子を慕ふのは自分で死地に行かやうなものだヨ」と言ひぬ。比留間と英子との失望、廣政が正しく英子を認めたる得意、三人の心果していかん。

第十回

平崎の家は、實に怪しき家なり。令嬢光子といふは、最初禮一と結婚の約を結び、次には細を以て高山侯爵を認はし、今は勝澤と親しく、又探偵の路橋にも何か関係のあるものゝ如く、そして先夜田宮の公園にて禮一に會ひしときは、又も親しく話して昔しと變らず、此女の舉動はいかに自由自在にして、譯分らず、されど光子の怪しきよりは、父の平崎は一層怪しき人物なり。表面は立

何なるぞ、是れ即ち闇黒部屋と唱へて、密かに人民の手紙を開封し、其秘密を發くところなり、實に平崎は政府の内意を受けて此怖ろしき業をなし居るなり、されば此處には書狀を開く器械、蠟を溶す鐵器、糊をゆるくする蒸氣等、萬づ備はらざるものなかりき、此事は警視總監と探偵の路橋外三人の下役とを除き、誰れ知るものもなく、さすがの革命黨も注意せざりしなり、平崎は我が家の書記ながら豫て勝澤を怪しみ居りしかば、勝澤に宛たる手紙は必らず下役に預け置しめたり、今や二通の手紙の其一通を取つて讀み下せば、前略御免借て殆んど二ヶ月にも相成候に、彼鍵か返し之れなく甚だ迷惑致し居候、至急御返却下され度候也軍營にて武藤よりと記しあり、ハテ何の鍵だらう、路橋にやつたら分るか知らんが、おれに何だか分らん、さて次はと、第二の手紙を取ら、オヤ、此手跡はたしかに娘の光子が書いたのだ、何を勝澤

派なる紳士なれど、其裡面と果していかに、夜の三時頃人の働くべき時にあらざるに平崎は起き出で、帽子外套に面をつゝみコッソリ外面へ出往きぬ、ア、此夜深に遠くまで歩いて行かねばならぬとはつらい話だ、月給は相當に呉れるが、今日まで働いても財産は出来ず、オ、あの路橋は甘い仕事を、見付たさうだ、革命黨の首領を捕へるか、芳雄を殺したものを、見付るかすれば、太變な儲けがあるさうだ、おれにも何か甘いことが授けられないか、ナと獨言しつゝ、段々寂しき町へ行き、一軒の家の前に立ち、鍵取出して戸を開きたり、中は薄暗きランプを照して、何となく物凄さ景色なるが、平崎はやがて椅子を登り二階の一室へ入りぬ、此室は一つの窓もなき怪しき部屋にて、ランプの光り極めて明らか、机の上には小刀、紙切刀、護謨糊入れ等、悉く備りあり、又鄰室にも二三人の男居りて、平崎の來るを待受居るなり、抑々此家は

來ると仰せられし後、一言も其婦人に就てお話し
 候、何卒先日のこと、御失望なく、益々娘を愛し下されたく、馬
 鹿だナ、此保母の奴は、又秋子といふ娘もいやに自惚が強いぢや
 ないか、禮一が慕ふて居る婦人は、現在おれの娘だに飛んだ間違
 をやつて居るものだぞ、と平崎フ、と笑ひしが、忽ち手紙で机を
 打ち、ハ、ア分つた光子が勝澤へやつた手紙に婦人の死ることを
 が書てあつたが、全く此秋子のことだ、秋子は棄て置ても死る、小
 姑がこれで亡くなれば、あどはわがま自由の侯爵夫人、何十萬
 の財産を小指でわしらす品玉とは、わが子ながらも怖ろしい巧
 みだが、ハテ甘く往くか知らん、ム、勝澤に嗽て禮一を殺させる、
 ろれから侯爵をたらし込む、甘く考へて居るナ、と氣味の悪き笑
 ひを洩せし時、又もや一束の書状を下役より差出したり、平崎は
 其うち鼠色の状袋に封せし書状を返して、此奴は酷い嚴封だ、何に

へ言ッてやつたのか知らん、ナニ、彼人を慕ひ居候婦人、と重
 き病氣にて程なく死去る、何のことだ、誰れが死るのだ、ム、妾と
 柔らかな人は、嫌ひに候、若し他の競争者あれば、其人を殺してモ
 事を成すやうな人を好み候、フ、ン甘く計るナ、さすがにこれの
 子だ、といかなる意味にや、平崎獨り黙頭居しが、其處へ下役は高
 山禮一へ宛たる手紙を差出した、り、平崎は手際に開封して、何だ
 コテ、書たぞ、女の手だナ、民子よりとしてある、ナニ、秋子
 親はあなたのことのみ思ひ煩らうて、夫れが爲め病の床につい
 たぞ、そして只今では生死の程も相分らずとは、大分古風な戀だ
 ナ、何だ、侯爵の御處置は餘り歴制過る、妾の本國英國など、と結
 婚は當人の自由任せ、ハ、ア此民子といふ奴は保母だナ、それ
 から何だ、あなたが他の令嬢に結婚したき旨、御申出なりしとは、
 全く侯爵の計略と存じ候、其證據は、侯爵が他の令嬢の方を斷り

をうろついで居たといふことは聞て居るが、此手紙で見ると最早陸へ揚てかくして居ると見える、何にしろ妙だ、此奴は甘い、イヤまだ二白があるぞ、若し頭より使をお遣しに相成候はい、小賣商人の風にてお遣し下されたくして「留針はどうです」と申せば、私より「珊瑚の留針は、りますか」といふやうに仕組度候、フ、ン珊瑚成程珊瑚だ、珊瑚の財寶ならば、少なくとも千萬圓以上のもに違いない、甘いぞ、甘いぞ、此奴を吞つたッて盗賊にはならない、光子の巧みは首尾よく候、番夫人になりすました處が、高が二三萬の財産だ、おれが此仕事を甘くやると一足飛の、大身上妙々、と平崎は早や此財寶を取たやうに喜びしが、待所し此財寶のある所は何處だ、島に近い海岸で、片岡町から二日路位のところだと、ハテナ分つた、保田だ、城といふからは保田の古城より外にはない、好しく、其處で此仕事をやるには先づ二

し、ろ胡亂なものに違いない、と蒸氣にて封糊をゆるめ、辛くして開き見しが、封皮には森教授へと書きながら、中には廣尾殿へ、御存じの妹よりと記せり、愈々變だ、屹度革命黨の手紙に違いない、儲て出たところ、は片岡町の消印がある、中の日附が廿口で消印が二十日、スルト、大分遠方から片岡町まで持出したに違いない、其處で其文句は、何だ當方も段々危険に相成候、就ては例の財寶は中々心配に御座候、納めてある穴の處は外の通りに近く候、得ば、人に見らるゝことも定めて早かるべく、先日、來古物學者と加申して、城の見物に參るもの、二組計りも之れあり、海岸前の島又、は港より、も態々、城見物に來るものありて、いつ財寶の所在を見出さるゝか、分らず、所詮安心出來兼ね、候間、商店の頭へ此旨お通じ、下され、至急財寶の移轉なるやうな取計ひ下され候、ハテ愈々怪しい、屹度革命黨の手紙だ、革命黨が財寶を船に積んで海邊

週間ばかり政府に暇を費ふ事として相棒に路橋を頼るかイヤ
く金の山分は面白くない一人だ一人だだが一體此廣尾とい
ふ男は何者だろう又此森といふ男も分らない先づこれから調
べて見よう、と町名を見て、其手紙をポケットへ捨込み外へ立
出たり。

第十一回

此夜平崎は彼の廣尾なるものに宛たる書翰のみを取り、他は悉
く配達せしむる様なせしかば、勝澤へも彼二通の手紙は配達し
來れり、一通の手紙は、エ、武藤から鍵の催促かと言ひながら、勝
澤一向無頓着の容子なり、此鍵はいかなるものなりや、是れ即ち
士官の武藤が巴里の中央に持居る庭園の鍵にして、二月程前勝
澤に貸し與へ、此庭園へ遊びに入ることを許せしなり、又一通の
手紙即ち光子よりの手紙には、勝澤頼りに小首を捻りしが、やが

てハダと膝を打ち、成程此間田宮の公園で、光子が禮一に保田へ
往つて城を賣れなぞと言つたが、して見ると此おれに禮一を殺
せといふのだ、其保田へ行く途中で、禮一がおれの自由にならぬ、
ら是非彼奴を殺して仕舞なれば光子はおれの自由にならぬ、
好し殺して遣らう、ナニ構ふものか、貴族を殺すのはわが黨の主
義だ、例の決闘で、さうだ、併し困るのは保田へ行く旅費に差支へ
るが、ナニ賭場へ往つて儲けて來よう、そして禮一の出立する日
を明合せて、さうだ、さうだ、と獨言早くも外へ出立きたり、然るに
勝澤の後より白髪の男従い來て、勝澤と同じく賭場へ這入れり、
勝澤は探偵ならんと薄氣味悪く思ひしが、今は避るべき機会も
なければ、詮方なしに人の衆り居る中へかくれて、先づ骨牌の仲
間へ這入りぬ、見れば廣政がいと熱心に骨牌を取り居るに、此奴
悪い奴に出喰したとは思へど、俄かに其處を立去る譯にもいか

なくなつた男少し貸してやらうか。勝は君を知らないに、それで
 ても貸して呉れるのか。男は君を知て居るヨ、よく知て居る勝
 ハテ、僕とどうも見えがなないが、君の左りの手を出し給へ」
 勝は、さては珊瑚黨の人か。薄氣味悪く手を出せば、男は指に
 て其掌へ符號を書けり。此符號は珊瑚黨の部長のみが用ゆる權
 利のものにして、其他の黨員が之れを用ゆれば、嚴罰を受ける規則
 なり。勝は之れを見て大いに驚けり。何んとなれば此男は正し
 く珊瑚黨の部長にして、此人の言ふところは可否を問はず、従は
 ざるを得ざればなり。長分つたか、好し、其處で君に言ふことがあ
 る。君は探偵同様のもの、娘に關係して居るが、それは後來なら
 んぞ、其平崎といふ奴の娘だ。上等賣淫女だ。勝は光子を上等
 賣淫女といふに呆れ、之れに關係するなど命令せられて、顔色變
 れり。勝ハ「宜しい」とは言ひしもの、其心中穏かならず。長實

す。しばし骨牌の勝負を試みしに、運悪く最初から負け續けて、十
 四五圓の資本一文もなくなりしかば、エ、馬鹿々々しい、暗ける
 ところか、資本さへなくなつた。と大いに失望して、這狸の窓の方
 へ行くと、廣政は早くも認めてついて来り。「コウ君、此間田宮の
 公園で言つたことを忘れはしまい。子、君は僕の兄を殺すと
 言つた子、僕も君も同じ仲間だから争ふことは止めるが、併し若し兄
 の身の上は何かい起れば、僕も直ぐ君を殺すヨ、覚えて居るが好
 い。勝、何のことだ。僕には分らんヨ。廣トボケたッて無益だヨ。君が
 探偵同様のもの、氣に惚れて居ること、既に本部へ通告にな
 つて居るぞ。ナニ僕が密告するものか。僕よりズンと有力な人が
 したのだ。覺悟して居ヨ」廣政は斯く言來て、山行けり。勝は
 腹立しさと悔しさに、ポンヤリ立て居る後から、彼探偵と思ひし
 白髮の男聲掛て「君は金を借取られたさうだ。子勝さう、一文も

は君を罰に處するといふことになつて居たのだが、僕が其間に這入て許してやるのだ、併し只は許せない、相當のことをしなければならん、勝とてういふことです、且、大事件を引受て甘くやらねばならん、それに就て君は今直ぐ此巴里を出立しなければならん、此處に金が四百圓ある、之れを渡すから受取り給へ、そして本部からの申渡しはこれだ、あとで見ると好い勝、宜しう御座います、併し何をしますので、長實は近日巴里を出立する人があるが、其人が向ふへ到着するまで、わが黨の爲めに、大變な都合が出来、そのだ、其處で其人を途中で妨げる用事だ、此事件は全く君の試験だから、甘く行んと君の命にも關係するから、しつかりやり給へ、ナニ妨げることは君の權に在るサ、モウ一ツ言つて置、其人の名は即ち高山禮一だ、其弟はわれくの仲間、で要人の人が、併し黨派の不利になるものなら、仕方がない、片付ねばならん、

勝澤は禮一の名に剛まされ、直ちに承諾したり、命を受けざるも、殺す積りの禮一なれば、勝澤大いに喜びたり、されど光子を捨てよとの命には、實に困却せしが、根が横着なる勝澤、ナニ構ふものか、禮一を殺して、あとには光子と結婚するサ、さうして仕舞へば、革命黨も何もあるものか、好し、構はん、構えん、と、獨合點して、直ちに左の如き簡短なる手紙を光子に送り、

小生事御申入の如く、彼れと決闘致すべく候、勝つことは請合に候。

第十二回

高山禮一はいかにもして、光子と結婚せんと欲し、先づ其費用に保田の城を賣却せんと決心せり、最早斯う決心する上は、縦ひ弟の廣政が何と拒むとも、法律に訴へても、此城を取戻すべしと一週間の賜暇を外務省へ出願せり、外務省にては、其用向より保田

突立つ男再び辭掛けて「君は高山侯爵の甥で禮一といふのだらう、何故返事をしないか」と咎めぬ。何だか見やうな人が、僕はしつかり知らぬ。君は一体誰だ。男は平民の勝澤春吉といふものだ。其勝澤君が僕に、何の用があるのだ。勝澤政治上の意見が違ふから決闘しようといふ用だ。決闘か、決闘を申込れてはあどへは引ぬ。併し何の理由で決闘するのだ。勝澤政治上の意見が違ふといふ理由山サ。何んぞは理由にはならない。勝澤もならぬ。あるものか。われくの黨派では高山一家のもの。のを悉く殺して仕舞ふ計畫があるのを知らないか。現に君の従兄弟の芳雄も殺されたではないか。君は僕を殺す積りで来たのか。知られたとだ。先刻から君の馬車を散々邪魔させたのは、總て僕が頼んでさせたのだ。眞卑怯な男だ。併し君と決闘する理由はない。勝澤それで言はう、あの光子のことに就て」と聞

へ行く道筋等委しく訓べしかば、豫て外務省へ入り込み居る。瑚の黨員は直ちに此事を本部へ通告したり、本部にては豫て廣政よりの財資移轉の請求もあることゆゑ、斯くなる上は仕方なしとて、借こそ勝澤へ禮一の行くべき道筋等細かに申し渡し之れを道にて妨止せしめんとしたるなれ。勝澤は五月の廿六日に巴里を出立せしが、禮一は後れて廿九日に立したる。勝澤は身怯にも禮一を人知れず殺さんものと、禮一の乗りたる馬車を邪魔し谷底へ落さんと巧みしこと。兩三度に及びしかど、禮一の運や強かりけん、不思議にも其禍を免れて、漸く保田近く進みぬ。心のうちには秋子の保母民子が飛んだ間違して、われに送りし手紙の可笑しく、さすがに秋子が病床に就きて命危うくなり居る。このこの氣の毒にも笑止になりて、思はず小首を傾けしが、忽ち「高山禮一君」と呼ぶものあり、ハテ何者と見れば、馬車の前に

くや禮一は大きいに驚けり何だ光子だ平崎の光子なら僕と結婚する約束が定つて居るそれがどうしたといふのだ馬鹿め、女に欺されて、僕は平崎の書記で光子と結婚するものは僕だぞ、嘘と思ふならこれを見よ」と投げ出したるは光子より勝澤へ送りたる手紙なり、禮一を殺せと言はんばかりの手紙なり、禮一と馬車を止めて之れを讀み、其手跡の光子に間違なきに驚きつゝ、齒を喰ひしばり無念の涙せきあへず、エ、非婦め、毒婦め、よくもわれを欺した、成程これと思ひ出すと、此間日宮公園で光子と一緒に居た男は此勝澤だ、そして弟の廣政がだまされて居るのだと忠告したは眞實であつたか、もう斯うあれば仕方なし、怨みつらみを手紙に遺し、にっくき勝澤と決闘し、運よく彼れを殺したら、かのれ光子だけは置いと、今度には僕の方から決闘を申込み併しうだ決心したのか、もう今度には僕の方から決闘を申込み併し

二ツの約束をしよう、第一介添人を頼む事、第二手紙を書して片ふ、勝宜しい幸ひ向ふの家へ往つて二ツの事を頼むサ」斯くて二人と打つれ立て行きしが、勝澤先づ家の内へ這入りぬ、主人といふは体格逞しき偉丈夫にて、家の内に軍銃などのあるを見れば、本は軍人なりしならん、勝澤と理山を述べて決闘の介添人たらんことを頼み、若し承知して下されば、巴里の方で喜ぶ人もある、その一言、主人は早くも革命黨と悟りて、快よく承諾したり、其處で決闘の理由書も出来、各々の調印も済んで、禮一は約束通り光子へ怨みの手紙書んどせしが、イヤ待ておんな毒婦に何を言つたッて詰らん、それよりは彼の親切なる秋子へわが過ちを述べし手紙送らん、頼に思案を變へて、いと細々と今の思ひの様を記しぬ、斯くて主人に其發送方を依頼し、愈々決闘に掛らんとせしが、主人の勝澤に向ふて、僕も自由主義の人間だ、だが公

足をすべらし、力入らずして僅かにかすり疵を白したるのみ、反つて勝澤に踏込れ肩先深く斬下られぬ、アツと一醉禮一其場へ仆るゝを去ア、殺した」と其の中へ割て入り去ハ、まだ全く死はしない、夫れぢやア僕がこれから療治する勝澤は君の勝手だ、定めて僕が殺されたらよかつたらうに、御主人御苦勞でし何れ巴里へ歸つたら本部へ告てお禮をしませうヨ」と怨めし氣に言ふ、去何だ詰らん、僕を威したッて恐れはしないヨ、君は早く支度して行くべきところへ行くが善い、此時禮一は口より血を吐き、半死半生の体にて横はり居れり、禮一の生命果していかん。

第十三回

高山侯爵は此三月間色々の不幸に遇へり、一子芳雄が怪しき死様をなせし以來、面白からぬことのみ起れり、甥の廣政は素よ

平の信義は何處までも守るのだから、若し此決闘に君が卑怯な手を山したたら、直ぐ中止して改めて僕が君と決闘するヨ、夫れと豫め断つて置く、勝澤は「宜しい」と言ひしものゝ心のうちには大いに迷惑せり、實に勝澤も卑怯なる劍法にて人を殺すに妙を得たるものなりけり、是に於て二人は劍を抜き主人の掛辭と諸共に、一上一下一負けず争ひ出したたり、勝澤は得意の手にて只一突に突き殺さんとは思へども、先きに主人が卑怯なる手を用ふるなどの言葉もあれば、さすがに懼りて只だ普通の法もて闘ひしが、相手の禮一も中々武術は心得たるもの、動もすれば却て此方らが危ふくなるにぞ、もう叫はじと悪き手段を出しかけるに、主人は醉掛て屢々之れを止めぬ、斯くて禮一は勢ひ益々盛んに、エ、と一醉勝澤の肩先さへ切り込みたり、アハヤ勝澤肩より胸へ切り下られしと見る間、禮一は不幸にも僕の首に

の人 家出なとは、大抵戀の爲めなり、秋子の慕ひ居るは禮一なれ
 ば、いで禮一を糺し呉れんと其家へ人をやりしが、禮一は田舎へ
 行きて留守との返事、侯爵はじだんだん踏で怒り罵り、歸つても家
 へと入れるなど奴僕に言渡しはしたものと、偕て捨置く譯に行
 かせれば、其穿鑿方を警視總監に依頼したり、總監は又もや之れ
 を路橋に命じぬ、路橋はいと迷惑さうに濫々其探偵を承諾した
 り、何故斯く路橋が迷惑がるか、それには一箇の理由あり、此日よ
 り五六日前の事、巴里に評判高き假面婦人が、芝居へ這入りしを
 認め、何でも此奴怪しいとさすがは探偵敏く睨んで、あとよりつ
 いて這入りしが、斯くて夜も更け芝居もやがてはね前になりし
 頃、一人の男假面婦人を運動場へつれ出しければ、路橋も忍んで
 其あとにつき、共に語れる話しを聞きけるに、男の名はたしかに
 廣政と言ひ、女の名は英子と呼びぬ、其話しの容子に據れば、女は

り他人の如く絶て相見ることもなきが、今日に至つては、其兄禮
 一さへも光子のことより出入を止めることとなり、今は只秋子
 を企てるのみなれば、侯爵は再度の妻を迎へて男子を生まし
 高山家を繼せんものど人に語りぬ、特に光子に會ひし後、屢々
 此事を言出したるこそ訝しけれ、然るに六月の初旬なりき、或る
 朝侍女はわわたいしく嘔けて來て、保母の民子と娘様とは何處
 へかお出になり、あどに此お手紙がと差出すを、侯爵驚き讀み下
 せば、私守當時他出致し候、委敷ことは、近日歸宅の上申上るとの
 書置なり、侯爵は見るより赫と怒り、これ全く保母の民子が娘を
 そよのかしてつれ出したもの相違なし、英國の保母を置きた
 るは、わが生涯の過ちなりと悔みしが、偕て何の爲めに家出せし
 や、また何處へ行きしか譯分らず、只秋子が家を出る前に何處か
 らか、手紙の來りしことのみ、侍女の口より分りぬ、されど少きも

立腹なのですか、君は芳雄を殺したものを直ぐ見出すと
 「私に用がないと仰しやるならば一應は何とか言ねばならず
 り命せられし務めのことなれば、一應は何とか言ねばならず
 用はない歸つて下さい」路橋は反つて喜びたり、されど總監よ
 アさうか、私、此事を探偵に頼む積りで、はなかつたのだ、君には
 たり、路橋、君は、何しに此處へ来たのです」と、荒々しく言ひ掛け
 立し、君は、今も路橋が番人に導かれ、来るど見るより、腹
 居るどきなれば、今も路橋が番人に導かれ、来るど見るより、腹
 侯爵は路橋が芳雄を殺したるもの、探偵に不然心なるを怒り
 と、思へど、總監の命、黙止難さに迷惑ながら、高山侯爵を音づれぬ、
 に、餘念なし、此上高山侯爵の娘、穿鑿などは、高山侯爵を音づれぬ、
 澤ならん、と、目星はつきたれど、今は、此探偵より、財資奪掠の工夫
 に、怪しきこと、之れより、推測すれば、芳雄を殺したものは、多分勝
 澤ならん、と、目星はつきたれど、今は、此探偵より、財資奪掠の工夫

ろの寺院の近傍にありて、彼の禮堂一が怪しき男に出遇ひたる、こ
 の寺院の近傍にありて、彼の禮堂一が怪しき男に出遇ひたる、こ
 崎より武藤が勝澤に、鏡の催促したること、武藤の庭園は八重洲
 と、照に、其手順をなし居る時、なればなり、されば、路橋は友人の平
 もの、探偵位に骨を折るより、寧ろ手短かに、此財資を分捕せん
 るものも、なさに、僅か二三萬の報酬を當てにして、芳雄を殺した
 太い根性を、出し、どうせ法律以外、の財資を取たから、とて、誰れ訴へ
 くも、革命黨が船に積來りし、財資なることを悟り、こゝに、路橋は早
 て、穴蔵に納め、ある旨、男の口より、細かに聞きければ、路橋は早
 居る、この顛末、委しく話し、借て、財資は、なかく、多額のものを、
 田の城と言ひ、其城にて、笠間夫人といふものが、財資の番をなし
 女をつれ、出さんとするものにして、其行くところ、はさしづめ、保
 愛する男の、遇ひに來らざるを、怨み居り、男、其、虚に、乗じて、他へ

受合ながら、もう三ヶ月にもなるに、まだ見出さないではないか、君は私を欺したのだらう。跡イヤ決してそんな譯でとないので、もう段々分つて來ました。大抵は目星もついて居ります、それに芳雄線が殺害に遭ひなすつた場所も分つて居ます。跡ナニ場所が分つて居る、それを何故早く言はんのです。跡實は昨夜遅く分つたのですから、まだね話し申し上げる時がなかつたのです。と出だらぬに言へば、跡さうか。其場所は何處です。跡八重洲の寺院のあるところであの庭の中で殺されたやうです。跡其庭の持主は跡武藤といふ武官です。跡武藤々々、それは其晩禮一をつれて來た男だぞ。跡さうです、併し武藤は此事に少しも關係がないやうです。實は武藤が三ヶ月程前に其庭の鍵をなくして困つて居るので、實は武藤にはたしかに誰れか這入たやうな容子があるのです。から其鍵を拾つて持つて居る奴が怪しいのです。跡ハ、ア

夫れで是れからどうする子。跡私に合鍵を造り、人を其庭の中に毎晩忍ばせて置うと思つて居るので、必ず來るに違ひありません。其上八重洲の寺院が怪しいのです。跡成程跡それで願つて置きますが、此事と極秘密にしなければなりませんから、誰れにも仰しやらないやうに願ひます。警視總監にも當分れ話しのないやうに。跡とは、若し斯くまで細かに探偵が居いて居るならば何故早く其兇行を捕縛せぬかと責められんことを恐れしな。り。跡爵は此言に少し怪しく感ぜたりしが、止むを得ず「宜しい、それは言ひますまい。跡それでは向ふ二週間のうちには分るやうに致しませう。跡さうなれば充分な禮を致すことにしませう。跡其處で御令嬢のお出先は探さんで宜しいのですか。跡さうそ。れは願ひませせん」跡橋は既に立去らんとせしが、跡爵は「其庭といふは八重洲の寺院のところですか」と確かめたり。跡左様

です」と答へながら丁寧に禮して立出ぬ。「まア甘く免れた、一
 両日の内には保田へ出立しよう」と路橋は獨言。「娘を探偵な
 るに探させるものか」と侯爵は雅言、折から侯爵の許へ平崎光
 子が入りましたとの取次、何事と急ぎ光子を請じ入れれば、光子の
 姿は先日如くならず、雨に惱める海棠とやらんいふ様にて、心
 に愛へを含める容子、其美しさも一層増せり、今しも光子がいと
 しどやかに會釋して椅子にかゝれるを見て、さしも蒙昧不敵の
 將軍と聞えし高山侯爵も、先づ其腹は半ば縮の如くなりぬ。光
 しつけに推參致しまして失禮で御座います侯、イヤ決して光
 日はわざくお越し下されまして、侯先日は失禮致しました光、
 實は其節のことで少々お話しに出たので御座います侯、イヤ
 どうも其節は失禮ばかり申し上げました光、あなたはまだ私と
 お疑ひ遊ばすかと思ふて居ますが、侯何の疑いなんぞ、光其節あな

たは私に禮一さんと結婚しないから、あの父の書肥と結婚する
 だらうと仰しやいました子、實に失禮なことを申しましたヨ
 光「私は決してそんな考へはないので、侯さうでせう、イヤあの
 侯と甚だ失禮を申しました、併し何の爲めに今左様なことを
 言ひなさるのです、光私の身を明らかにする爲めに、侯イヤ決し
 て私はあなたを疑ひません、光實は私の結婚しようと思ふ人は
 外にあるので御座います」と言ひながら、愛らしき眼にて侯爵
 とチラリと見たり、光子は尙も言葉を續けて、「それは兎も角も
 私があなたに申し上げることがあるので御座います、それはあ
 なたの御不幸なこと、して其原因は皆私にあるので御座いま
 す、併し私と最初から企てましたことではありませんが、偶然さう
 なつたのです、侯明らかなに話ささい光、そんなら思ひ切て申
 しませう、實は私の父の書肥勝澤と申すものが私と結婚すること

とを熱心に望んで居るので、それで私と結婚するに妨げなるものは悉く取除ようと考へて居るので、ところが禮一さんも私と結婚しようといふのですから、それで勝澤は禮一さんを殺すことを企てました。侯爵は殺しはしまし、光「イエ、もう決闘して禮一さんはひどく怪我をなすつたのです」斯く言ひて光子と侯爵の面を打守れり、侯爵は今こそ出入を止められ、本々幼少より世話したる甥の事、自然の至情は禁じ難く、顔色變じて驚きたり、されど故らに落付拂ひ「それは可愛さうなことをしました、併し皆われが悪いのですから仕方がありませぬ、光其勝澤といふ男は實に鐵面皮な男で、禮一さんに傷を負した後私のところへ手紙をよこしました、が其中に書てあることによれば禮一さんは私と結婚する氣は無つたので、他の人と結婚しようとして居たのださうです、全く私を欺して居たのださうです、其證據

には決闘の前に其婦人のところへ手紙を送り、又其婦人は貴族であるのに家を逃出して禮一さんの居るところへ往つたさうです」侯爵は怒れり「悪い禮一め、秋子をそゝのかして、實に此家に不名譽を興へたナ、して今何處に居ます、光それは存じません、勿論私は勝澤の言ふことを皆は信ぜませぬ、併し昨夜演劇で新聞社員の話しに秋子さんが家出をなすつたといふことを承りまして、愈々本當だと思つて話に參上致したので、侯、もう新聞社へも聞えましたか、愈々承知が出来ませぬ、實に不埒な奴だ、侯爵高山の名にかゝります、二人のものは門口へも寄せつけませぬ、光「それではお二人がお可愛さうではありませぬか、實は手紙を以て申し上げようとは存じました、が、大事なことと思ひましたから、鉄面皮にも參上致しました、ア、もう私は誰れも助けに呉る人はありませぬ、眞實慕ふて呉れるものは勝

澤のやうな悪者で、候、イヤあなたは中々見上げた人だ、貴族にも珍らしい方だ、二人の代りにこれからと私が世話をして上げませう、光、それと本當ですか」どニツコリ笑みし、唇のうちは大の男もはめらるべし、候、爵はジツと光子の顔をながめ居りぬ、やがて光子が暇を告げて立去らんとするどき、候、一寸伺ひますか、勝澤といふ男は巴里に歸りませうか、光ハア歸ります、併し直ぐ暇を出す積りなのです」と言捨て、立去りぬ、光子の心のうちには、斯く候、爵をたらし置かば、邪魔になる秋子は、繼ひ病氣で死なすとも所詮家へ入れる氣遣ひなかるべく、そして勝澤こそ是非候、爵が殺して仕舞ふべし、其處で首尾よく候、爵の家へ乗込む、さうだ、さうだと、獨り黙頭しが、併し勝澤が巴里へ歸つて來ると、何處やらの庭で會ふ積りだから、鍵を投げ込むとか言つてよこしたが、どうもうるさい、早く候、爵が勝澤を殺して呉れば好い。

第十四回

保田の城へ行く道にて、勝澤と決闘し、重き傷を負ひたる高山禮一と、介添人に頼みし人の厚き世話を受けて、其人の惡意なる醫師の治療に辛くも玉の緒取り留めて、今は日増に快方に赴きぬ、されど寂しき山家の夜に、只一人、重き枕に力なく寢返り、打て、家の主人や醫者の親切なるに感じて、思はず涙催ふすと同時に、彼の光子の憎々しさ、まぎくしくわれを慕ふふり見せて、イヤ夫ればかりでなく、既に心の下紐解て是非に夫婦どの約束かためし中なるに、それでわれを殺さんとするは、儲はわの勝澤の計策であの手紙は、偽筆なりしか、イヤくさうでない、さうでない、たしかに光子の手跡なりし、そして迷ひし昔しの光子の顔を、迷之ぬ今で考ふれば、實に怪しきことは種々ありき、弟の廣政が魔物だと言ひしは、正しく彼れが素性を知り居たるなるべし、ア、あん

く明けなにか、エナニ、病氣になつて居る紳士を尋ねに来たのだ
 といふことだ、主人は漸く戸を明けて、其尋ねなざる紳士の
 名は何と言ひます、高高山一といふ方です、といふ譯は正し
 く英國人の調子なり、わの譯は正しく保母民子、倍は秋子が来た
 のか、病氣重しと聞きしに、どうして此處へと一紙に驚きぬ
 主誰れに聞いて此處へ来ましたか、主は此英國婦人の手紙に此處に居
 ると書てありましたから、主人は此英國婦人のいやにすまし
 た言葉付きを癪にさへ、始めよりいと荒々しく物言ひ居りしが、
 此時車のうちより愛らしき聲にて、「私は高山侯爵の娘で秋子
 と言ひますが、禮一といふ人は居りませんか、此處に居るといふ
 手紙でした、して決闘をして死ぬと書てありましたが、どうなり
 ました、早く返事をして下さい」と終りは早泣きなり、主禮一さ
 んとひとい怪我でしたが、命は助かりました、秋生きて、何處に

な怖ろしい女に欺されて、伯父には怒られ、命は危ふくし、そして
 可愛や真心よりわれを慕ふ秋子に幾分の苦勞をさせて、オ、さ
 うだ、此間やつた手紙は届いたか知らん、秋子の病氣はどうであ
 らう、アラ眼の前にちらつく姿、たしかに秋子、倍はこがれ死せ
 しか、不便のものやと悶りし身体、神経鋭く、種々のまぼろしを
 眼に見つゝ、愈々死んで居るとせば、無益なことだが、兎に角わが
 本復の容子を手紙にて秋子に知らせ遣らんと主人に紙筆を乞
 へば、やがて主人は紙筆を持来りぬ、折から門の戸はげしく叩く
 ものあり、主人は急ぎ戸口へ出て、「誰れた、何者、静かにしろ男
 馬車屋だヨ、オ、馬車屋か、今時分何の用だ、此處は旅宿屋では
 ないぞ、男ナニ今日巴里から此處まで女のお客を乗せて来たの
 だ、主何だと女の客だ、」禮一と女と聞きて驚けり、ハテ何者と思
 ふうち、主其女の客がどうするのだ、男そんなことは知らない、早

は顔色を變へたり、お父さんは私の手紙を上げたのを御存じ
 ですか、秋、イエ父は知りません、留主でしたから、私はお手紙
 を見ると直ぐ来たのです、あの民子に勧められて、誰れにも言
 はずに秋、ハイ只父に手紙を書き置て二三日留主にすることを
 断りました、私にも何もかくさない積りです、併しお父さん
 は二人の結婚をお許しになりませうか、秋、度許すと思ひます、
 父は怒り安いのです、が、又親切ですから、熱心に頼めば必ず聞て
 呉れると思ひます、親、私に到底六ヶしいと思つて居ります、秋、そ
 んなに失望することはありませぬ、あの後には些ともあなたの
 ことを申しませぬ、それが父も心には許して居る證據です、して
 父は私をだまして、あなたが他の婦人と結婚しようと思ふて御
 座るなんて言ひました、是れぞ禮一が過去の事を悉く白状す
 る時なりける、禮一は思ひ切て、「ア、許して下さり、前のことは

「私」が注意して子の様にしてお世話をして上りましたから、段々
 よくなりました、さア早くお道入りなさい、定めし禮一さんが喜
 びませう」と聞て、秋子は轉ぶが如くに馬車より下りて、主人の
 導くまゝ、禮一の病室へ出来れり、實に命危ふきまでに煩らしいし
 と見えて、美しかりし花の顔も青味を帯びて、勞いなし、秋子はさ
 すがに恥しく、禮一の側に寄添い、無言なり、禮一もつく／＼秋子
 の顔を見守り、種々の感情に胸をうたれて、しばしは何も得言は
 ざりしが、禮一は先づ口を開き、「あなたが来て下さつた、實に
 嬉しう御座ります、併しあの手紙を上げたのを今更後悔して居ま
 す、秋、それでは私のことを思つたのを悔て御座るのですか」と
 怨ずるやうに言葉を出せり、秋、イエ決してそんなことでは御座
 りませぬ、只私が手紙を上げたばかりにあなたがお父様に断ら
 ずにね、出なざるやうになつたのを悔たのです、父と聞て秋子

皆私が悪かつたのです、今日は皆白状して仕舞ます」と始めて
おのれが光子に居り、光子に救されたこと語り出れば、夫れ
で之矢張り本當なりしか、と秋子の驚き大方ならず、今しも此處
へ出て来て仕たり顔なる保母民子も呆れてしばし無言なりし
こそ可笑しけれ。

第十五回

高山廣政と芝居にて圖らず英子に出會ひ、其節路橋が聞き居る
とも氣付かず保田の方へ一緒に逃よと勧めしも、英子はまた比
留間に操を立て、之れを斷り、此後十日間會ぬやうにして呉れ
と言ひぬ、廣政は其十日間のうちに英子が心を變じてわれに傾
くかと思へば、今日や色好き返事が来る、明日や好き音信がある
と、心も心ならず何れも手につかず只うろくなし居りしが、或る
日見も知らぬ男が書状を持來り何とも言はず立去れり、ハテ何

處からか、てつき英子の手紙と取る手も返しと披き見れば、斯
はいかにしかつめらしき男の手跡、平生師と頼みし森教授より
の書翰なり、森教授といふはなかくの學者にて、自由の主義を
尚び現に珊瑚黨一部の長をなし居る人なり、エ、何のことだ、愛
らしき英子の艶書と思ひの外、偏屈臭い老爺の手紙が舞い込ん
だ、あの老爺何を言ふて來たか、とよく見れば、

拜啓小生先日來他出致し候、只今何處に居るやは申上げず候
得とも、小生の他出は貴兄の御家族に關係之れあり候間一寸
申上候、貴兄の兄禮一君保田の古城へ出立せらるゝ由我黨の
探知するところと相成候、然るに禮一君若し同地へ行かれな
ば、必ず笠間夫入の事、財産の事發覺致す次第となり、斯くて
實に由々しき次第と相成候間、本部は早速人を派遣し禮一君
の行を妨ぐることに決し、一人の黨員を撰び其任に當らしめ

候、此男既に禮一君と決闘し激しく負傷せしめ候、併し禮一君の
 一命には拘らず候由、斯くの如き事申上候ては御立腹の程
 ね察し申候得とも是又我黨の爲め止を得ざる儀に候條、悪か
 らず思し召れ度候、只遺憾なることは此任を帶て行さし人の
 怪しきことに候、此人は或ひは我黨の習切なすものにあらず
 やと疑ひ居候、そは兎も角彼財寶を古城に置くことは頗る危
 険に相成候故、再び之れを船に移すことに決し小生之れを移
 すの任を帶び當地へ出發致し候、其道すがらの事少しくお知
 らせ申すべく候、去る火曜日馬車にて巴里を出で候ところ同
 行者他に二人これ有り候、一人は他より少々老年のやうに見
 受候得とも、二人共に怪し氣に見受られ候、小生は極めて注意
 致し二人の容子を見候に、二人とも全く姿を變へ居候事、發見
 致し候、即ち老年の男は政府の爲めに秘密の仕事をなし居る

この嫌疑ある平崎といふものにて、今一人は若き男の探偵の
 路橋と申し、先年藤田大佐を捕縛したるものに候、偕て何故に
 此兩人が小生と共に参り候哉、或は小生を跟け候爲にや餘程
 注意致すべき事と存候、小生の務も此兩人の學動を見たる後
 ならでは取掛り難く候、尙然くべきは貴兄の従妹高山侯爵の
 令嬢秋子とのが當地にありて路橋の泊れる宿屋へ宿泊致し
 居られ候事、御座候、嬢は禮一君の助を逐ひ來られしにや恐
 らく兩人は保田の方へ行るべし、偕て禮一君と決闘致したる
 ものは勝澤と申す平崎の書記に御座候、
 廣政は讀んで此に至り、かのれ勝澤どうぐやつたか、糞ウ生し
 置くものか、と大に怒り、尙ほ其氣を讀めば、
 勝澤は多分最早巴里へ歸り候事と存候、其處で貴兄に是非願
 ふことは、即ち貴兄が直ぐ保田の方へ御出發なされ御舎兄禮

一君、令嬢秋子どのをお止め下さることに候、貴兄尙ほ我主義の爲め御盡力なされ候お心ならば、至急保田へ御出立願上候。小生は警察の探偵を止め、此兄は両君をお止め下され度候、尙保田にてゆるく、拜面商賈を盡すべく候草々、ナニ直ぐ出立しろと、それはいかん、それはいかん、英子のこともあるに、イヤまだ兄の警計をしなければならん、勝澤に豫言して置た手前もわる、先づ勝澤を殺すことが第一だ、それから英子のことだ、穴藏の財寶なんて、そんなことはどうでも善い。

第十六回

こゝに笠間夫人は保田の古城を守る任を受け、既に三ヶ月にもなりしが、特て廣政へ送りし手紙の返事も来ず、本部よりも何の通知もなく、危険は日々迫り来れば、さながら針の筵に坐するが如く安き心とははなし、城に之廣政が腹心の男にて舊舟乗を業

とせしものど今一人の男とを番人につけ置き、夫人は少し隔ちたる屋敷に住る居れり、今日しも日暮方夫人は心配に堪へず、城に來つてあちらこちら眺め居りしが、驢馬の脊に荷をつけたる旅人体のもの出來れり、ハテ何者ぞと笠間夫人は急ぎ門のどころへ出れば、旅の男突然失禮ですが、あなたは此處の御主人ですか、夫人は伴とどほけて、「イエ私には番人の従妹で御座いますか、あなた方は何の御用です男、私は古物學會の會長ですが、此處の城の餘程古いことを聞きましたから、拜見に出ました筈、ハア城を御覧なされたいのですか、男左様實は委しく研究したいのです、少しも餘さないやうに見て参りたいので、此通り奴僕共をつれ、此城の側へ天幕を張り日々研究致したいのです」笠間夫人は正しく古物學者ならんと思へど、永く留らんといふには少し、當惑したり、實に夫人は此旅人を眞の古物學者と思ひしなり、

承 認 せ り 路 橋 は 此 處 へ 來 る 前 既 に 尾 盤 の 港 に て 船 を 雇 ひ 入 れ、
 此 處 の 海 岸 へ 送 る や う 命 じ 置 さ たり、今 夜 は 必 ら ず 此 處 へ 來 る
 べ し と 思 へ ば、こ れ に 財 寶 を 積 み 載 せ て 去 る 考 へ な り、夫 人 は 斯
 く と も 知 ら ず や が て 路 橋 を 案 内 せ ん と 先 づ 城 の 第 一 階 の 室 へ
 行 ん ど せ し が、路 橋 は 「ど う か 地 下 の 室 へ 御 案 内 を 願 ひ たい
 の だ け だ」と 夫 人 は ハ ッ と 思 ひ し も 少 し も 騒 が ず 「地 下 の 室 へ
 何 も 見 る も の が あ り ま せ ん が 路、イ エ 普 通 の 人 に と 詰 ら ん も の
 で も 古 物 學 に は ま た 大 事 な こ と も あ り ま す か ら」今 は 詮 方 な
 し 薄 氣 味 悪 く 案 内 し たり、路 橋 と わ たり 見 廻 し 「な か く 好 い
 室 だ、此 處 の 建 築 法 が 即 ち 古 代 希 臘 の 風 で、そ し て こ れ が 羅 馬 の
 形 を 取 っ た の で 御 座 り ま す」な ど 出 たら め に ゴ マ か し な が ら、歩
 み 居 る 地 面 に 注 意 し て 見 し に、果 し て 新 し き 土 其 處 に ち ら ば
 り 近 頃 穴 を 掘 り たる 痕 跡 明 ら か な り、好 し く こ れ だ、此 下 に 必

此 男 が 三 ヶ 月 前 夫 人 の 家 へ 來 り し 探 偵 路 橋 な り と は 夢 に だ せ
 知 ら ざ り き 筈 ハ ア 此 邊 は 地 面 が 悪 う 御 座 い ま す か ら、天 幕 だ
 身 体 の 爲 め に 悪 い で せ う、そ れ に 今 夜 は 雨 が 降 り さ う で す か ら
 路「イ エ ナニ 學 問 の 爲 め に こ い か な る こ と も 恐 れ ま せ ン」と 言
 ひ 乘 て あ ち ら へ 行 き、同 行 者 に 向 つ て 「例 の 婦 人 に 違 い な い 大
 丈 夫 だ ぞ」と 告 げ ぬ、此 間 に 笠 間 夫 人 は 大 膽 な る 決 心 を な し た
 り、即 ち 此 旅 人 を お の が 屋 敷 に 止 宿 せ し め、夜 に 入 り て 妄 りに 城
 内 へ 入 る こ と を 禁 せ ん と 思 ひ し な り、斯 く て 婦 人 は 路 橋 に 向 い
 笠 折 角 御 研 究 に お 出 な っ た お 方 に お 宿 も れ 貸 し 申 さ な か っ
 た と 申 し て、主 人 の 高 山 に も 申 譯 が 御 座 り ま せ ン か ら、是 非 屋
 敷 の 方 で お 泊 り を 願 ひ ま す、伯 爵 の 宅 も あ り ま す か ら 路、そ れ は
 有 難 う 御 座 い ま す、併 し 今 日 日 の 暮 れ ぬ う ち に 一 通 り 城 を 拜 見
 し たい も の で す が 筈、宜 し う 御 座 い ま す と も」と 夫 人 は 大 膽 に

つさりあるのだナ、此鹽梅では大抵二三尺も堀れば好らうなど
 考へ居るを、夫人に「もう御覧なりましたか」と催促され、怪
 しまれては破れの本と早々此處を立出て、これより二階の室へ
 登り行けば、二人の番人が空を眺めて「どうも悪い空だ、屹度暴
 風だナ」といふに、路橋は大ひに驚きたり、おのが廻し置きたる
 船が甘くつけば善いがと案じつゝ、先づ丁寧に挨拶して「今の
 お話しでは暴風でもあるやうに仰しやるが、海はどうでせう番人」
 私ハ船乗をして居たものですから、海の容子は分りますが、もう
 一時間許りすれば屹度暴風になりませう、して夜中頃は大變ひ
 どくなりませう」路橋は甚だ心配せり「尾鹽邊から出た船は
 どうでせう番人やうサ、早くつけば宜しいが、さもいと随分危
 険です」路橋は眼を放つて海を見渡しても、わが船らしきもの
 は見えず、斯くては今夜は、だめだ、一日延さねばならぬかと思ひ

つゝ好き程にして下へ降りたり、番人はそつと夫人を引
 とうも怪しう御座います、何だか限つきが氣に喰ひませんか
 ら」と注意すれば、夫人は點頭て去り行きたり、斯くて路橋は夫
 人に導かれ客間へ通りしが、いかにもして古物學者らしく見せ
 んものど色々の話し仕掛るに、夫人は大いに困り居しとき、表の
 戸をドン／＼叩くものあり、何者と客間より見れば、荷物を背負
 ひし旅商人なり、ランプの火影明らか、商人の面を照し、いかに
 假装しても路橋の眼には正しく平崎なることを知り、途中で
 たしかに平崎を見掛けしが、倍は此奴も財寶を奪ひに来たので
 ありしか、ハテえらいことになつたがどうしたものか知らんと
 路橋思案に首を捻りぬ。

第十七回

平崎は馬車を多く雇ひて此處へ出来たり、折から雨風烈しく身

体びしよ濡れになつて、辛くも笠間夫人の家へ着きしが、夫人は
 其旅商人の姿なるを見て、若しや先日書き送りし如く珊瑚の
 總理より遣はされたる人にあらざるやと密かに思へば、早速路橋
 が居る室へ請じ入れたり、平崎は彼黒閣部屋にて見たる書状に
 より、會言葉まで知り、且つ其書面の趣より、段々調べあげ、廣尾と
 いふ名前前は即ち廣政にて、書面を出せし婦人は伊太利の笠間夫
 人といふものなること細かに探り得しかば、今は大丈夫、財貨は
 わが物を握つたやうに思い居りしに、斯はいかに途中で見掛け
 し路橋は早く既に此に在り、されど互に知るまじ知るまじと思
 へば互に何も言はず、平崎は作り辭して「奥様大分色々の小間
 物を持って参りましたが、何か求めが願ひたいもので」夫人は
 愈々わが黨の人と思へば「何か求めませう平止針などはいい
 いで御座います、笠赤いのがありませんか、平赤いのは別段に好い

品が御座います」路橋はいかなる意味か解し得ず、併し何だか
 訝しい、奴何んでも甘く企てたに違いない、併しかれが居る限り
 には甘くは遣らさないぞと横目で睨みぬ、夫人は「夫れではこ
 ちらで見せせう」と平崎の小間物屋をつれて離れ坐敷へ行け
 り、平崎はすかさず「早くお氣がついて結構でした、何分あんな
 男が側に居るものですから笠ハアさうですヨ、あの夫れでえあ
 なたは廣政さんからです子平さうです、高山廣政君からです筈
 わなたのお名前は平森と言ひます笠オ、それぢやア廣政さんの
 先生で、革命主義に御賛成の方とか、お名は疾くより承つて居
 ります平、それで私が参つたのは實に大任を帯てのことです、全
 体あなたに對し廣政君より返事を出さなかつたのは、實は近來
 政府が人民の手續を厚くすることがあるといふので、夫れを恐れ
 からです、併し本部ではあの御書面に依つて、逆も乗置くことの出

来ないことを知り、あの財寶は一旦他へ移すことにきめ、私が其任を帯て来たので、其處で門前には馬車が五臺用意してあり、ます笠さうです。か夫れで實に安心します。今も何んだか怪しい古物學者が来て居りますので、平さうです。實に劍呑です。あの男、正しく探偵です。古物學者で、ありませぬ。私よく知て居ります。ます笠エツ探偵ですか、どうしませう困りました。子平ナニ宜しい、これから直ぐ掛つて財寶を取り出しますから、其處で其財寶は桶に入れてあります。か笠さうです。十二の桶に入れて埋めて御座います。價、三千萬圓位のもので、平イヤそれなら二臺の車で大丈夫でせう。笠、それで警察の方、どうです。平、荷物を運送する許の札を持って居るので、確かです。笠、それぢやア私はあの探偵の方へ往つて居ますから、あなたは此處に居て下さい。オ、其處で私の身の上はどうなるのです。總理の考へはどうで

した。平崎は此間に甚だ困却せり、されど直ちに「私の来るのは何分急ぎましたから、其處までの相談はしませんでした。が、何れあそこから廣政君が来てきめる筈です。笠、アさうですか。廣政さんがお出になるのですか。嬉しいこと。」平崎はおのが化の皮のわらはれないうちに、と夫人を急がし、「それぢやア其桶のあるところへ御案内を願ひませう、そして誰れか手傳つて戴いて、笠、ハア宜しい、併し私のあの極く好きな婦人は今何處に居ます」と問ひ掛けたり、平崎は此答へに窮し、いかにせんとためらう。ち、外面に何やら足音するに、「イヤ探偵ではないかど。」驚けば、夫人も大いに驚き、急に話しを止め、「それでは今に」と言葉残して、出行きぬ。夫人は早速番人に其容子を告て、森の手傳するやう命じたり、路橋は先きより平崎と夫人との對話を立聴なし。居りしが既に夫人の去らんとするに驚き、そつと客間へ歸り、

すが「路桶はジツとして裸へたり平さうく、それで善いワ、番それでは私共は先さへ往って桶を堀出して置きますから、おなたはあとから来て運ぶやうにして下さい、して夫人ももうおなたにお目に掛ることも出来ますまいが、どうか夫人も巴里の方へ歸りたいと言つて居たと本部の方へ言付をしてやつて下さい、不委細承知です番、それぢやア、鍵を渡し申しませう、これで戸を明けて、そして提灯はありますか、道と分つて居ますか、平、宜しい有難う番人の去り行くおと見送り、路桶は不意に「平崎君、今晩は」平崎は實に驚きたり、アツと叫んで後へ倒れんとするを路「そんなに驚くことはないサ、僕だヨ、平、だ、誰れだ、路桶サ、今まで知らなかつたのか」平崎は漸く心を鎮め「君か、ナニも馬車のうちから知つて居たが、どうも不意で驚いた、路桶、斯くなつては仕方がない、願ふヨ、平、何を路桶大金の山分を、とぼけてはいか

備てく平崎といふ奴は怖ろしい奴だ、實に甘くたました、所詮これではおれの方が負けだ、もう此上はあはに平崎に會ふて財資の山分するより外に策なしと思ひ定めぬ、斯くて路桶は夫人に乞ふて早く廢室に入り、時分よしと豫て見定め置きたる平崎の離れ屋へ忍び行く、斯くとも知らぬ平崎と今や城の番人と財資を運び出す手筈を話し居れり、路桶と小陰に身を潜めていかなることを話すやと耳側るに番、今あの探偵は寢室へ這入りました、が、奴どうも怪しいです、外へ大勢の男を待して出て、そして馬車まで用意して居る容子です、平、ハ、ア、ぢやア、其奴此財資を盗み出しに來たのでせう、併し外の男はどうしました、番、何處か宿屋へ往つたさうです、平、宿屋、どうも怪しナ、其奴等が歸つて來ねば宜しいが、番若し歸つて來りやア、もう仕方がありません、遣つて仕舞ませう、全体あの探偵を先きに遣つてけべきで

んヨ、もう皆聞て仕舞た、して僕も實は其爲めに此處へ來たのだ
 平君も此事を知居たのか、路さうサ、だから山分を願ふといふ
 んだ、ナニ出來ない、出來なきやア宜しい、僕も政府に訴へるばか
 りだ」平崎と此言葉に頭を垂れて返答なし、路それ此事は君
 一人でも出來ない、君は馬車を用意して來たといふ話したが、何
 處まで馬車で、ゴマかして送れるものか、だから僕は船を用意し
 て置た、それで直ぐに英國の方へ持て行けば誰れにも分る筈
 ない、さアどうだ、これでもいやか」平崎はせり詰められて仕方
 なく「夫れぢやアさうするとして、これからどうするのだ、路君
 は今番人を相談したやうに仕給へ、して君の持てる鍵で戸を明
 け僕を出して呉れ給へ、僕は外で用意して待居るから、平宜し
 いさうしよう」としぶくながら平崎は承知せり、斯くて路橋
 は仲間のかくれ居るところへ行き、用意をなして平崎の來るを

待居りしが、やがて馬車の音聞え、平崎の一群は來れり、路橋と道
 の中央へ出で、「甘く往つたナ、平、此處に居たか、實に重いヨ、非
 常なものだ、三千万圓位と言つたが、どうしてこれでは五千万圓
 の價もあるだらうヨ、路、さアこれから船だが、大分暴風も止んで
 夜明にも近くなつたから、必ず船が來るだらう、こう向ふへ見え
 たぞ」と路橋はハンケチを棒の先きにつけ、頼りに振り合圖
 をすれば、船からも同じく合圖をなしぬ、平君何だか馬の走る音
 がするぢやアないか、路、ナニ涙の音だ、平、さうか、何にしる早く船
 が來れば善い、路、さア大分船が近寄て來た、先づ初の車から海中
 へ引き出すべしだ、どうせ着物は濡れるが、夫れ位は五千萬圓の
 顔で悲へるサ、平、僕は泳ぎを知らんが、路、危険と思ふなら車の上
 へ乗り給へ、平君、どうも馬の足音だぞ、路、君は神経質だから、飛ん
 だことを氣にするのだ」平崎は車の輪を足踏にして上へ登り

ぬ、斯くて車は段々水深く進み行き、船は成るべく陸へ近く寄り、
今や殆んど船車相接するやうになりしかど、いかにせん浪あら
くして船止まらず、兎角するうち平崎は叫び出しぬ、「ヤア失敗
た、見つかつた、もういかん、踏ナニ見つかつた」と路橋仰天して
後を見れば、七八人の男馬に乗りて駆け来るなり、踏ム、城の番
人どももか、ナニ遣付るんだ」と獨り勇氣を奮ふて仲間のものに
下知を傳へ、出来れば戦はんぞ待構へしが、無残や船は此失鉛を
見て急に沖の方へ逃出し、平崎は浪の中に漂ふて進退維れ谷ま
りていかい、はせんと叫ぶ、既に敵は前へ来れり、真先に進みし
大將は森教授なり、一刻城に着することのおくれたるが爲め此
失敗に會ひ、大いに怒りて今しも番人等と此處へ逐ひ来しなり、
早や打出すピストルに路橋は胸板打抜れ二言といはず斃るゝ
に、平崎は思はずアツと叫びしどたん、おのが乗りたる馬車もわ

どの馬車も逆巻く浪を一かぶり、五千萬圓の財寶と共に海の底
へと沈み失せぬ、あとに残るは逃げ行きし船の影と森教授が無
念がる顔のみなりき。

第十八回

平崎の光子は父が保田へ行く途中より出したる手紙見て、其仕
事の甘く成就せんことを心に祈り居り、勝澤のことは片心に掛
れど、兎に角われは其圖るところをやつて見んと、即ち父より書
面の來りし夜使を遣はして高山侯爵を招きぬ、斯くて室の容子
を寂し氣よなし、自分黒の禮服をつけ、さながら葬式の日の如
き有様にこしらへて、侯爵の來るを今や遅しと待居たり、愁へを
合む美人は露を帯びたる花の如く、反つて情け深く美しきもの
なれば、光子が今宵の姿こそ、實に男をたらずに、偏強の手段なれ、
やがて案内につれて入り來りしものは高山侯爵なり、侯爵は柔

の明は實に不埒なやつです、娘ももう娘とは思ひませぬ、もう私
 は甥も娘もありませぬ、私も此世界に一人で居るので、光、エ
 平民で人に知れないもの、うちにあなたをお慕ひ申して居
 るものが御座います、決して一人では御座いません、と俯向
 きてかすかに言ふ、侯爵と少し前へ出て「ではナニあなたは私
 をお慕ひなさるか」光子は併と紫知らぬ顔して「どう致しま
 して私のやうな平民の娘が貴族の方を慕ふことが出来ませう
 か」侯爵はうツとりと光子の顔をながめぬ、さながら若き男の
 初恋を知りし如くなり、光侯爵詰らぬ話しを致しまして、初
 ひ申すことを忘れませんでした、實は今宵御光來を願つたのは、何
 す早くこれ話しなさい、光、實は私を尼寺へ入れて下さる御世話が
 願いたいのです、侯、エツ、尼寺へ光、ハイもうつく、浮世がいや
 になりました、侯、それは何故です、一体どうした譯です、大事なく

かに會釋して「先刻は御書面を有難う存じます、光、わさく、の
 お出で痛み入ります、實は父の居りませぬうち願ひたいことが
 御座りまして、侯、ハ、アお父様はか留主で、ハ、ア何處へ往つたか
 知らぬと、どうもあなたの方を一人置いてとは酷い光、
 ハイ、私は小供のうちから一人で居たことは度々です、もう私は
 此家に一人で居りますのみならず、此世界に一人で居るのです、
 私を助けて下さる人は一人も御座いませんから、侯、併し必ず一
 人位のお友達はありませうから、御安心なさい、光、其お言葉は骨
 身に答へて嬉しう御座います、と言ひつゝ、涙ぐめば、侯爵と驚
 きて「オヤあなたは何が哀しうて、光、ハイ、思ひ出すと哀しうな
 ります、たま／＼私を愛して下さる方があるかと思へば、それ
 偽りでありませぬ上に、一體一のやうに私、ゆゑに怪我をなさるお
 方もあり、私は何としたら好いやら、つく／＼考へますると、侯、私

で候エ、路橋の探偵の光左様で御座います、父その男を好
 い男と思ふて居ますから、ハイどうも斯んな話になりまして是
 非なく尼寺へでも這入うと考へます候、そんな話らんことはね
 止しなさい、私が始終世話をしませう、それはいやですか、光と
 う致して併しあなた御身分と較べたら、決して御世話になれ
 る筈では御座いません、候身分、そんなことが何構ふものですか、
 と言ひ放ちたり、光子は尙も知らして「イエどう致しまして、佛
 國にかくれもない貴族と名も知れぬ平崎とは逆も一緒にする
 ことは出来ません、世間の口の齒にかゝるのが怖ろしく御座い
 ます候、世間世間がナニ構ふもので、あなたは世を棄ると仰しや
 るが、私はまだ候爵夫人となるものを求めて居るのです、私には
 もう一人の身内もないのですから、もう娘も御座いません、光は
 んに娘様は許して上げ遊ばせ候、逆も許せません、どうあつて

ばお話しなさい、光有難う御座います、言葉に甘へまして一通
 りに話し申しませう、私は實に斯んなことをして一生を送るの
 がいやで御座います、一寸考へますと相當な人と結婚すれば樂
 しく一生を送れるやうで御座います、が實を申せば私の母は伊
 太利の貴族であつたので御座います、が國亂の爲めに財産を失
 ひ、此國に参りまして今の父と結婚を致し、出来た子は私で御座
 ります、母の身分もありません、是れが先づ第一尼寺へ入りたいと
 なく氣が進みませんのです、是れが先づ第一尼寺へ入りたいと
 いふ望で御座います」と淀みなく言ひ去りて、候爵の容子を伺
 ひ尙も語をつぎ「その上此尼寺へ入ることと父の留守中に致
 したいのです、誠に申し憎いことで御座います、が父は私を結婚
 させたがつて居るので御座います、併し私と其人が大嫌いな
 で御座います、御存じかも知れませんが、其男は路橋といふもの

も、私は到底一人ものです。光も、う其お話しはお止し遊ばせ、
 怖ろしう御座います。侯何が怖ろしいのです。勝澤でも怖ろしい
 のですか。光「イエ、勝澤などは怖れませんが、あまり私が冥加過ぎて
 怖ろしう御座います。侯さうだ、あの勝澤があなたに送った手紙
 はどうしました。光「焼棄しました。わんな手紙がいつまで持て居
 られますものか。侯さうですか。私はわいつを殺す積りです。」光
 「子はしげく」と侯爵を見詰めて又もや俯向きて愁へに沈みぬ。侯
 もう哀しがるには及ばんでせう。私が何處までもお世話をする
 としたら」と侯爵の美しき光子の手を取り、今は花に狂へる蝶
 となつて、うつゝ他愛もなく、アハヤ侯爵は妖魔の陥罪に陥らん
 とするどき、不思議や窓ガラスを破りて、手紙を括りつけし鍵
 入りたり。光子はハツと驚きて、借は疎て言送りた通り勝澤が手
 紙を投入し、か、時々時々として悪いところへよこしたものと、其

取らんとするうち、早くも侯爵とこれを拾ひ上げたり。光子はど
 きまぎいかかとせんとためらひしが、尙ほ言葉巧みに「まア仕
 方のない男で御座います。これでもう二度目で御座います。」
 侯爵は光子を睨むやうにして「何が二度目です。光「イエ、下僕が
 私侍女の許へそれを送りましたのです。先日左様なことを
 致しまして。」光子は斯く言ひしもの、顔色青ざめて唇頰に居
 たり。侯爵それは變です。侍女があなたに居るものであり
 ませんに、光「イエ、大抵私の室へ来て居りますから、そして二人と
 も懲しめの爲め暇を出しませう。それには其手紙は其まゝ送り
 返すが上策でせう。」此言葉は明らかに侯爵に開封すべからず
 と命ずるに同じ。侯爵は黙して返事せず。ジツと光子の顔をなが
 め「私は此手紙を見たいのです。」今は光子も詮方なし。手紙
 を侯爵に讀しむるより外に術なし。責めてもの望みは勝澤が事

を暇味に認めしならんに在り、思ひ切て「どうかお讀み下さい」
 候。御は光子が餘り立派なる承諾に少し猶豫せしが、終に封を切
 りて讀み出たり、不幸にして明らか記しあり、
 小生事今朝巴里へ到着致し候、傷も殆んど癒え候、禮一氏は猶
 病床にありて全快までには餘程時日を要することと存候得
 とも一命には拘らず候、従妹なる高山令嬢も來られ候、病氣も
 最早全快の容子にて、只兩人の結婚を見ることと信じ候、
 これが侍女の手紙かと候、御は怒りぬ、光子は最早堪らず窓の方
 へ逃行んとするを候、御押止めて「まアお聞きなさい、聞くのは
 あなたの罰だ」と尙も讀み出せり、
 俗小生之御命令の件を全く都合よく行ひ、高山家破滅の事も
 殆んど成就致し候、
 候「何だ、禮一を殺すことをあなたが命じたのですか、此手紙の差

出人勝習に、さア白状なさい」光子は後へ退き、傲慢に「私と何
 も白状することはありません、一體あなたがそんな手紙を憚り
 もなく讀むのは失禮です」候、御と怒りを押へて讀み續けり、
 右の如く小生は既に命掛けの仕事を致し候、是からは貴嬢の
 前に出て、其愛を受る次第に御座候得ば、先便申上置候通り、只
 今鍵を投げ入れ候間、これを以て庭の戸をお明け下され度候
 小生は土堀を跳り越して中に待居候、此庭は山本町の通りに
 在りて、小生の外誰も入る能はざるところに候、
 候「山本町」と叫びつゝ古き記憶を思ひ返せり、
 但し山本町の通りのはすれに此庭の入口これあり、右には黒
 さ小さき家ありて庭は土堀にて圍まれ居候、斯るところへお
 越しを願ふは全く人目を忍ぶ爲めに候間、是非々々お越しの
 程待上候。

侯爵は山本町土堀黒い家と續けて叫び、總ての記憶を回復した
 り、探偵路橋が言ひしところ、禮一が怪しき男に會ひしところは
 此庭だ、勝澤が自分より外に入る能はずといふからには、また勝
 澤が高山家を破滅させるといふからには、芳雄を殺したものは
 全く勝澤だ、おのれ勝澤活して置てなるものか、侯「コレ光子さん
 お前も覺悟して置くが善い」猛然として立上る侯爵、僅かにさ
 らめく町の瓦斯燈を便りに、一散走りに山本町へ駆け行きたり。

第十九回

侯爵は怒りに任せ一散に山本町へ来て見るに果して高き土堀
 あり、此邊ならんと土堀の角を廻らんとする折しも、向ふより帽
 子目深に被りたる男來りて、出會頭に突當りぬ、侯爵はこれぞ勝
 澤ならんといさなり組つけば、彼方もこれに驚いて、負けず劣ら
 ず争ひしが、不圖瓦斯燈の光りに顔を見合し「オヤ伯父様」「ナ

ニ廣政か」と互に驚きつゝ、侯「お前はとうして此處に、廣伯父様
 はどうして此處に」侯爵は少しむツとして「お前は革命黨の
 ものだ、此處で遇うといふのだらう、廣それがどうしたのです」
 侯爵は愈々憎しと思へど、當の警を控へたることなれば、靜かに
 「お前此邊で一人の男を見掛なかつたか、廣此處の中に居るの
 です、私は其男の出るのを待て居るので、廣何か用があるのか
 廣「山王町から此處までおどを遡つて來たのです、兄を殺し掛
 た奴です、奴が殺す積りで候、エ、さうか、其奴は勝澤といふのだ
 らう、其奴が芳雄を殺した奴に違いない、廣「ナニ芳雄さん、どう
 いふ譯で」侯爵は子細を語れば、廣政も大いに驚き「それぢや
 ア尙のことです、是非殺してやりませう」侯爵は此際言葉に大
 いに喜び「それでこそ高山廣政だ」と手を差出せば、廣政も同
 じく手を出して握手の親しみに、ツイ今まで不和なりし伯父

こゝに全く親しき舊の親戚とはなりぬ。爲ぢやア廣政私は此處に鍵を持って居るから戸を明けて殺さうではないか。廣宜しい」と直ちに入口を開かんせしに、内より「光子さんか」と静かに言ふものあり、二人は雄なく戸を開きて庭に入れり。廣政は鐵砲を差上げ、「さア其處動くな」と呼び掛けた。光子が來りしならんと待擧へたる勝澤は此意外の光景に「ダ、誰れです。廣政私は禮一の弟廣政だ。君を殺しに來たのだ。爲私は芳雄の父だ。貴様を殺しに來たのだ。勝澤へん人を係蹄に落すやうなことをする。廣一や本當に決闘をするのだ。勝澤はこんな處で決闘が出来るものか。爲貴様は芳雄を殺したのは夜であつたらう。勝澤は芳雄そんな人は知らない。爲馬鹿を言へ、さア尋常に決闘せい。勝澤は暗い處でどうして決闘が出来るものか。廣政程暗し、廣政はあたりを見廻せしに、不思議なる記憶を尋ね出しぬ。今より三ヶ月前、珊瑚黨

の人々に吟味を受けしところは、向ふに見ゆる八重洲の古寺にて、此處は即ち打殺されんとせしところなり。此處と古寺は彼武官武藤の所有にして、武藤は何も知らずと珊瑚黨の人々に貸つけ居るなり。廣政は勝澤を隅の方へ導き、「君は忘れとしまい子勝、忘れるものか。禮一君を殺せば君は僕を殺すと言つたことを、併し僕も本部の命令で禮一君と決闘したのだから仕方がない。廣政を言へ、君はあの毒婦に頼まれてしたのだらうが、君が探偵同様のもの、娘と通同して居ることは本部が既に知て居る。だから今夜此處で君を殺すことになつて居るのだ。勝澤、廣政君は知るまいが、此處は我黨の本營で、大事なことでは此處で相談するのだ。さアどうだ。君は本部の手で溢り殺されるが善いか。僕等の手に死るが善いか。五分間に返答するが好い。」勝澤は此處のうちへ幾度か這入れり。第一は比留間の命令を受けて芳雄を殺し

たるるときなり、されど本營が此處に置れてあると、夢にだも知らざりき、今は免れぬところと思案して、「決闘をするサ、だが此暗いには困る、廣々の寺を見ろ、焼火がついたワ、あれは我黨の人だ、屹度決闘の世話をして呉れるヨ」侯爵は二人の問答いかに待兼ねて此方へ歩み來れり、廣も宜しい、愈々決闘させることにしました、して今夜あの寺院で秘密の黨派が集會をするので、此男は其集會で殺されるにきまつて居るので、是非とも其前に殺された方がよからうと、勸め、漸く承知しました」侯爵は秘密の黨派と聞きて、「ナニ秘密の黨派、お前も其一人なるか、廣さうです、私も其一人です、今の政府を顛覆しようと思つて居るものです、併し伯父様此事は秘密になすつて下さい、貴族といふ名に誓つて口外なさらぬやうに願ひます」侯爵は承知の旨を容子にて示せり、廣それでは此勝澤をつれて此堂へ這入

りませう、私と一緒になら心配はありませぬ、黨員だと言つて置きますから」侯爵が猶豫の体に廣を眺めし、おいやなら、私にお任せ下さい、私一人で處置をします、何れ明日芳雄さんの誓を打たか、又這入らう、是非芳雄の仇を打う」斯くて廣政が案内して、堂の内へ入れば、ツと出來りて、「誰れだ」と聲掛し、ものは皆て廣政を吟味したる部長なり、以來心安く交れる中、とて長ム、大分早い子、まだ集會には間があるヨ、廣イヤ其前に少し用がある、此二人の黨員と一緒に來たのだが、實は決闘をやるのサ、長それは大分やかましい話だ、子、劍でか、廣イヤ鉄砲だ、長さうか、此處は鉄砲の音も外には聞えないから、善いサ、ナニ直ぐやる、あの老人とか、廣イヤ少い方だ、死ぬまでやつて、若し僕が殺されたら、其次に老人がやるのだ、長ヤレ、それは大變な願ぎだ、今夜は二ツ

騒ぎがある譯だナ、二つと、其今夜裡切りをした、驚員を繼り
 殺すさうだ、藤田大佐から聞いた、ム、其奴は勝澤とかいふ書生だ、
 なんでも森部長からの手紙で、愈々油断が出来ないさうで、其
 男は捕つて居るのか、長さうだらうヨ、馬鹿な奴だ、君一寸見給へ
 其天非からふら下つて居る細で、繼り殺すのだぜ、勝澤は此言
 を聞きてギョツとしたり、侯爵は陰謀黨の勢力侮り難きに恐れ
 居たり、部長が去り行くを見て、廣、今君が聞いた通りだ、もう仕方が
 あるまい、勝、僕は怪我をしてまだ右の手をつかふことが出来な
 いから、左の手で鉄砲を打つことにしよう、君もさうして呉れ給
 へ、斯く難題を言ひ出して、決闘を断らんとせし、侯爵と廣政
 は之れに同意してなかく、許さうとはせず、廣二人が此堂の隅
 に立ち、両方が進み寄つて打つことにしよう、侯、互に五歩のこ
 ろまで近寄つて打出すが、好い、宜しい、廣、死ぬまで打合ふのだぞ、

銃丸がなくなつたら、込める間猶豫するのだぞ、侯、さア一時も早
 く、君の方では、侯爵が僕に餘程怨みがあるやうだから、先きに
 やるが好い、侯、オ、愈々芳雄を殺したと、白状するか、勝、いかに
 殺した、總理の比留間より命令を受けて、イヤ、實は金を貰つて殺
 した、がどうだ、侯、侯は、おのれ、卑劣な奴と怒り叫んで、早や廣政
 の鐵砲奪ひ打ち、掛らん有様に、廣政はこれを制し、彼の部長に介
 添を頼みたり、部長は二つの衣服を持來り、どちらかボタンの多
 くつきある方を取りたるものが、先きに決闘すること、にせんと
 言ひしかば、二人はこれを取、見しに、廣政の方は、四十二、侯爵の
 方は十九なり、依つて先づ廣政が立會ふことに決し、やがて廣政と
 上着を脱ぎ、部長が貸し呉れたる鉄砲の一を取、て立上れり、口に
 巻煙草をくゆらし、悠然として、勝澤の用意するを待、て居る有様
 勇しく、侯爵も斯る英傑を、疎みしことの愚かさ、と、今更われを、

かつた、死ぬまでやるのだ。後、世様は人を嘲弄するな、武器が破れ
 た以上は仕方がないでとないか」と言ひつゝ部長を見れば、部
 長はこれに同意せず。「僕は少い方の言ふ方を至當とする」勝
 澤は此言に力を得て。「さうだ、僕の方が正しからう、其代り今廣
 政君の銃で叩き殺されても仕方がないのだ、なか、あぶない
 ぞ」と言ひながら又もや狙ひを定めんとせり、廣政はさして慌
 てる容子もなく、矢張り巻煙草をくもらしつゝ、「では懲打を願
 ひます、ナニお止め下さるな、武器のないものに打出すのですか
 ら必ず丸は外れます」斯く言ひて今は全く運命を天に任し、勝
 澤の砲口に突立ちたり、勝澤は嚴しく狙ひを定めて打出さんと構
 へたり、侯爵は心も心ならずいかはせんと心配を居りぬ、廣
 政は不圖おのが銃の薬池の邊を見れば、其上には尙ほ充分の火
 薬残り居たり、勝澤はこれを見て「ハア君の銃はまだ約に立つ

居り、一歩でも退いてとならんぞ」「好し素よりだ」と侯爵と廣
 政は叫びぬ、やがて部長が「宜しい」との号令と共に同時に撃
 出す銃丸は白き煙を捲き、勝澤の丸は廣政の一尺程上なる壁に
 中り、廣政の丸は勝澤の横に飛びたり、第一の丸は共に外れたれ
 ば、再度の丸を込め、しばし静まり返りて睨み合ひたり、今や勝澤
 は狙ひを定めしに、廣政は巻煙草をくゆらしながら未だ狙ひを
 定めず、侯爵と部長は手に汗握りて勝負いかにとながめ居るに、
 勝澤の鉄砲先づ發して、いかにしけん、廣政はバタリと銃を取り
 落しぬ、丸は幸ひにも後の壁へそれたれど、斯はいかに、廣政の銃
 は彈條のあたり破損せり、廣政仕方なく「少し待給へ銃が破れ
 た」と平氣で居るに、侯爵は進み出で「では決闘を中止すべし」
 勝澤はすまして「武器が破れたとて中止するなどは、約束しな

ぞ、撃殺すぞ、ア、眼が見えぬ、エ、残念だ、ここ、九部長、高山侯爵、君をだました、裡切りが」とおどは何をも得言はずなりぬ、部長は「ナニ、裡切りが、何處に」と叫びしも最早勝澤は息絶え居たり、暗燈、碧血、實にすさまじき其處らの有様なり、斯るところへ大勢の黨員入り來れば、廣政ハツと氣がつきて、此奴はえらい失敗をやつた、我身は素より恐るゝところなけぬと、斯る秘密の堂へ伯父の侯爵をつれ來りしかど、思へば大膽の所業なりき、幸ひ侯爵を見知れる藤田大佐の顔はまだ見えぬ、此間に早く侯爵を外へ免し出さんと、先づ黨員のところへ歩み寄り「失禮ながら私

の怨みで勝澤を殺しました、既に死刑を與へました」斯く言ひつゝ、隙あらば侯爵を免さんと伺ひしも、生憎く侯爵を見知れる黨員ありて「ヤア、われくの敵なる高山侯爵が此處に居るぞ」と叫び出しぬ、部長はこれを見て「ム、勝澤が死際に初切と言

だらう、天からでも火が降つて其上に落れば僕を殺すことが出来るかも知れない」と嘲れば、廣政は嚴肅に「待て、今殺してやるから」と言ふや否や、勝澤の隙を伺ひ手早く口なる、巻煙草を取り薬池の上へ置き、一發は勝澤の右の腰骨を貫きたり、何かを以てたるや、轟然たる一發は勝澤の右の腰骨を貫きたり、何かを以てたまるべきアツと一聲、空を掴んで俯向け様に仆れぬ、部長は此体を見て靜かに「宜しい、決して規則には背かん」と言ひぬ、されど勝澤はまだ死せず、重傷を忍びて起き上らんとし「ナ、なる程殺した、併し僕はまだ君を撃つ極利がある」と言ひつゝ、側へ投げ出し、銃を取らんとし、狂ひて七領八領の苦しみに、口より血の泡を吹き、おたりは紅に染り目も當られぬ様なり、勝澤は辛くも手に銃を取り立ち上らうとし「コ、これ高山、撃つ

ッたのは此事だナ、そして此奴が愈々勝澤なら妄りに殺しては
 ならん奴だ、殺す前に吟味して白状さしねばならん奴だ」アハ
 ヤ、侯爵の身は危ふくなれり、眞王室の將軍高山侯爵は我黨の秘
 密を探りに來たのだ、早く縊りて仕舞ふが善い」侯爵は大いに
 怒りて「僕は君等を憎む、併し探偵するなどの卑劣なことはし
 ない」廣政は鬪撃の事情を述べて「併し斯く言つても尙ほ殺
 すなら先づ僕を殺すが善い、殺さるゝことは是非もないが、切
 など、は失敬な話した、特に高山侯爵は斯んなことを人に洩す
 やうな見下げ果てた人間ではない、それは僕が死を以て館合ふ
 廣政が大聲を發して辯護する聲聞付て藤田大佐は出來れり、
 侯は今委しく聞て居ました、高山侯爵は僕が數年前捕へられた
 と、きに助け呉れた方です、侯爵は決して人の秘密を發くやう
 な卑劣な人ではありませぬ」と言ひて、いと丁寧に禮し「さア

第二十回

侯爵お出なされ、さア廣政君も」と二人をつれて出で行けり、大
 佐の珊瑚黨に於ける勢力は實に非常なるものなり、廣政は大佐
 に謝せんとせしが、大佐は押止め「お禮には及びませぬ、侯爵が
 密告するやうな人でなきことは知て居ます」と言ひながら、容
 易く二人を助け出しぬ、侯爵は廣政と大佐が爲せしところを深
 く感じ、戸を出るや廣政の手を取り「ア、私は今まで子がなか
 つたが、今一人得た」と涙ながらに言へば、廣政は「イエ、伯父様
 は二人の子を得ましたらう、兄の禮一も屹度お許しになつたで
 せう。

巴里の町外れに往來を離れていと閑靜なる家あり、六月の夕方
 のこと氣候もやゝ暑くなり始めたる時なれば、白の衣裳を裾重
 げにまといし婦人窓に寄り掛りて物思はしげなり、是れなん彼

思はず顔を押しへるを慮どうしたのです英どうもしませんがわ
 なたが急に見えたから、イエれ出になるのと知て居ります、待
 であまりませんでしたヨ、盛本當か英併し私は今までこそかく
 して居ました、が、實は正當の儀式を履んで結婚した比留間公爵
 の夫人です、それゆゑ比留間が死にでもしないうちは、どうもわ
 なたの仰せに従ふことが出来ません、此幾月といふもの何處へ
 往つたか影も見えず、私に心配でなりません、あなたに承れば
 容子が分るだらうと思ふて、廣イヤそんなことは是れまでも聞
 きました、併し比留間之最早あなたを愛して居ないではないか、
 そして珊瑚のものは散り、にあって、比留間は自殺したら
 うとの風聞た英風聞では確かなりません、「確かに此處に居る
 ヲ」と言ひつゝ出来りしは比留間公爵なり、「エ、」と二人が
 驚く中へ立て、比留間君断りなく人のうちへ這入て何をして居

假面美人英子の住居なりける、英子は十日の猶豫を廣政に求め
 其間に比留間へ手紙を送り、愈々比留間がこれのれを棄てたる容
 子ならば、廣政に身を任せんと心を定め、幾度か手紙を送り、或ひ
 は侍女を遣はせしむ、比留間は何處へ行さしか影だも見せず、世
 上は愈々騒しくなり行きて、革命黨の人々も散り、になれる
 由聞きたれば、女心の心細く今は全く廣政に身を任さんか、さり
 とて此怖ろしき顔を見せなば、いかに廣政たりとも直ちに愛想
 をつかすべし、比留間が決して見るなど言ひしわが顔なれど、死
 面美人とわだ名されたるわが此顔は果してどんなだらう、どう
 せ一度はわれながら愛想をつかさすべし、顔、ソレ、今日、は約束
 の十日もされた日、定めし廣政のぬしが来るであらうに、先づ此
 顔を見て置んと、今や鏡に手を掛けて片手に假面を取外さんと
 するとき、庭口よりヌツと入り来りしは廣政なり、アツと言ひて